

仙台市文化財調査報告書第221集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(11)

——富沢遺跡第95～99・101次発掘調査報告書——

1997年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

富沢・泉崎浦・山口遺跡(11)

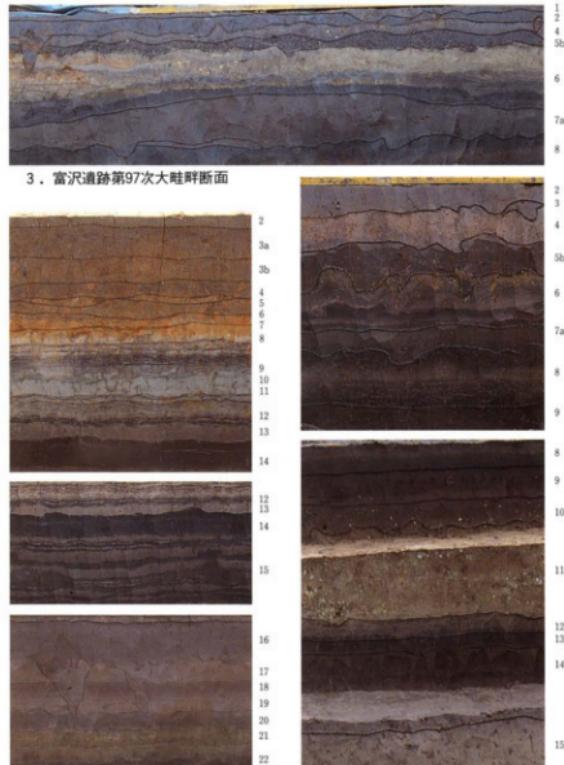
——富沢遺跡第95~99・101次発掘調査報告書——

1997年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会



1 . 富沢遺跡第95次



2 . 富沢遺跡第101次



4 . 富沢遺跡第96次



5 . 富沢遺跡第97次



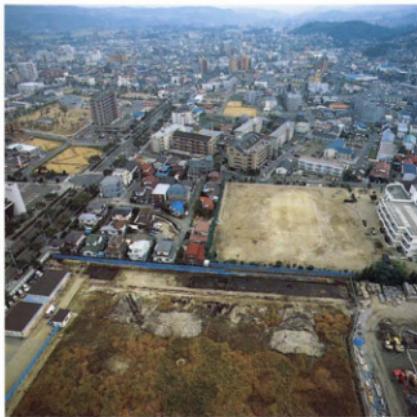
1a
1b
3
5
6
7
8
9a
9b
10
11



16



16
17
20



調査区遠景



I区西壁層序①

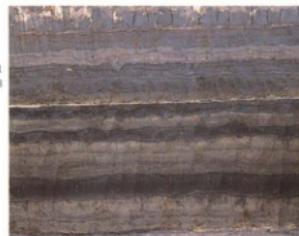


7. 富沢遺跡第99次

I 区西壁層序②



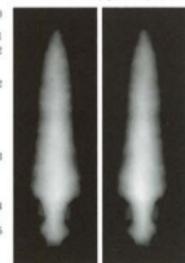
I区東壁層序



II区東壁層序



同レントゲン



7. 富沢遺跡第99次

序 文

仙台市では、昭和57年に山口遺跡において初めて水田跡を検出しました。次いで、同年より開始した高速鉄道（仙台市営地下鉄）の試掘調査により、富沢地区においても広大な範囲に水田跡が存在することが確認され、翌年には「富沢水田遺跡」としてその範囲を登録しました（昭和62年に「富沢遺跡」に改称）。

富沢遺跡は、仙台市の南西部の富沢、泉崎、袋東、長町南等に広がる総面積約90haにも及ぶ水田跡を中心とした遺跡で、名取川と広瀬川に挟まれた沖積平野に立地しています。当遺跡は、昨年度に至るまで94次に渡る調査が各所で実施され、弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されています。このうち、弥生時代の水田跡は東北地方中部における稻作農耕の起源に迫る貴重な資料を提示し続けています。また、弥生時代の水田跡の下層からは縄文時代の遺構や遺物が確認され、さらにその下層からは約2万年前の最終氷河期の人間の生活の様子や自然環境そのものが生々しい状態で発見されています。

しかし、この富沢地区は昭和50年代の土地区画整理事業を契機として年を追う毎に開発が進み、とりわけ昭和63年の地下鉄の開業により、一層都市化が進んでいるところです。このような中にあって、平成8年度には富沢地区に所在する富沢遺跡において7件の発掘調査を実施しました。本報告書は、そのうち6件の調査成果をまとめたものであります。

先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、地底からのメッセージを後世に残し伝えていくことは私たちに課せられた責務と考えています。ここに報告する調査成果が、こうした意味で研究者のもならず、市民の皆様に広く活用され文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに本報告書刊行に際しましては多くの方々のご協力、ご助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序といたします。

平成9年3月

仙台市教育委員会

教育長 堀 篠 克 彦

例　　言

1. 本報告書は民間の受託事業・仙台市関連事業に関わる富沢遺跡第95次～99次・101次調査の調査報告書である。
2. 本書の作成・編集は、五十嵐康洋、吉岡恭平が主に行い、各調査担当者と隨時協議しながら行った。
3. 本文の執筆担当は以下のとおりである。

第1章　　：五十嵐康洋

第2章第1節：我妻　仁

第2節：吉岡恭平

第3節：吉岡恭平

第4節：五十嵐康洋

第5節：佐藤　洋、五十嵐康洋

第6節：吉岡恭平

第3章　　：（株）古環境研究所

4. 自然科学分析に関しては、（株）古環境研究所にお願いした。
5. 発掘調査、本書の作成に関して、下記の方々・研究機関のご指導・ご助言を賜った。記して、感謝の意を表す
る次第である。（順不同・敬称略）
須藤 隆、手塚 均、太田昭夫、斎野裕彦、中富 洋、荒川悌二、東北歴史資料館
6. 本発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠している。
2. 本文・図中で使用した方位は、全て真北で統一している。
3. 図中の座標値は、平面座標系Xによる。
4. 標高値は、海拔高（T、P）を示している。
5. 遺構名の略号として以下のものを使用した。

S B：掘立柱建物跡、D S：溝跡、S K：土抗跡、S X：性格不明遺構、P：柱穴、小柱穴

6. 遺物の登錄には以下の略号を使用した。

A：繩文土器、B：弥生土器、C：土師器（ロクロ不使用）、D：土師器（ロクロ使用）、E：須恵器
I：陶器、J：磁器、K：石製品、L：木製品、N：金属製品

7. 土師器実測図面のスクリントーンは、黒色処理を表している。
8. 遺物観察表中の法量（　）の数値は、岡上復元値を表している。
9. 本文中の「擬似珪畔B」は、水田珪畔直下層（自然堆積層）上面に認められる珪畔上の高まりを示している（斎
野他：1987）。
10. 本文中での「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、現在、十和田a火山灰T o-aと同定されており、降下
年代は915年初夏とされている（町田他：1981、1996）。

本文目次

第1章 富沢遺跡のあらまし	1
第2章 調査成果	5
第1節 富沢遺跡第95次調査	5
第2節 富沢遺跡第96次調査	27
第3節 富沢遺跡第97次調査	35
第4節 富沢遺跡第98次調査	59
第5節 富沢遺跡第99次調査	71
第6節 富沢遺跡第101次調査	131
第3章 分析・同定	135
第1節 富沢遺跡第95次・96次・97次・98次・99次調査の火山分析	135
第2節 富沢遺跡出土資料の放射性炭素年代測定	138
第3節 富沢遺跡第95次・96次・97次・98次・99次調査のプラントオパール分析	139

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 富沢遺跡全体図	3
(富沢遺跡第95次調査)	5
第1図 調査区位置図(1) 調査区位置図(2)	5
第2図 グリッド配置・調査状況平面図	6
第3図 東壁・北壁・南壁断面図	8
第4図 2層上面遺構平面図	9
第5図 SB01・SB02 平面・断面図	10
第6図 SB03 平面・断面図	11
第7図 SD01 平面・断面図	11
第8図 SD01 出土遺物	12
第9図 小溝状遺構帯平面図	12
第10図 SD02・03・04・05・06 平面・断面図	14
第11図 6層出土遺物	15
第12図 SD07 平面・断面図	16
第13図 SD08 平面・断面図	17
第14図 その他の出土遺物	18
(富沢遺跡第96次調査)	27
第1図 調査区位置図(1) 調査区位置図(2)	
調査区位置図(3)	27
第2図 基本層序断面図	29
第3図 SX01・SD01 平面・断面図	30
第4図 24層樹木片	31
第5図 10層水田跡	31
第6図 出土遺物	32
(富沢遺跡第97次調査)	35
第1図 調査区位置図	35
第2図 調査区配賦図・区域整理前の状況	35
第3図 基本層序七色記	36
第4図 2層平面・断面図	37
第5図 4層水田跡平面・断面図	39
第6図 5b 層水田跡平面・断面図	39
第7図 6層上面遺構平面図	41
第8図 7a 層水田跡平面・断面図	41
第9図 7層出土遺物	42
第10図 8層上面遺構平面・断面図	43
第11図 SX01 平面・断面図	43
第12図 16層遺物分布図	44
第13図 16層出土遺物(1)	45
第14図 16層出土遺物(2)	46
第15図 その他の遺物	46
第16図 97次周辺生樹形埋式削水田(1/2500)	48
(富沢遺跡第98次調査)	59
第1図 調査区位置図	59
第2図 調査区配賦図・区域整理前の状況	59
第3図 基本層序七色記	60
第4図 2層平面・断面図	61
第5図 3層平面図	62
第6図 5層平面・断面図	63
第7図 9a 層平面・断面図	64

第8図 出土遺物	65	第28図 III区14層水田跡平面・断面図	108
(富沢遺跡第99次調査)	71	第29図 I区14層水田跡出土遺物平面図	109
第1図 調査区位置図	71	第30図 SD10・11平面・断面図	110
第2図 調査区設定図	72	第31図 SD12平面・断面図	111
第3図 調査地付近の土地利用変遷図	74	第32図 14層出土遺物実測図①	112
第4図 昭和30年当時の特殊調査地図	75	第33図 I区16層上面平面図	113
第5図 層序模式図	76	第34図 I区SD13・14平面・断面図	115
第6図 I区基本層序	77	第35図 35層出土遺物	117
第7図 I・II区基本層序	79	第36図 31層出土遺物	117
第8図 III区北壁基本層序・土層記載	81	第37図 1層他出土遺物①	118
第9図 III区3層水田跡平面・断面図	83	第38図 1層他出土遺物②	119
第10図 II区5a層水田跡	84	(富沢遺跡101次調査)	131
第11図 7a・8・11・12a層全体図	85	第1図 調査区位置図(1)	131
第12図 I区7a・8層水田跡平面図	87	第2図 調査区位置図(2)	131
第13図 II区7a層水田跡平面・断面図	89	第3図 調査区全体図	132
第14図 III区7a層水田跡平面・断面図	90	第4図 基本層序断面図(西壁)	132
第15図 7a層水田跡出土遺物	91	第5図 SD01平面・断面図	132
第16図 II区8層平面・断面図	92	(火山分析)	135
第17図 III区8層水田跡平面図	93	図1 95次東壁のプラント・オパール分析結果	144
第18図 I区SD01・02平面・断面図	94	図2 96次南壁のプラント・オパール分析結果	145
第19図 11層上面溝跡平面・断面図	95	図3 97次A地点のプラント・オパール分析結果	146
第20図 II区SD08・09平面・断面図	98	図4 97次B地点のプラント・オパール分析結果	147
第21図 I区12・14層水田跡平面図	99	図5 97次C地点のプラント・オパール分析結果	148
第22図 II区12層水田跡平面・断面図	101	図6 97次D地点のプラント・オパール分析結果	149
第23図 III区12層水田跡平面・断面図	102	図7 97次E地点のプラント・オパール分析結果	150
第24図 I区12a・13層出土遺物平面図	104	図8 98次調査のプラント・オパール分析結果	151
第25図 12層出土遺物実測図	105	図9 99次調査のプラント・オパール分析結果	152
第26図 13層出土遺物実測図	106	図10 99次III区北壁のプラント・オパール分析結果	153
第27図 14・16層全体図	107		

挿 表 目 次

(富沢遺跡95次調査)	5	(富沢遺跡101次調査)	131
第1表 基本層序注記表	7	第1表 基本層序注記表	132
(富沢遺跡96次調査)	27	(分析・同定)	135
第1表 基本層序注記表	28	表1 富沢遺跡第95次・96次・97次・98次・99次調査の 屈折率測定結果	137
(富沢遺跡97次調査)	35	表1 富沢遺跡第95次調査のプラント・オパール分析結果	142
第1表 基本層序注記表	36	表2 富沢遺跡第96次調査のプラント・オパール分析結果	142
(富沢遺跡98次調査)	59	表3 富沢遺跡第97次調査のプラント・オパール分析結果	142
第1表 基本層序注記表	60	表4 富沢遺跡第98次調査のプラント・オパール分析結果	143
(富沢遺跡99次調査)	71	表5 富沢遺跡99次調査のプラント・オパール分析結果	143
第1表 基本層序注記表	80		

写真図版目次

(富沢遺跡第95次調査)		5
写真 1	1. 東壁断面.....	20
	2. 深掘東壁断面.....	20
	3. 深掘東壁最下部断面.....	20
	4. 調査区近景（北から）.....	20
写真 2	1. 建物跡全景（南から）.....	21
	2. SB01 P 8 断面（西から）.....	21
	3. SB01 P 1 断面（西から）.....	21
	4. SB01 P 3 断面（西から）.....	21
	5. SB01 P 1 横7.....	21
写真 3	1. 4a 層上面小溝状遺構群（南から）.....	22
	2. 4b 層上面シマ状遺構（南から）.....	22
	3. 4b 層牛足跡.....	22
	4. 4b 層牛足跡（3のひとつを掘り上げ）.....	22
写真 4	1. 6層 SD02~06 全景.....	23
	2. 8c 層 SD07 全景.....	23
	3. 9c 層 SD08 全景.....	23
写真 5	1. SD01 断面（西壁）.....	24
	2. SD02 断面（南から）.....	24
	3. SD03 断面（南から）.....	24
	4. SD07 断面（南から）.....	24
	5. SX01 断面（南から）.....	24
写真 6	1. 12層 SX01 全景（南から）.....	25
	2. 13層 小河川跡（南から）.....	25
	3. 完盤全景（南西から）.....	25
写真 7	出土遺物.....	26
(富沢遺跡第96次調査)		27
写真 1	1. 南壁断面.....	33
	2. 調査区近景（西から）.....	33
	3. SX01（南から）.....	33
	4. SX01 断面（西壁）.....	33
	5. 3層下部地割れ状（南から）.....	33
	6. SD01（南から）.....	33
写真 2	1. 10層水田跡（南から）.....	34
	2. 16層樹根底（南から）.....	34
	3. 24層樹木片（南から）.....	34
	4. 出土遺物.....	34
(富沢遺跡第97次調査)		35
写真 1	1. 東壁断面（N 付近）.....	49
	2. 南壁断面（E21・22付近）.....	49
	3. 深掘南壁断面.....	49
	4. 調査区近景（西から）.....	49
写真 2	1. 4層水田跡全景（西から）.....	50
	2. 4層水田跡西半（南から）.....	50
	3. 4層水田跡東半（南から）.....	50
写真 3	1. 5b 層水田跡蛙群確認状況（南から）.....	51
	2. 5b 層水田跡蛙群検出状況（南から）.....	51
	3. 5b 層水田跡東半（南から）.....	51
写真 4	1. 6層上面畦状遺構（南から）.....	52
	2. 7a 層水田跡西半（南から）.....	52
	3. 7a 層水田跡全景（東から）.....	52
写真 5	1. 7a 層水田跡西半（南東から）.....	53
	2. 7a 層水田跡西半（南から）.....	53
	3. 7a 層水田跡東半（南から）.....	53
写真 6	1. 8層 SD02・SX01（南から）.....	54
	2. 8層 SX01（北西から）.....	54
	3. 7層 SD01 断面（南から）.....	54
	4. 8層 SD03 断面（西から）.....	54
写真 7	1. 16層土器出土状況.....	55
	2. 16層石皿出土状況.....	55
	3. 深掘区全景（北東から）.....	55
写真 8	1. 4層水田跡畦畔 2南壁断面.....	56
	2. 5b 層水田跡畦畔 2東側南壁断面.....	56
	3. 7a 層水田跡畦畔 1東壁断面.....	56
	4. 7a 層水田跡畦畔 3南壁断面.....	56
	5. 7a 層水田跡畦畔 4西側南壁断面.....	56
写真 9	出土遺物（1）.....	57
写真10	出土遺物（2）.....	58
(富沢遺跡第98次調査)		59
写真 1	1. 9a 層水田跡検出状況確認（東より）.....	67
	2. 9a 層水田跡検出状況確認（東より）.....	67
	3. 22層腐植層全景（南より）.....	67
写真 2	1. SD02 全景.....	68
	2. 3層水田跡検出状況（東より）.....	68
	3. 北壁 1段目セクション①（南より）.....	68
	4. 北壁 2段目セクション②（南より）.....	68
	5. 北壁腐植層（南より）.....	68
	6. 出土遺物.....	68
写真 3	1. 18層トミサワトウヒ（結果）.....	69
	2. 18層グイマツ（結果）.....	69
	3. 18層グイマツ（健葉+枝）.....	69
	4. 22層グイマツ（枝+健葉）.....	69
	5. 22層トミサワトウヒ（結果）.....	69
	6. 24層トミサワトウヒ（結果）.....	69
	7. 25層トミサワトウヒ（結果）.....	69
(富沢遺跡第99次調査)		71
写真 1	1. I 区7a 層水田検出状況（南より）.....	122
	2. I 区 SD02 全景（東より）.....	122

3.	I区 SD03 完掘（東より）	122	2.	II区 SD12 全景（南より）	125
4.	I区 SD04・05 完掘（東より）	122	3.	III区 2層水田跡検出状況（南より）	125
5.	I区 SD06 完掘（東より）	122	4.	III区 2層水田跡上部遺物（北より）	125
6.	I区 SD07 完掘（東より）	122	5.	III区 7層水田跡検出状況（南より）	125
7.	I区12層水田確認状況北部アップ（南より）	122	6.	IV区 8層水田検出状況（南より）	125
8.	I区12層水田検出（南より）	122	7.	IV区12層水田確認状況（南より）	125
写真2	1. I区12層土器出土状況（東より）	123	8.	III区12層水田検出状況（南より）	125
	2. I区北部土器出土状況（南より）	123	写真5	1. III区14層水田全景（南より）	126
	3. I区13層石器出土状況（西より）	123	2.	II区東壁セクション（西より）	126
	4. I区14層水田確認状況（南より）	123	3.	I区西壁セクション（東より）	
	5. I区14層水田北部アップ（南より）	123	C・D 2グリット付近	126	
	6. I区14層水田北部土器（東より）	123	4.	7a 層水田上空より	126
	7. I区 SD13・14擬似蚌群（南より）	123	5.	III区35層下部石器出土（東より）	126
	8. I区14層水田下の擬似蚌群（B）（南より）	123	6.	IV区北壁セクション（南より）	126
写真3	1. I区 SD11 全景（南東より）	124	7.	I区東壁セクション（西より）	126
	2. I区16層上面弥生土器（東より）	124	8.	7a 層水田北西上空より	126
	3. I区 SD13 全景（東より）	124	写真6	出土遺物（1）	127
	4. I区 SD14 全景（西より）	124	写真7	出土遺物（2）	128
	5. II区 SD08・09 完掘（北より）	124	写真8	出土遺物（3）	129
	6. II区12層水田確認（北より）	124	写真9	出土遺物（4）	130
	7. II区12層水田全景（南より）	124		（宮沢遺跡第101次調査）	131
	8. II区13層出土遺物（東より）	124	写真1	西壁断面	133
写真4	1. II区14層上面全景（南より）	125	写真2	SD01 東壁断面（西から）	133

第1章 富沢遺跡のあらまし

富沢遺跡は仙台市の南東部に位置し、仙台市太白区長町南・富沢・泉崎等に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた冲積地（郡山低地）の西側にあり、北西を丘陵、他を自然堤防で囲まれた背後湿地を中心に立地している。遺跡の総面積は約90haにも及ぶ。現在は土地区画整理事業により盛土がなされており、大部分は住宅地となっている。20年前まで一帯は主に水田として利用してきた。盛土以前の地形は北西から南東方向に緩やかに傾斜して下がっており、その標高は9~16mである。

昭和57年に山口遺跡において仙台市では初めて水田跡が検出されたが、その後、隣接する富沢地区においても高速鉄道に関わる試掘および本調査で、水田跡の存在が確認された。このため昭和58年に水田跡の存在が予測される後背湿地を地形的特徴とする一帯は「富沢水田遺跡」として登録された。その後、遺跡は居住域などの発見によって昭和62年には「富沢遺跡」と改称され、平成2年には北東部において遺跡範囲の拡大が行なわれている。また、それまで集落跡との性格付けがなされてきた泉崎浦遺跡においても水田跡が検出されたことで、平成3年にはその範囲をも富沢遺跡に包括して扱うこととした。

富沢遺跡では昨年度まで91次に及ぶ調査が実施されてきた。そしてこれまで多くの地点において上層からは弥生時代から近世までの各時代の水田跡が重層的に検出されている。また、弥生時代の水田跡のさらに下層においても、数地点において縄文時代の遺構や遺物が発見されている。

昭和63年には縄文時代の遺構面のさらに下層から、富沢遺跡では初めて後期旧石器時代の遺構・遺物が発見された。これは第30次調査での調査成果であるが、ここからはまた、樹木や植物化石、動物の骨、昆蟲化石なども多数検出されており、人類の生活跡とそれをとりまく森林などの自然環境が共に発見されたことで、国内外の注目を集めている。その後の調査でもこの30次調査周辺の数地点において旧石器時代の樹木群が検出されており、こうした森林跡が富沢遺跡の北部を中心広がることがわかっている。

山口遺跡は富沢遺跡の南に隣接し、名取川支流の旧荒川北岸の自然堤防上に立地している。遺跡面積は約25haであり、遺跡範囲の北部では、富沢遺跡から続く後背湿地部分をも含んでいる。主に縄文時代・奈良時代・平安時代の集落跡として登録されている遺跡である。これまで14次に渡る調査が実施されているが、その結果、自然堤防上部分では上記時代の住居跡などが、後背湿地部分では弥生時代から近世までの水田跡がそれぞれ検出されている。

なお、富沢いせきと山口遺跡の地形・地質および歴史的環境に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野他：1987）、富沢遺跡第30次調査報告書（太田他：1991）に詳しい記載があるので、それらを参照されたい。

次数	所在地	調査の原因	調査期間	調査面積	調査概要（主な発見遺構）	調査員
95	泉崎1丁目21-8	寮建設	平成8年4月10日 ～6月14日	252m ²	建物跡・溝跡・畠跡	吉岡恭平・我妻仁
96	長町南3丁目15-3	共同住宅建設	平成8年6月26日 ～8月7日	133m ²	溝跡	吉岡恭平・我妻仁
97	泉崎1丁目20-2	共同住宅建設	平成8年9月5日 ～11月26日	240m ²	弥生・平安・中世の水田跡・ 溝跡	吉岡恭平・我妻仁
98	長町7丁目211	テナントビル建設	平成8年6月19日 ～7月29日	102m ²	弥生・近世の水田跡	佐藤洋・五十嵐康洋
99	長町7丁目401	道路建設	平成8年8月19日 ～12月18日	1.026m ²	弥生・古墳・平安～中世・近 世の水田跡	佐藤洋・五十嵐康洋 伊藤孝行
101	長町5丁目85-2	共同住宅建設	平成8年8月1日 ～8月2日	13m ²	溝跡・水田跡（断面観察）	吉岡恭平



番地名	詳細	立地	番地名	詳細	立地	地代	
二丁目	駅前	丘陵斜面	45	光畠	篠路・水田・島・島	自然透防・後背地	穀戸～平野
2 東山一丁目	駅東	丘陵斜面	46	大久保	登谷・東落・島	自然透防	穀戸～平野
3 東山二丁目	駅東	丘陵斜面	47	北野	丘地地	自然透防	谷戸～平野
4 二丁目横六尋	駅東	丘陵斜面	48	下ノ郷	丘陵	自然透防	丘陵
5 五丁目横六尋	駅東	丘陵	49	上ノ郷	篠路・笠置・島・島	自然透防	穀戸～丘陵
6 伊達古道	弓削山付近	丘陵緩傾	50	西野	篠路・清水	自然透防	谷戸
7 伊達屋敷跡	新居地	丘陵斜面	51	丘陵	篠路・里原	自然透防	谷戸～中里
8 梶原一丁目	駅東	丘陵斜面	52	山形六丁目	丘地地	自然透防	谷戸～平野
9 壱ノ口	駅南	丘陵	53	山形南	丘地地	自然透防	谷戸～平野
10 三丁目	駅南	丘陵	54	御前	丘地地	自然透防	谷戸～平野
11 土手内宿跡	駅東	丘陵斜面	55	御前村	島	自然透防	谷戸～中里
12 土手内宿跡	駅東	丘陵	56	都山	丘谷・篠路・水田・島	自然透防・後背地	穀戸～平野
13 土手内宿跡	駅東	丘陵斜面	57	北城城跡	駿谷・生落・水田	自然透防・前背地	穀戸～中里
14 破風板	駅南	丘陵斜面	58	糸条	丘地地	自然透防	丘陵～平野
15 道後温泉跡	駅東	丘陵斜面	59	的場	丘地地	自然透防	舟原～平野
16 三日市志津跡	円満	丘陵	60	鷹ノ瀬	丘地地	自然透防	谷戸～平野
17 金武山跡	望	丘陵斜面	61	次ノ上	水田	礁石瀬地	谷戸～中里
18 金武山城跡	円満	丘陵	62	次ノ上日	丘地地	自然透防	谷戸～平野
19 鹿野山跡	駅南	丘陵斜面	63	下ノ上	丘地地	自然透防	古戸～平野
20 駒形古跡	弓削山付近	丘陵	64	忍城城跡	篠路・城壁・河床	自然透防	谷戸～中里・平野
21 砥家	駅東	丘陵	65	蓮沼岸	水田・堀川	自然透防	谷戸～平野
22 砥家	駅東	丘陵	66	小寺	丘谷	自然透防	谷戸～中里
23 谷	丘陵	丘陵斜面	67	神明	丘谷・篠路・島・島	自然透防・前背地	穀戸～中里
24 野	駅南	丘陵	68	御前1	丘地地	自然透防	谷戸～平野
25 盆沢上ノ台	駅東	丘陵緩傾	69	御前2	丘地地	自然透防	谷戸～平野
26 仙人	駅東	丘陵緩傾	70	神明	丘地地	自然透防	谷戸～平野
27 駒形山跡A	駅東	丘陵緩傾	71	津波城跡	城跡	自然透防	穀戸～中里
28 駒形山跡B	駅東	丘陵緩傾	72	西柳越	丘地地	自然透防	谷戸～平野
29 乗用	駅東	丘陵緩傾	73	日向城跡	駿谷	自然透防	中里
30 大久保	駅東	丘陵緩傾	74	日向	丘地地	自然透防	谷戸
31 露武門町	駅東	丘陵緩傾	75	大原山道	丘地	自然透防	谷戸
32 露武門跡	駅東	丘陵緩傾	76	土呂川	丘地	自然透防	谷戸～谷底
33 露武門跡	駅東	丘陵緩傾	77	利根川	丘地地	自然透防	谷戸～平野
34 露武	駅東	丘陵緩傾・丘陵・島・島	78	八ノ口	丘地地	自然透防	谷戸～中里
35 露武前	駅東	丘陵・小田・島	79	御前	自然健防	舟原～平野	
36 露武古道	駅東	丘陵緩傾	80	御前上	丘地地	自然透防	舟原～平野
37 石切	駅東	丘陵緩傾	81	御前村芭引野	芭引野	自然透防	中里
38 下ノ内	駅東	丘陵緩傾	82	御前古賀	内燃	自然透防	谷戸
39 伊豆山	駅東	丘陵緩傾	83	二郎ヶ原	筋力曲河床	自然透防	谷戸
40 正丸田谷跡	円満	丘陵緩傾	84	一郎ヶ原	内燃	自然透防	谷戸
41 正丸田谷跡	円満	丘陵緩傾	85	余呂八幡宮	内燃	自然透防	谷戸
42 大原山古跡	円満	丘陵緩傾	86	御前社二重	内燃	自然透防	谷戸
43 大原山	駅東	丘陵緩傾	87	下ノ内子	-	自然透防	谷戸
44 銀泉	駅東	丘陵緩傾	88	下ノ内海	篠路・水田・島・島	自然透防・前背地	穀戸～近野

周辺の滝跡及び地名表 (国土地理院1:25,000「仙台東南部」) を複数縮小



第1図 富沢遺跡全体図（数字は調査区次数を赤丸は平成8年度の調査地点を示す）

第2章 調査成果

第1節 富沢遺跡第95次調査

1 調査に至る経緯

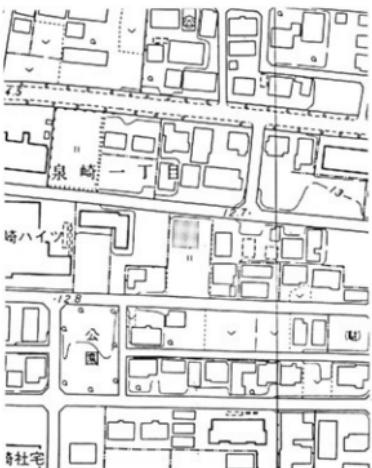
平成7年2月23日付けで、工藤 寿氏によりRC6建寄宿舎建設の発掘届が提出されたが、当教育委員会では平成7年度の調査予定は既に決定していたため、平成8年度の発掘調査として受託することでご了解を得たものである。

平成8年2月26日、発掘調査の実施に先立ち申請者側と第1回目の協議を持った。内容は調査時期、期間、契約額、事前の準備事項などであり、以後も打ち合せを重ね契約を交わし、4月10日から調査を開始した。

2 調査の方法

調査箇所は富沢遺跡の南西部に位置する。付近は数年前までは水田として利用されてきたが、現在は約0.7mの盛土がなされ、大半が住宅地となっている。区画整理以前の地形を第1図に示した。それによれば調査箇所付近の旧地形は周辺と比較すると、北西から南東にかけて傾斜している。

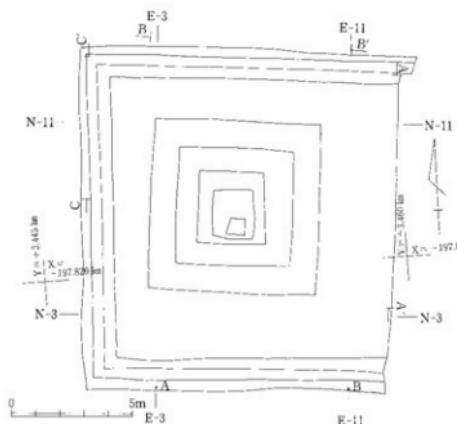
今回の調査対象面積は607m²であるが、その中に南北14m、東西18m、面積252m²の調査区を設定した。遺構の測量は杭A、Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -197.824697km, Y = +3.449255km、杭B：X = -197.825304km, Y = +3.457231km）。また、杭A-B線上の杭Aから西へ3mの地点を基点とし（N=00、E=00）、1m間隔で南北方向をN01-N11、東西方向をE01-E11で表記し、調査区内における各遺構などの位置関係を示した（杭A：N00・E03杭B：N00・E11）。検出された遺構は、8m間隔に設けた基準杭を中心にして水糸を1mメッシュに組み、それらを基準線として作図し、実測図の縮尺は1/20を基準とした。写真記録には35mmカメラを2台使用し、モノクローム・カラーリバーサルの2種で撮影した。土壤サンプリングはプラントオバル分析用に2~12層、火山灰分析用に19層中で行った。調査は平成8年4月10日から調査員2名、スタッフ26名の体制で開始し、盛土および旧耕作土である1層



第1図 調査区位置図(1)



第1図 調査区位置図(2)



第2図 グリッド配置・調査状況平面図

は重機により除去したが、1層の直下に遺構の存在が予想されたため、そこから人力による調査を開始した。なお、調査区周囲には土層観察および排水路の側溝を設けた。12層中までは、調査区全面の精査を行ったが側溝断面により下層の状況を観察した結果、これより下層では自然堆積層が連続する状況が確認され、遺構の存在する可能性は低いと考えられた。したがって、これ以後の調査は、第30次調査（田代他：1991）などで検出されている森林跡を伴う旧石器時代の有無の確認を目的とすることとし、5月27日調査区を一辺7mに縮小して遺構の確認調査を実施した（最下層では0.8×0.7m）。深堀に関しては調査の安全性に配慮しながら、該当層までできる限り広い面積を確保して調査を行うこととした。

た。6月12日深度5.2m（標高約6.8m）で25層の砂礫層を確認した段階で、これ以上の掘り下げは危険と判断されたため深堀を終了した。その後、最終的な土層観察と断面図の作成、写真撮影を行い、発掘調査の一切を終了したのは6月14日である。

3 基本層序

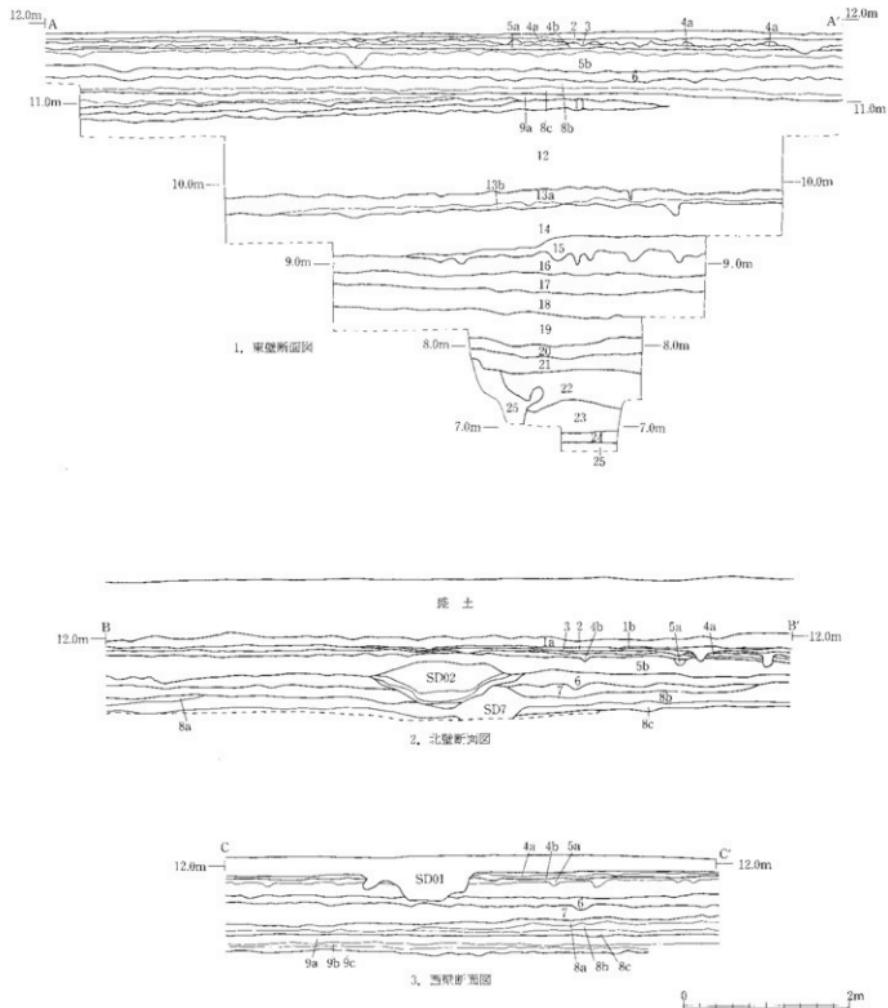
今回の調査では平均0.7mの盛土直下1層上面から約5.1mの掘り下げを行った。この間確認された層は大別で25層、細別で32層を数える。これらの層は、おおまかに1層から8b層までの砂・シルト、8c層から9b層までの粘土、10層以下の砂・砂質シルトに大別される。本調査区の層序は、砂および砂質シルトが主体となっており、粘土や泥炭質粘土が主体となることが多い他の調査地点における層順と際立った違いが認められる。

1～3層はシルトおよびシルト質粘土で1層は旧耕作土、2・3層は中世以降の層で、3層は畑の耕作土の可能性がある。4a・4b層は平安時代の層と考えられる。4a層の下部から4b層の上部にかけては10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰のブロックが検出される。4b層は水田の耕作土の可能性が考えられる。5a・5b層は砂を主体とした風化凝灰岩粒を多量に含んだ層で、5b層は層厚10～26cmと比較的の厚い層である。6層は黒褐色の砂質シルトで弥生土器を含み弥生時代と考えられる。7・8a・8b層は砂および砂質シルトである。7層は比較的西側に厚く堆積する。8a層は西側に部分的に、8b層は東側にやや厚く堆積している。8c層から9b層は粘性の強い粘土で、8c層はとくに粘性が強く下部には薄い黒色の有機物層を含んでいる。9c層から11層は砂・砂質シルトである。9c層は10層への漸移層で南東部を除くほぼ全域に堆積し、10層は北半に11層はほぼ全域に堆積している。12層から14層は黒色粘土質シルトの13a層（厚さ20cm前後）を挟んだ厚い砂層で、とくに12層は層厚が1mにも及ぶ。ともに部分的に有機物の堆積が見られ下部に砂礫層も含んでいる。グライ化は12層から漸次進行し19層以下から顕著となる。15層は粘性の強い黒色の粘土で下面には根の痕跡とみられる凹凸がある。16層はシルト質粘土で未分解の樹木片を含んでいる。この樹木片は粘土質シルトの17層にも見られる。18層から21層は砂質シルトである。18・19層には火山灰状のものが根の痕跡に見られるが、18層のほうが顕著である。20層は濃い緑灰色部分が霜降り状にみられ、他層に比べやや硬くなっている。22層から25層は砂層で、23層はオリーブ黒色のシルト質粘土と細砂がラミナ状になり、

未分解の小樹木片や植物遺体を多く含んでいる。この層が30次調査での旧石器時代の層に相当する可能性を考えられたため、樹木片をサンプリングし放射性炭素年代測定を行っている。25層は砂礫層で粗砂を主体として径5cm程度の礫を含んでいる。砂礫層は標高6.8~7.9mで約1mの高低差をもって検出されている。沖積地の基底と考えられる砂礫層は建設工事に先立って実施されたボーリング調査によって確認されているが、砂礫層上面の深度は盛り土上面から4.9mで推定標高は約7m前後であるので、25層が基底の砂礫層と考えられる。以上基本層序について記したが、本調査区は位置的に富沢遺跡第21次調査泉崎浦地区（渡辺：1986）や泉崎浦遺跡第3次調査（主査：1988）と近接するため基本的な層序の比較が可能で類似している。

第1表 基本層序註記表

層序	土色	土性	粘性	しまり	層厚(cm)	備考
1	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	やや有	有	2~10	耕作土。下部に無分の集積あり。
2	にじむ黄褐色 10YR4/3	シルト	無	有	4~6	
3	湖褐色 10YR3/2	シルト質粘土	無	有	5~10	下部に灰白色火山灰を含む。
4a	灰黄褐色 10YR6/2	シルト	無	有	2~6	上面に火山灰を含む。
4b	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	無	有	2~11	種1~2cmの風化凝灰岩粒を多量に含む。
5a	黑褐色 10YR2/2	砂質シルト	無	有	10~28	種1~2cmの風化凝灰岩粒を多量に含む。
5b	にじむ黄褐色 10YR5/4	砂	無	有	10~16	遺物を若干含む。
6	墨褐色 10YR2/2	砂質シルト	無	有	10~20	
7	褐色 10YR4/1	粗砂	無	有	1~10	側面に部分的に堆積する。
8a	暗赤褐色 2.5YR4/2	砂質シルト	やや有	無	8~22	SDTの方向に薄く堆積する。
8b	オリーブ褐色 2.5Y4/4	砂	無	無	4~12	下部に薄い黒色の有機物層を含む。
8c	暗灰褐色 2.5Y4/2	粘土	かなり有	無	6~14	
9a	墨褐色 10YR2/2	粘土	有	無	1~6	
9b	灰褐色 5Y4/2	粘土	有	無	1~10	10層への堆積層。
9c	暗オリーブ褐色 2.5Y3/3	砂質シルト	無	有	2~20	凝灰岩粒を含む。
10	灰オリーブ 7.5Y4/2	砂質シルト	やや有	有	2~12	
11	黒褐色 10YR2/3	シルト	無	有	2~12	
12	オリーブ灰色 2.5GY5/1	細砂から粗砂	無	有	80~100	下部に砂礫層。部分的に有機物の互層を含む。
13a	黒色 7.5YR1.7/1	粘土質シルト	無	無	6~26	
13b	オリーブ黒色 5Y3/1	砂	無	有	4~20	13a~14層への堆積層。
14	灰オリーブ色 7.5Y4/2	砂	無	有	26~52	下部に有機物の堆積層あり。砂礫層を含む。
15	湖褐色 2.5Y2/1	黒色粘土	有	無	1~34	
16	灰褐色 7.5Y4/1	シルト質粘土	有	無	12~30	種1~4cmの樹木片を含む。
17	灰色 10Y4/1	粘土質シルト	やや有	無	18~28	種1~4cmの樹木片を含む。
18	灰褐色 7.5Y4/1	砂質シルト	無	無	20~32	白色火山灰状のものを根の直隣状に含むが18層よりも少ない。
19	暗緑灰色 7.5GY4/1	砂質シルト	やや有	無	22~42	白色火山灰状のものを根の直隣状に含むが18層よりも少ない。
20	暗緑灰色 5G4/1	砂質シルト	若干有	有	12~20	緑灰色部分がしもり状に見える。他の層に比べ、ややかたい状態である。
21	暗オリーブ灰色 5GY4/1	細砂から砂質シルト	やや有	32~44	糞十の有機物の層を含む。	
22	オリーブ褐色 5Y3/1	シルト質粘土	やや有	無	16~60	自然堆積層。ラミナ状の互層。未分解の小樹木片、植物遺体を多く含む。
23	オリーブ褐色 2.5GY4/1	粗砂	やや有	無	10~14	
24	暗緑灰色 10G3/1	粗砂	無	無	粗砂を基盤に径0.5~5cmの礫を含む。	
25	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	砂礫	無	無		



第3図 東壁・北壁・南壁断面図

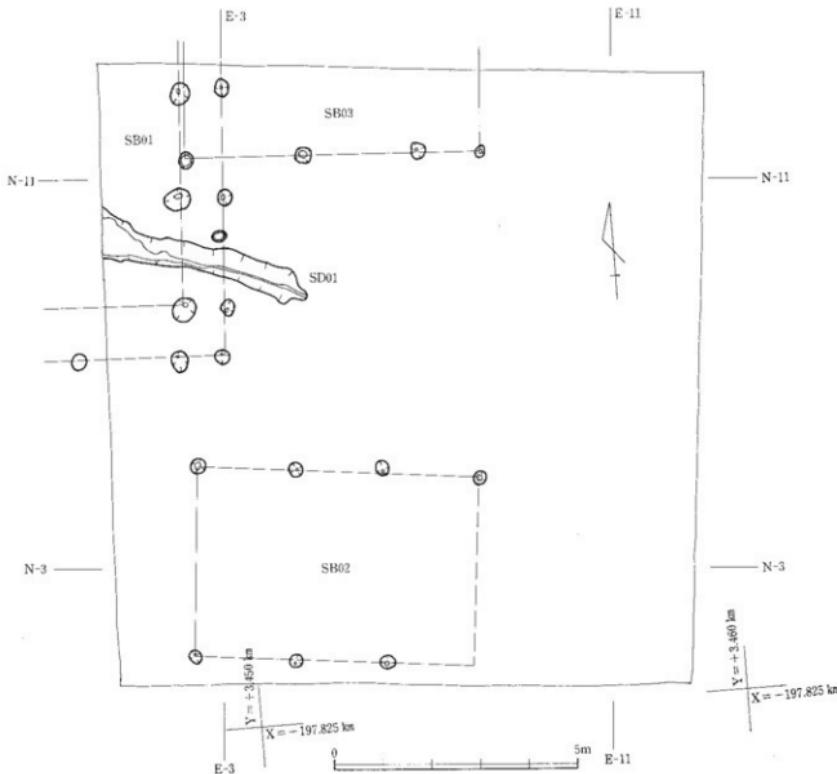
4 検出された遺構と遺物

(1) 2層

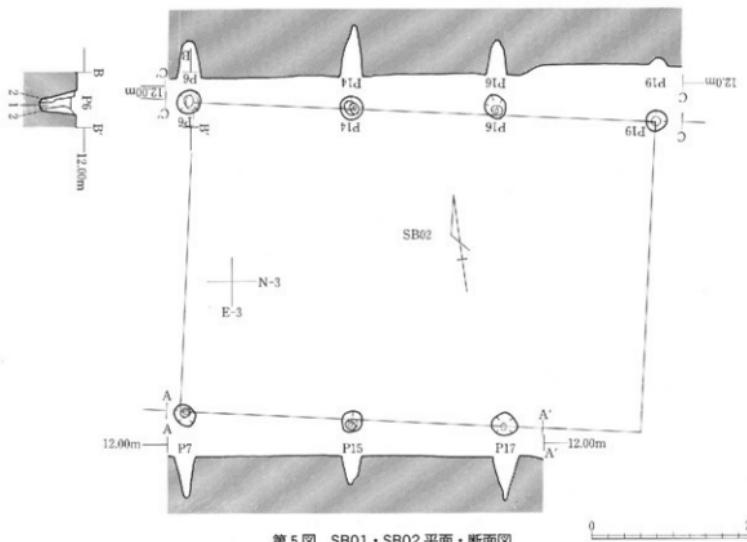
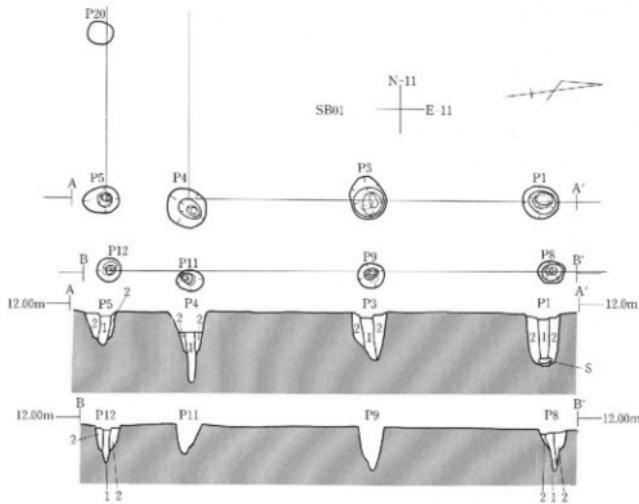
2層上面で掘立柱建物跡(SB) 3棟が検出された。

SB01(第5図)

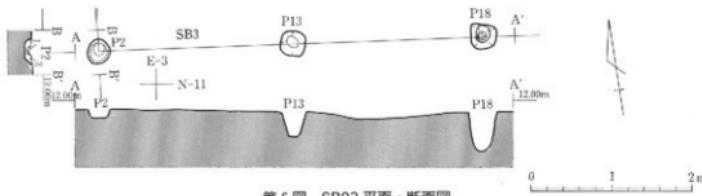
梁行2間以上(総長2.9m以上、柱間寸法90~205cm)、桁行3間以上(総長5.9m以上、柱間寸法100~225cm以上)の南北棟で梁・桁内側は身舎、外側は廂あるいは縁と考えられる建物跡である。方向はN-4°-Wである。身舎の柱間は220cm前後、柱穴は45~54cmの不整円形で、柱痕跡は15~18cm程である。柱穴の深さは61~66cmで平均56cm程である。廂あるいは縁と考えられる柱穴は30~43cmの不整円形で、柱痕跡は9~17cmの円形である。柱穴の深さは39~55cmで平均46cm程である。身舎と廂あるいは縁との柱間は、梁行で90cm、桁行で103cmである。身舎の柱穴P1の底面からは径18cm程厚さ9cm程の根石と考えられる石が出土した。埋土は黒褐色砂質シルトである。なお、西端の柱穴P20は壁の崩壊によりプランのみの確認である。出土遺物はない。



第4図 2層上面遺構平面図



第5図 SB01・SB02平面・断面図



第6図 SB03 平面・断面図

SB02 (第5図)

梁行1間（総長3.8m、柱間寸法380cm）、桁行3間（総長5.8m、柱間寸法180～200cm）の東西棟の建物跡で方向はN-82°-Wである。柱穴は25～32cm程の円形で、柱痕跡は16cm程である。柱穴の深さは、11～66cmで平均44cm程度である。埋土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物はない。

SB03 (第6図)

N-87°-Wに延びる柱列を検出した。東西方向に3間分検出した。東西に柱穴が確認されないことから、北へ展開する建物跡と捉えた。検出した総長は6.0m程度であり、柱間寸法は130～240cm程度である。柱穴は28～37cm程の円形で、柱痕跡は13～15cm程度である。柱穴の深さは12～50cmで平均32cm程度である。埋土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物はない。

2層出土遺物

2層からは、磁器片1点、須恵器1点、土師器2点が出土しているが、いずれも細片で図示し得なかった。磁器は肥前産の白磁か染付の碗で江戸期のものである。

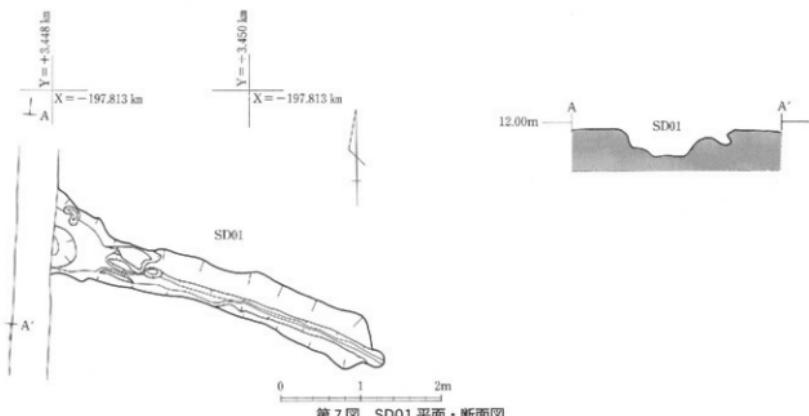
(2) 4層

①4a層

4a層上面では溝跡（SD）1条、小溝状遺構群が検出された。上面はわずかに東方向に低くなっている。

SD01 (第7図)

調査区の西半で確認された。検出されたのは一部で西部は調査区外に延びており、重複はない。直線的に走行しており、その方向はN-68°-Wである。検出長は4.3m程度で上端幅0.58m前後、下端幅は0.15m前後、深さは4～35



第7図 SD01 平面・断面図

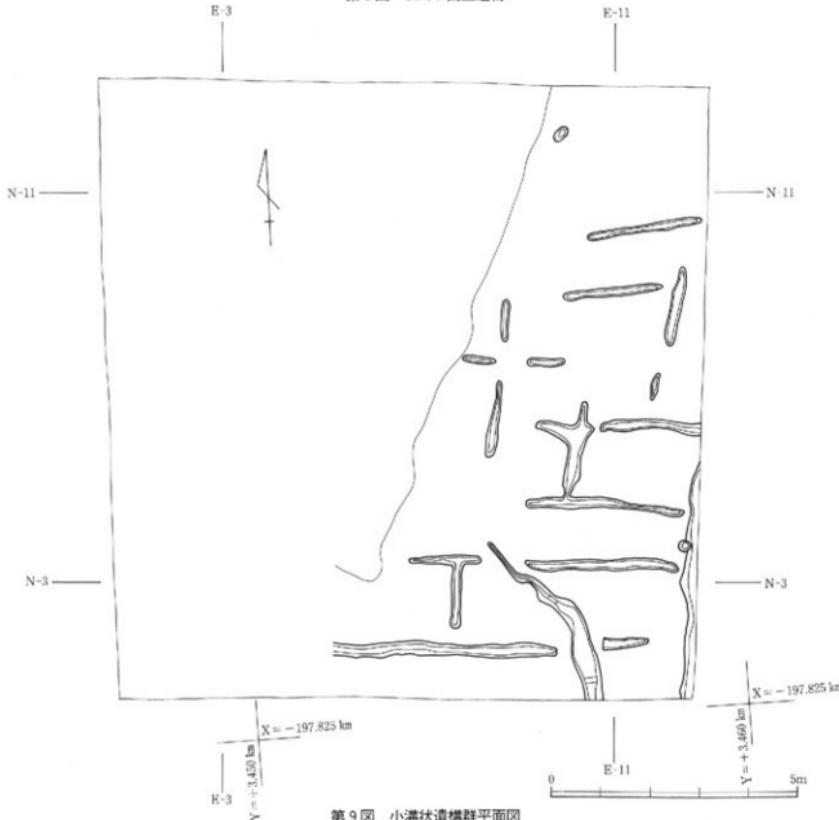
cmであり西半部で急に落ち込む。壁は南壁が底面から緩やかに立ち上がっているが、北壁は立上がりがやや急である。底面および壁面ともに一定せず、凹凸が顕著に認められる。底面の形状は2~3cmの細いくぼみを呈している。堆積土は粗砂層が主体である。土師器1点（第8図1）、赤焼き土器杯1点（第8図2）が出土している。

小溝状遺構群（第9図）

調査区の東半部で確認された。小溝状遺構群はSD01に切られている。方向は東西方向（N-86°-E, W-5°-E）のものとがあり、東西が7条、南北が4条検出された。小溝は幅15~35cmで平均が25cm程、深さは1~4cmで平均が2.5cm程である。溝の間隔は東西方向が1.2~1.8mで平均が1.46m程、南北方向が1.3~1.7mで平均が1.5m程で

回収番号	種類	測定・測位	内面		外面		残存	底基盤	写真回数	当該番号
			幅	高さ	幅	高さ				
1	土師器 环	SD01 堆積土	マメツ、黒色処理	ロクロナデ	白~全体:1/6	(13.2)	—	—	7-5	D-1
2	赤焼き土器 杯	SD01 堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	白:1/8	(9.9)	—	—	7-4	D-2

第8図 SD01 出土遺物



第9図 小溝状遺構群平面図

ある。東西と南北の重複が見られ、数時期に分けられる可能性もあるが新旧関係は確認できなかった。溝の堆積土はどちらの方向も基本層3層で直下層のブロックを若干含むことから、この小溝状遺構群は3層の耕作により形成されたものと考えられる。出土遺物はない。

②4b層

スジ状の灰白色火山灰（写真3-2）

東半部でスジ状に広がる灰白色火山灰と牛足跡を検出した。火山灰のスジは不定形に途切れながら伸びており、明確な溝状には確認されなかった。幅は数～10cm、厚さ数～5cm、間隔が20～50cmである。北側では南北方向で間隔がやや狭く、南側では東西方向で間隔が広い。牛の足跡は同じ面で不規則ながら多数検出された。形状は長幅12cm前後のC字・ハの字状である。これらは火山灰降下前にあった畠の畝間や牛足跡などの地表面の凹みに堆積したもの、降下後の耕作によるすき込みや牛の踏み込みによるものなどの可能性が考えられる。ただし、プランツ・オーバル分析から上層が耕作土と考えられることから、火山灰降下前の地表面は残存していない可能性が高いといえよう。

4層出土遺物

土器師2点（内黒坏1点、甕底部1点）が出土しているが、いずれも細片で図示し得なかった。

（3）6層

6層上面では、溝跡（SD）5条が検出されている。上面は全体的に見ると、南西側に高くなる傾きを示す。細かく見ると、南西部の高まりが最も高く、高差10cm前後の段差を経てSD05に至りSD02・03を介在しながら北東へ徐々に傾斜している。傾斜の高低差は、南西部の高まりと北東端では28cm、南東端では37cmである。

SD02（第10図）

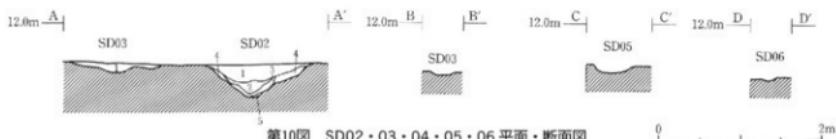
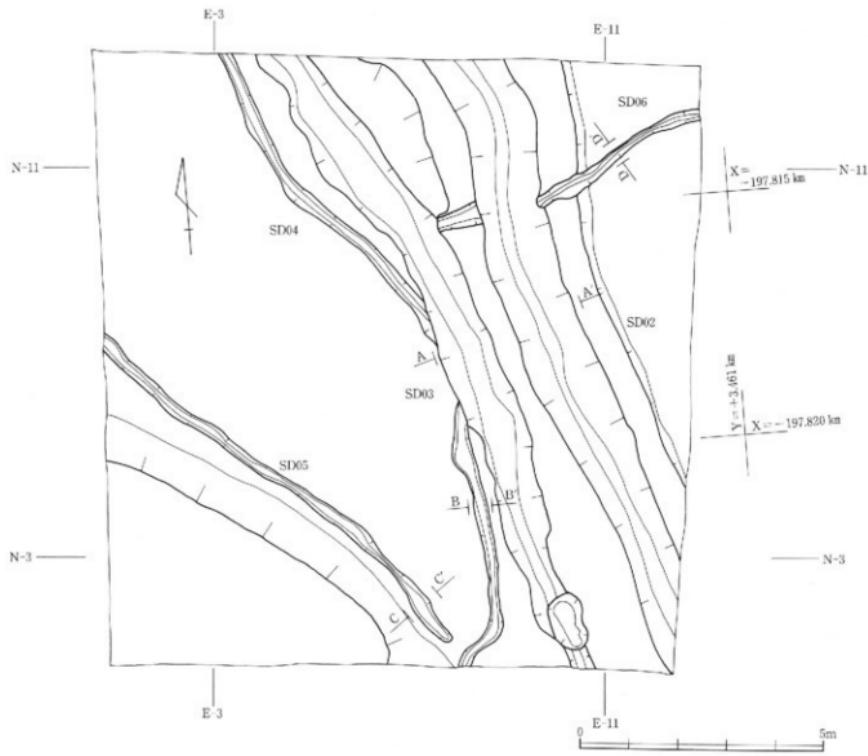
直線的に走行しており、その方向はN-19°-Wである。検出されたのは一部で北、南ともに調査区外に延びている。SD06と重複し、それより新しい。検出長は12.9m程で、上端幅は1.3m前後、下端幅は0.26m前後、深さは28cm程である。断面形は開いたU字形で、壁は底面からやや急に立上がり、外側に開く。堆積土は5層確認され、砂、砂質シルトを主体としている。最下層5層と1・2層の砂の間に基本層6層起源の3・4層が介在することから水流に2時期の変遷が考えられる。底面および壁面ともに一定していてほぼ直線的であることから、人工的な溝である可能性が高い。溝の東岸は低い土手状になっており、その規模は、上端幅が0.5～1m程、下端部が0.6～1.2m程、高さが2.8cm程である。

SD03（第10図）

SD02の西側を平行するように直線的に走行している。その方向はN-17°-Wである。検出されたのは一部で北、南ともに調査区外に延びている。SD04・06と重複し、それよりも新しい。検出長は14.1m程で、上端幅は1.05m前後、下端幅は0.47m前後、深さは2～9cm程である。断面形は浅いU字形で、壁が西壁が底面から緩やかに立ち上がるが、東壁は立ち上がりがやや急である。底面および断面ともに一定せず凹凸がある。南端の底面が落ち込み、土坑状になっている。この土坑状の落ち込みは、上端平面形が約1.1×0.6mの不整楕円形で、下端平面形は約0.9×0.4mの不整楕円形である。深さは14cm程で、底面および断面ともに凹凸が認められる。

SD04（第10図）

溝はSD03の西側を並行するがやや蛇行しながら走行している。検出されたのは一部で北、南ともに調査区外に延びている。途中SD03のほぼ中央付近で重複し、それより古い。方向は、SD03との重複地点から北半がN-32°-Wである。南半はN-4°-Wであり、南端で西へ屈曲する。検出長は14.4m程で、上端幅は0.33m前後、下端幅は0.17m前後、深さは4cm程である。壁は外側に開き断面形は舟底形である。底面はほぼ平坦で、やや西側に傾斜してい

**SD02 土層註記**

順序	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 10YR5/2	砂	径1~5cmの礫を多量に含む。下部は變成岩のために全体に青褐色に見える。
2	灰黄褐色 10YR4/2	砂	1層に比べて礫をほとんど含まないが、下部に青灰色の径1~2cmの礫を若干含む。
3	黒褐色 10YR7/1	砂質シルト	やや粘性がある。
4	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	凝灰岩粒を含む。
5	灰黄褐色 10YR5/2	砂	青灰色の礫を若干含む。

SD03 土層註記

順序	土色	土性	備考
1	灰褐色 10YR4/1	砂	径2~5cmの礫を多量に含む。變成岩のために全体に青褐色に見える。

SD04 土層註記

順序	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 10YR5/2	砂	径0.5~1cmの小礫を含む。

SD05 土層註記

順序	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 10YR5/2	砂	径0.5~1cmの小礫を含む。

る。堆積土は砂が主体である。

SD05 (第10図)

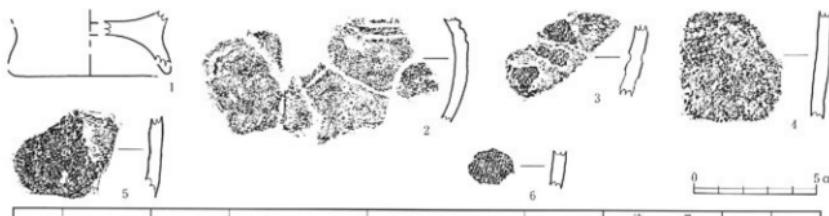
溝は調査区南西部の高まりのふもとを、ほぼ平行するように直線的に走行している。その方向はN-45°-Wである。検出されたのは一部で、北西側は調査区外に延びており重複はない。検出長は9.4m程で、上端幅は9.4m程で、上端幅は0.23m前後、下端幅は0.02~0.2m、深さは7cm程である。壁は東壁が底面から緩やかに立ち上がり、西壁は立ち上がりがやや急である。底面は平坦である。堆積土は砂が主体である。

SD06 (第10図)

方向はN-72°-Eでほぼ直線的に走行している。検出されたのは一部で、東側は調査区外に延びており、SD02・03と重複し、それより古い。検出長は6.2m程で上端幅が0.15~0.4m程、下端幅は0.04~0.2m程、深さは3cm程である。壁は外側に開き、断面形は舟底形、堆積土は砂が主体である。

6層出土遺物 (第11図)

6層から弥生土器15点、素焼き土器12点出土した。うち6点を図示した。1は台部である。2は壺の体部で沈線が3条施されている。3・5・6は細かい繩文L.R.である。



回収番号	種類	遺構・部位	内面	外面	既存	法				
						口徑	底径	壁高	写真回数	説明番号
1	弥生土器	台部?	丸	ミガキ	台部: 1/4	—	(6.0)	—	7-12	B-5
2	弥生土器	底?	丸	ミガキ	マツメ、沈線3条	—	—	—	7-8	B-1
3	弥生土器	底?	丸	ナゾ	沈文L.R.	—	—	—	7-10	B-4
4	弥生土器	底?	丸	ミガキ	ほとんどマツメ、一部に繩文L.R.	—	—	—	7-11	B-3
5	弥生土器	底?	丸	ミガキ	細い繩文L.R.	—	—	—	7-9	B-2
6	弥生土器	底?	丸	ミガキ	細い繩文L.R.、5と同一	—	—	—	7-6	B-2

第11図 6層出土遺物

(4) 8c層

8c層上面では溝跡1条が検出された。

SD07 (第12図)

溝は直線的に走行しており、重複はない。検出されたのは一部で、北、南ともに調査区外に延びており、その方向はN-23°-Wである。検出された長さは13.1m程で、上端幅は2.2~5.0mで平均が3.3m程、下端幅は5~15cm、深さは7~20cmである。壁は底面から外側に広く開き、断面形は緩やかなV字形を呈している。底面および断面は一定ではなく凹凸が顕著に認められる。溝は直線的ではあるが底面の著しい乱れがあることなどから、自然流路の可能性が高いと考えられる。堆積土は2層確認され、いずれも砂を主体とした。

(5) 9c層

9c層上面では溝跡(1条)が検出された。

SD08 (第13図)

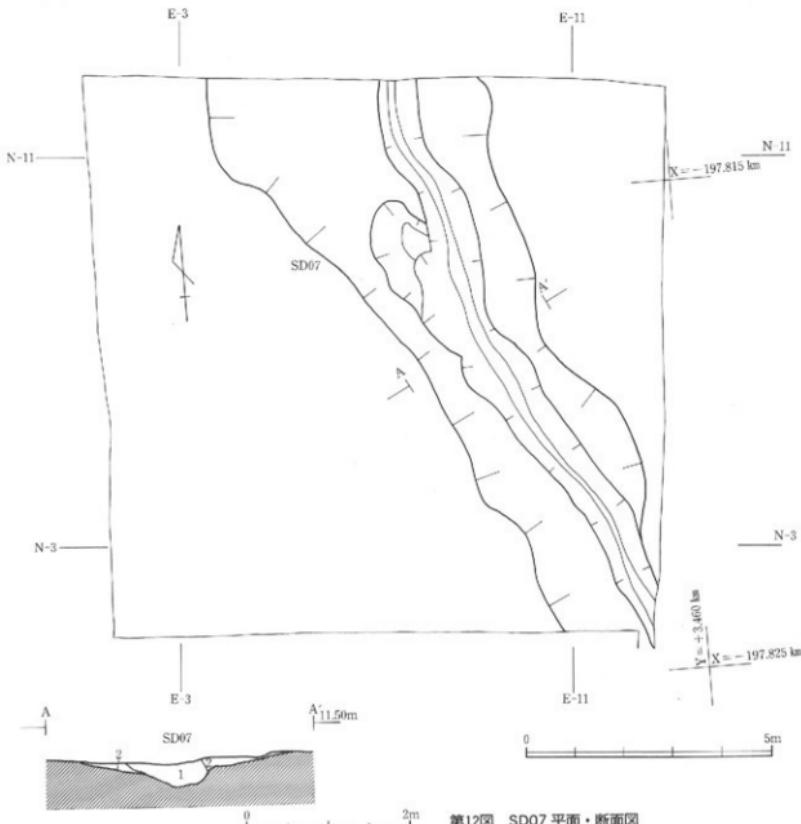
溝は直線的に走行しており、その方向はN-23°-Wである。上端の平面形は一定せず乱れており、北側では北東

方向に蛇行している。検出されたのは一部で北、南ともに調査区外に延びており、重複はない。確認された長さは13.1m程度で、上端幅は2.5~4.2mで平均が3.2m程度、下端幅は40~138cmで平均が101cm程度、深さは34cm程度である。断面形は外側に大きく開くU字形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面は比較的平坦であるが、部分的に大きな落ち込みが見られる。中央付近の落ち込みの比較差は17~36cm、南端では14~39cmである。堆積土は3層確認され、粘土、粘土質シルト、砂質シルトで植物遺体を含んでいる。溝は上端の平面形の乱れなどから、自然流路の可能性が高いと考えられる。

(6) 12層

SX01 (写真5-5、6-1)

12層中で不整梢円形の落ち込みを検出した。規模は約1.5×2m、深さ30cmである。底面が凹凸であること、堆積土が基本層12層と13層を攪拌した状況であることなどから、樹根跡の可能性が考えられる。



第12図 SD07 平面・断面図

SD07 土層註記

層序	上色	土性	備考
1	深黄褐色 10YR4/2	砂	層1~2cmの小礫を中心多く含む。中央部に酸化鉄を斑状に含む。
2	暗灰黄色 2.5Y5/2	細砂	小礫を含む。

(7) 13層

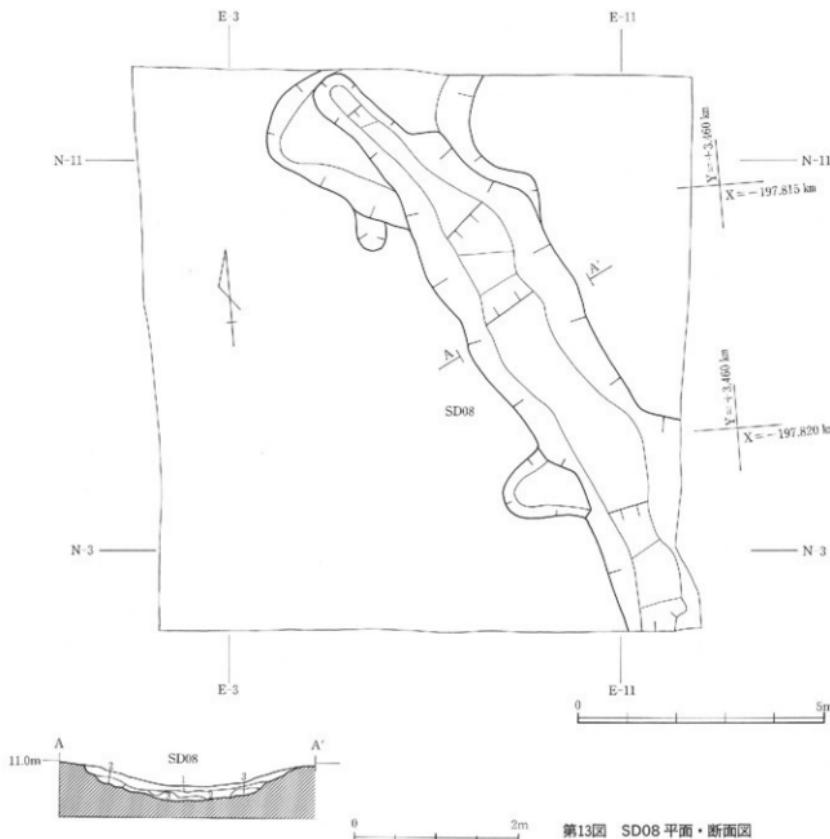
河川跡（写真6-2）

13層上面で河川跡を検出した。幅1.5m以上で、北からと東からの流路が深掘区南側で合流している。堆積土は12最下部である。尖頭器が1点（第14図5）出土した。石材は頁岩で全体に摩滅している。

(8) その他の遺物

1・2・3・7・12・15・18層から陶磁器、織文土器・素焼き土器・石器が出土している。

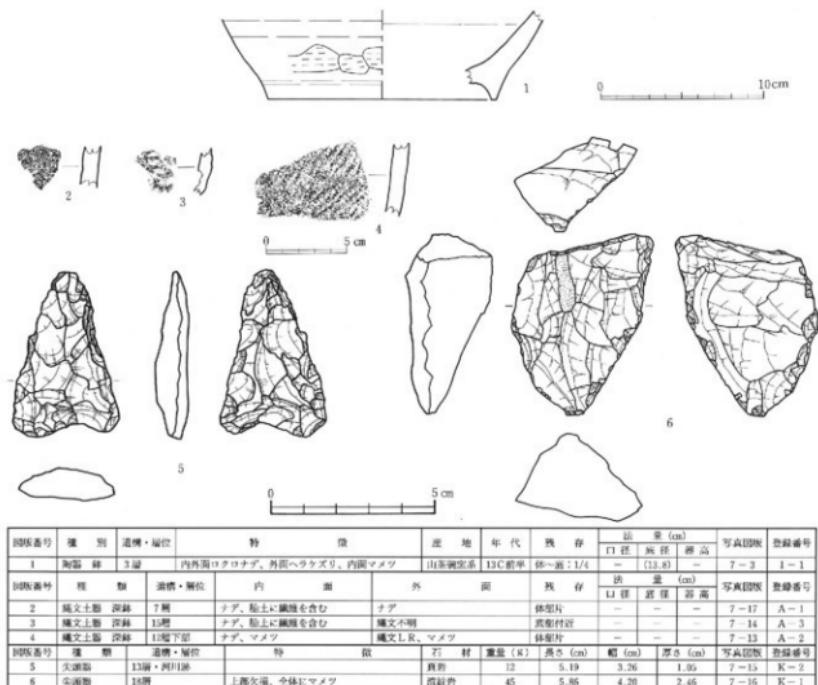
1層からは磁器1点、陶器4点出土している。磁器（写真7-2）は白磁の瓶で近世か近代である。陶器のうち



第13図 SD08 平面・断面図

SD08 土層註記

層序	土色	土性	備考
1	黒色 10YR1.7/1	粘土	植物遺体を含む。
2	黒褐色 10YR2/2	粘土質シルト	薄い細砂層を互層に含む。植物遺体を含む。
3	黒褐色 10YR3/1	砂質シルト	表面となっている灰オリーブ色(5Y5/?)の細砂をブロック状に含む。



第14図 その他の出土遺物

1点は古瀬戸の天目茶碗（写真7-1）で中世、ほかは大堀相馬産で18・19Cのものである。2層からは磁器1点、須恵器1点。土師器2点が出土している。磁器は肥前の染め付け碗で近世のものである。ほかは細片である。3層からは陶器1点（第14-1図、写真7-3）で、山茶碗窯系の鉢で13C前半のものである。7層からは纖維を含む繩文土器の細片（同図2）が出土している。12層からは繩文土器細片2点（同図3・4）、尖頭器（同図6）、クルミ、トチノミが出されている。6は基部側で全体が摩滅している。石材は流紋岩の割片が1点出土している。

5 遺構の所属年代とまとめ

(1) 検出した遺構は、2層上面で掘立柱建物跡3棟、4a層上面で溝跡1条、小溝状遺構群、4b層上面で耕作痕、6層上面で溝跡5条、8c層上面で溝跡1条、9c層上面で溝跡1条、12層中で性格不明遺構1基、13層上面で小河川跡1条である。また、プラント・オパール分析より、2・3・4a・4b層は稲の耕作層である可能性が高い。

(2) 周辺調査区との対比

当調査区付近では、富沢遺跡第1・4・21・55・70・97次調査、泉崎浦遺跡第3・4次調査、教塚古墳などの調査が行われている。この付近は富沢遺跡の中でも扇状地性微高地にあたり、土砂の供給が盛んであるために層序が複雑である。このため前述調査間の層の細かな対応は困難であるが、西方約20mの近接した21次調査（渡辺：1986）

を対象として大まかな対応を試みた。その結果おおむね以下のように対応が可能であった。

95次	21次	95次	21次	95次	21次
3層	3	7層 細砂	11a	10層 砂	15・16
4a層	4a	8a層		11層	17
4b層 上部に灰白	4b	8b層 砂		12層 砂	18・19
色火山灰		8c層	11c・12	13a層	20
5a層	5	9a層	13・14	13b層	20
5b層 砂	6	9b層		14層	21
6層	8・10	9c層			

(3) 2層上面で検出した掘立柱建物跡 (SB01～03) に伴う明確な遺物は乏しく、この遺構に所属年代を決定することは難しいが、2層中から近世の磁器が出土していることから、近世以降と考えられる。

(4) 4a層上面で検出された小溝状遺構群は3層の耕作により形成されたと判断された。3層からは13世紀前半の山茶醜窓系鉢が出土していることから時期は中世頃と考えられる。

近年近隣の下ノ内浦遺跡の調査で島の歎状遺構の下位から小溝状遺構群が検出され、小溝状遺構群が畠跡の耕作痕であることが明確になった(佐藤甲: 1993)。一方、プラント・オパール分析の結果では3層が最も高い値を出し、稲の耕作層である可能性が極めて高い。よって、3層において島で稻作(陸稲栽培)が行われていた可能性を考えられよう。今後の課題としたい。

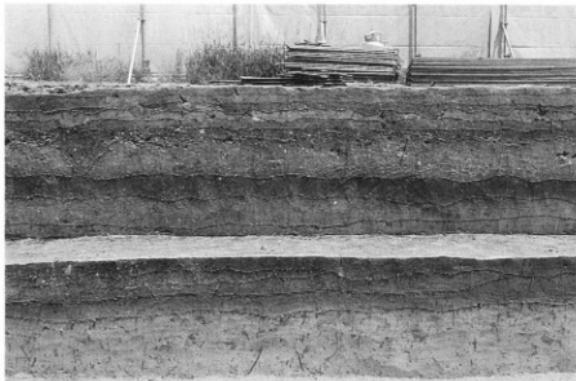
(5) 4b層上面のスジ状の灰白色火山灰は、火山灰降下前の凹みへの堆積、あるいは降下後の耕作の影響などの可能性が考えられる、上層が耕作層のため前者の地表面は残存していない可能性が高いこと、歎間堆積の残存にしては形状が不整形であることなどから、火山灰降下後の耕作により形成された可能性が考えられるが、今後の類例をまとめて再考したい。いずれにせよ4a層の時期の上限、4b層の下限は10世紀前半に位置づけられよう。なお、同様のものは山口遺跡2次調査「シマ状遺構」(田中他: 1984)、富沢遺跡35次調査(平間: 1991) 10層水田跡で確認されている。

(6) 6層上面で検出されたSD02は、ほぼ直線的に走行し、壁の立ち上がりの状況などから人口的な溝の可能性が高い。6層からは低い値ながらプラント・オパールが検出されており、周辺で稻作が行われていた構成とが想定され、SD02は水田域の水路の性格が考えられる。時期は出土遺物から弥生時代に位置づけられる。

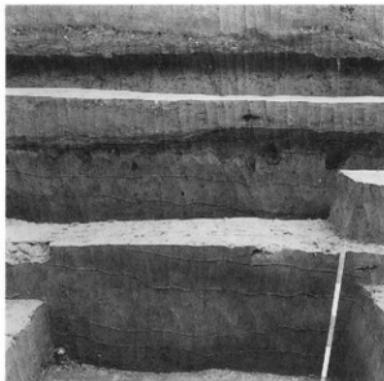
同時期の水路が近隣の1・8・55次においても検出されている。これらは連続するものと理解されている(佐藤甲: 1990)。今次 SD02は位置関係などから上記の水路に連続する可能性も考えられる。

(7) 8c層検出 SD07、09c層検出 SD08は年代決定資料がない。12層下部の樹木片の14c年代(約4220年前、第3章参照)と6層の年代から縄文時代後期から弥生時代の間に位置づけられる。また、SD02・03・07・08は、ほぼ同じ位置で検出されている。このことからこの地点には自然の流路が形成しやすい地形であったことが考えられる。

(8) 17層、23層の樹木片の14c年代測定も実施した。17層のものは約5000年前、23層のものは約7800年前という結果である(第3章参照)。



1. 東壁断面



4. 調査区近景（北から）

2. 深掘東壁断面

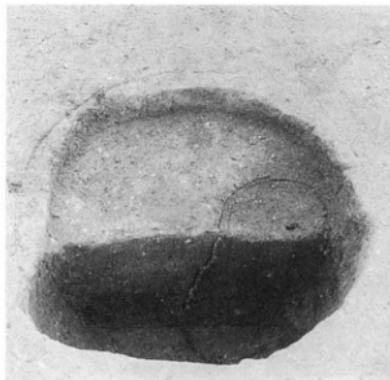


3. 深掘東壁最下部断面

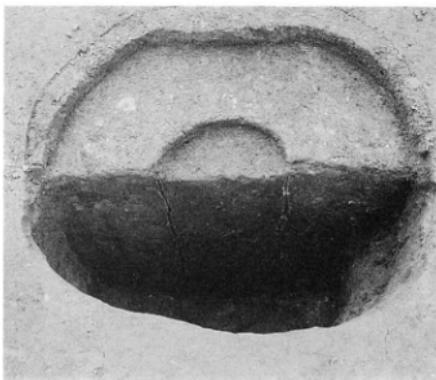
写真 1



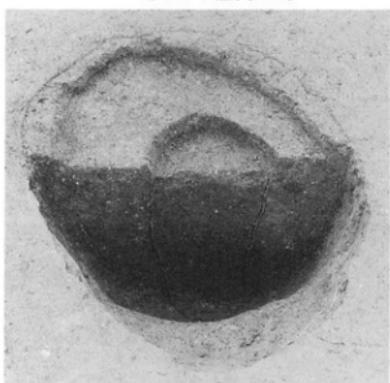
1. 建物体全景（南から）



2. SB01 P8断面（西から）



3. SB01 P1断面（西から）



4. SB01 P3断面（西から）



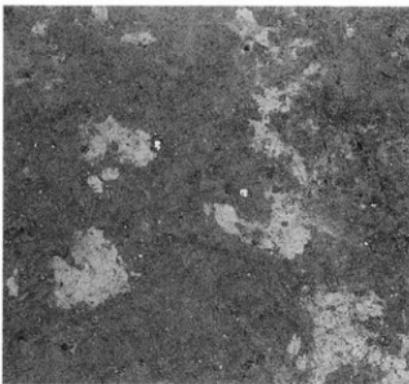
5. SB01 P1根石



1. 4a層上面小湊浜遺跡群（南から）



2. 4b層上面シマ状遺跡（南から）



3. 4b層牛足跡



4. 4b層牛足跡（3のひとつを振り上げ）

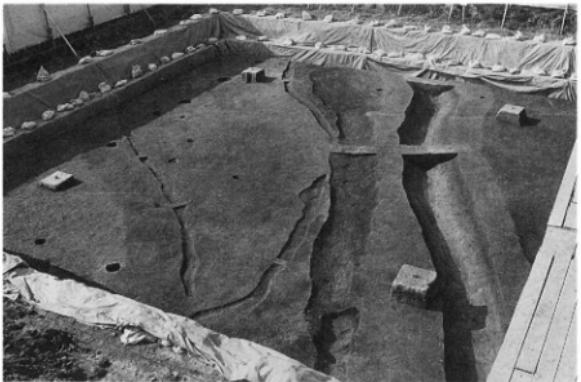


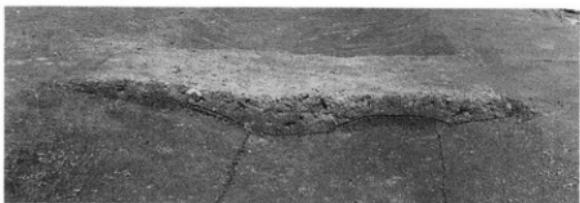
写真 4



1. SD01断面（西側）



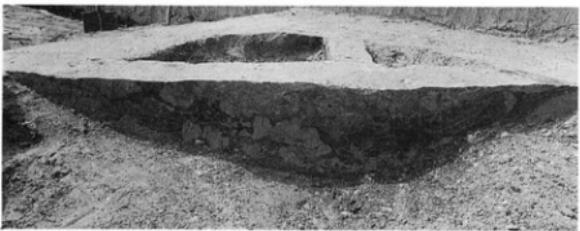
2. SD02断面（南から）



3. SD03断面（南から）



4. SD07断面（南から）



5. SX01断面（南から）



1. 12層SX01全景（南から）



2. 13層小河川跡（南から）



3. 完成全景（南面から）

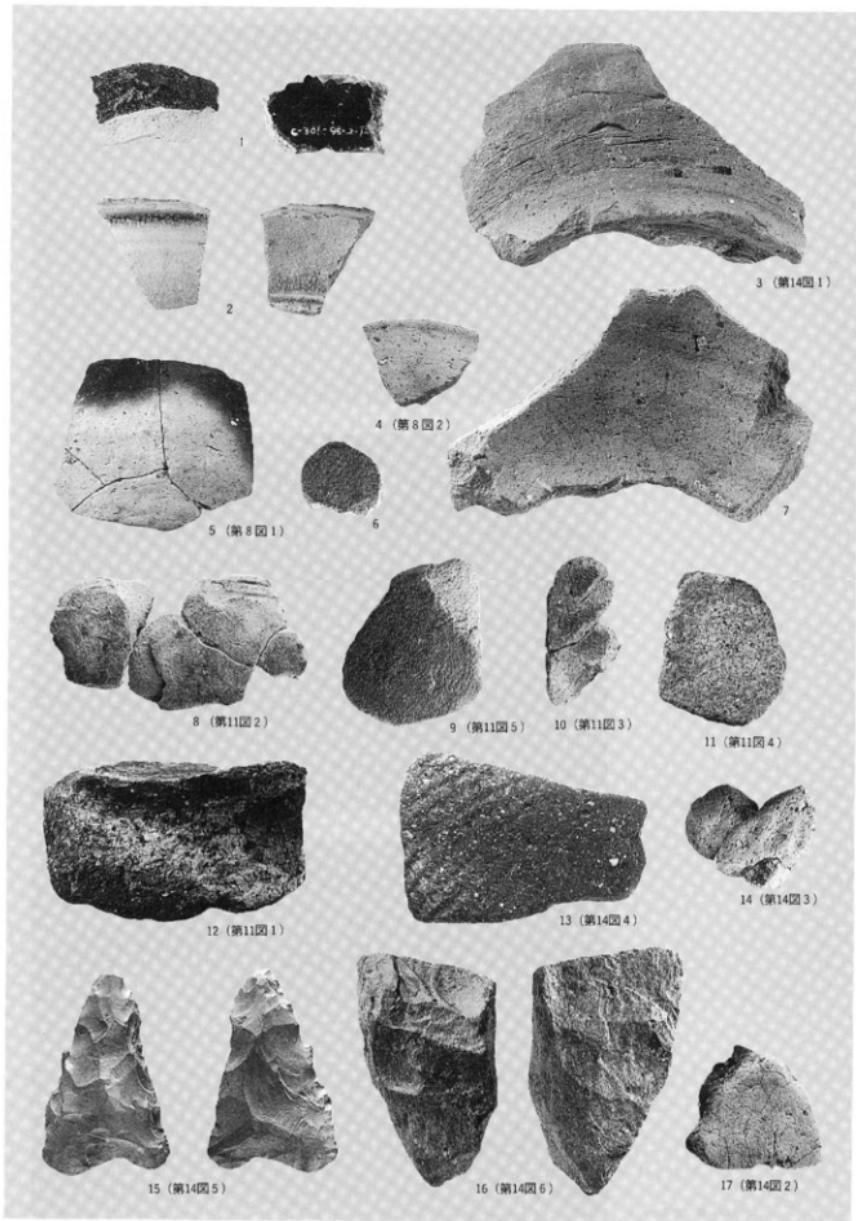


写真7 出土遺物

第2節 富沢遺跡第96次調査

1 調査に至る経緯

平成6年9月8日付けで庄子正一氏よりRC6階建共同住宅建設の発掘届が提出されたが、当教育委員会では平成7年度の調査予定は決定していたため、平成8年度の発掘調査として受託することでご了解を得たものである。

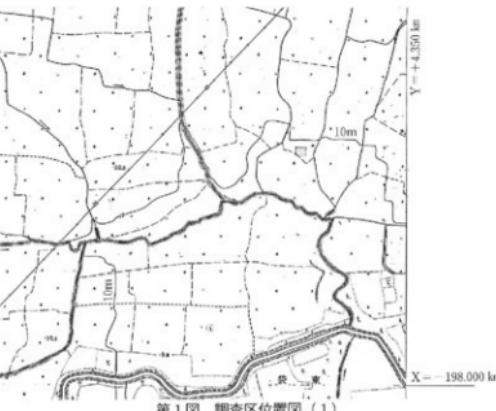
平成8年2月27日、発掘調査の実施に先立ち申請者側と第1回目の協議を待った。内容は調査時期、期間、契約額、事前の準備事項などであり、以後も打ち合せを重ね契約を交わし、6月26日から発掘調査を開始した。なお、同申請者からは同遺跡内別地点での発掘届が提出されていたが、同時に調査を行うことが効率的であることから協議の上、今次期間内に行うこととした（富沢遺跡101次）。

2 調査の方法

調査箇所は富沢遺跡の南東部に位置する。20年程前の区画整理以後は1.7～2mの盛土がなされしばらく畠地であったが、調査直前は駐車場として利用されていた。区画整理以前は旧字名宮田の水田であった。

今回の調査対象面積は315m²である。その中に14×9.5mの調査区を設定した。遺構の実測は杭A・Bを基準とした。基準杭の平面直角座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X=-197717.769m、Y=+4212.488m、杭B：X=-197718.545m、Y=+4220.450m）。また、杭A（E4、N0）、杭B（E12、N0）とし、南北をN0～10、東西をE0～14で表記し、遺構の位置関係を示した。遺構の実測は平板測量でを行い、縮尺1/50を基準とし、断面図は1/20とした。写真は95次と同様である。

土壤サンプリングはプラント・オバール分



分析用に2~12層、火山灰分析用に27層で実施した。

調査は6月26日に開始した。盛土および旧耕作土は重機により除去したが、以下の層は人力による調査とした。全面調査は11層まで、以下は縄文時代、旧石器時代の層の確認を目的とした深掘（5×8m）を行った。35層まで確認をしたが地表下約6mと深くなり、また調査区が1×1mと狭くなつたため、以下は安全性を考慮し掘り下げを断念した。調査は8月7日に終了している。

3 基本層序

確認された層は大別で35層、細別で37層である。層序を大まかにみると1層が旧耕作土、2~11層が粘土層、12~15層が泥炭質粘土と粘土の互層、16層以下が粘土層となる。顕著なグライ化は32層以下である。

2~6層は粘性の強い粘土層で水田耕作土の可能性がある。2~3層は近代から近世と考えられるがそのほかは不明である。遺跡内の多くの各地点で確認される灰白色火山灰は認められない。

7層には酸化鉄の集積がみられるが上位のどの水田層の影響によるかは不明である。

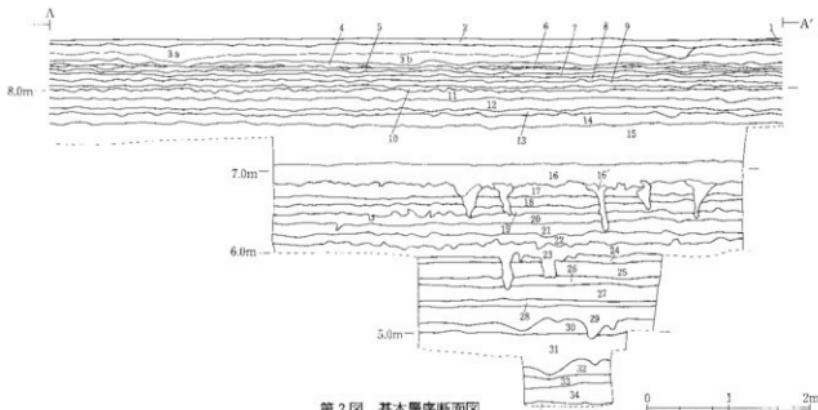
8・9層は縞状を呈する自然堆積層で、特に8層は中央に薄い黑色粘土層をはさんでいる。

10層は下面に起伏が認められ、水田耕作土の可能性が考えられる。

12~15層は泥炭質粘土と粘土が互層になる自然堆積層で合わせて80cm程の厚さになる。

第1表 基本層序注記表

層序	土色	土性	漸性	しまり	層厚(cm)	備考
1						ごく軽食土。
2	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	粘土	あり	あり	4~7	酸化鉄・マンガンを斑状に含む。
3a	灰黄褐色 10YR4/2	粘土	あり	あり	7~20	酸化鉄・マンガンを2層より多く含む。上部に厚さ2cmの黄褐色粘土を部分的に含む。
3b	灰白・黄褐色 10YR4/3	粘土	あり	あり	6~15	酸化鉄・マンガンを斑状に含むが、マンガンが多い。3a層よりやや明るい。
4	褐灰土 10YR4/1	粘土	あり	ややあり	3~8	酸化鉄・マンガンを斑状に含む。上部に厚さ1cm程の黄褐色粘土をわずかに含む。3b層より光沢が強くなる。
5	灰白・青褐色 10YR6/3	粘土	あり	ややあり	3~5	
6	灰黄褐色 10YR4/2	粘土	あり	ややあり	3~8	「面や」や認める。
7	オリーブ灰色 2.5GY4/1	粘土	あり	なし	2~5	薄い無色粘土層を上部に部分的に含む。
8	オリーブ灰色 5GY6/1	粘土	あり	ややあり	3~10	薄い無色粘土層を中央にすじ状に含む。
9	オリーブ灰色 2.5GY5/1	粘土	あり	ややあり	5~8	互層
	褐赤色 10YR4/1	粘土				
	黒色 2.5GY5/1	粘土				
10	灰色 5Y4/1	粘土	あり	ややあり	3~8	下面やや丸れる。水田耕作土？
11	緑灰色 7.5GY1/1	粘土	あり	なし	6~15	
12	暗灰黄色 2.5YS5/2	粘土	あり	なし	10~15	互層。植物遺体を含む。
	青灰色 2.5YS5/1	粘土	あり	なし		
	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし		
13	青灰色 2.5GY1/1	粘土	あり	なし	5~10	植物遺体を含む。
14	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	10~17	植物遺体を含む。
15	青灰色 2.5GY1/1	粘土			50	互層。植物遺体を含む。
	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土				
16	黑色 2.5Y2/1	粘土	あり	なし	20~30	植物遺体を含む。薄い黄褐色土1層を上部に含む。下部丸れ、樹根を含む。
17	男根色 7.5Y3/1	粘土	あり	なし	16~17	1層を部分的にブロック状に含む。
18	灰色 5Y4/1	粘土	あり	なし	20~20	植物遺体を少含む。
19	黒褐色 2.5GY3/1	粘土	あり	なし	5~15	植物遺体を少含む。
20	灰色 5Y4/1	粘土	あり	なし	6~15	酸化鉄斑（径1cm）を根に含む。植物遺体を少含む。
21	灰オリーブ色 7.5Y4/2	粘土	あり	なし	10~20	砂粒を少含む。植物遺体を少量含む。
22	オリーブ灰色 5Y3/1	粘土	あり	なし	6~20	植物遺体を少含む。
23	黒色 2.5Y2/1	粘土	あり	ややあり	10~20	植物遺体を少含む。
24	オリーブ灰色 5Y3/1	粘土	あり	なし	6~20	植物遺体を少含む。
25	オリーブ黒色 5Y2/2	粘土	あり	なし	20	植物遺体を少含む。
26	灰色 5Y4/1	粘土	あり	ややあり	8~15	植物遺体を少含む。
27	オリーブ黒色 5Y2/1	粘土	あり	ややあり	15~20	淡いビンク色の火山灰をブロック状に含む。植物遺体を少量含む。
28	暗緑灰色 7.5GY4/1	粘土	あり	なし	5~10	植物遺体を少含む。
29	オリーブ黒色 5Y3/1	粘土	あり	あり	15~30	植物遺体を少含む。
30	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	粘土	あり	ややあり	10~20	植物遺体を少含む。
31	オリーブ黒色 5Y3/1	粘土	あり	あり	30~50	植物遺体を少含む。
32	暗緑灰色 7.5GY5/1	粘土	あり	ややあり	5~20	綠褐色斑を少含む。
33	緑灰色 10GY5/1	粘土	あり	かかりあり	10~15	植物遺体を少含む。
34	緑灰色 10GY6/1	粘土	ややあり	かかりあり	15~25	砂粒を埋め伏せた状態に含む。
35	濃緑色 5GY6/1	粘土	かかりあり	かかりあり		非常に堅い層。オリーブ灰色と暗緑色になる。



第2図 基本層序断面図

16~31層は黒褐色系と灰色系とが交互になる粘土層で、16・23層の下面には根の痕跡状の落ち込みが見られる。27層には淡いピンク色の火山灰が小ブロック状にわずかに含まれている。この火山灰は、分析の結果（第3章）約5500年前の十和田中敷テフラの可能性が高いことが判明している。

32層以下はグラウンドが顯著な緑灰色の層である。特に35層は非常に堅く、これが旧石器時代の腐植層の上位によくみられる固結粘土層（太田：1995）に相当する可能性があるが確証はない。

35層以下は安全性を考慮し掘り下げは断念したが、ボーリング棒によりさらに約1m土層を確認した。以下80cmは緑灰色の砂と粘土層が続き、やや暗い層が厚さ5cmで確認されている。これが旧石器時代の腐植層であるかは不明である。基底隕層は不明である。

4 検出された遺構と遺物

(1) 2層

性格不明遺構（SX）を1条検出した。

SX01（第3図 写真1-3・4）

調査区の北西隅で検出した。3b層上面で検出したが西壁断面より2層の遺構と判断した。検出長は3.7m、幅0.4~0.7m、底面0.1~0.2m、深さ56~93cmである。平面形は北から南へ曲がる溝状を呈するが、底面が細く蛇行し凹凸がある。壁の立ち上がりは凹凸がみられ不安定である。堆積土は3層で粘性が強く、縦りがなく、特に3層はかなりべたつく軟弱な層である。溝や自然流路とは異なる自然の営能力によるものと考えられる。遺物は出土していない。

2層出土遺物

土師器2点、須恵器1点、陶器2点、磁器1点、素焼土器2点、古銭1点が出土している。土師器は細片で器種調整不明である。須恵器は壺の体部片（第6図1）で外面平行タタキである。陶器は壺鉢の体部片（同図2）で、すじ目に鉄化粧の痕跡が観察される。丹波産で17世紀前半と考えられる。古銭は寛永通寶の「文錢」（同図3）である。

(2) 3層

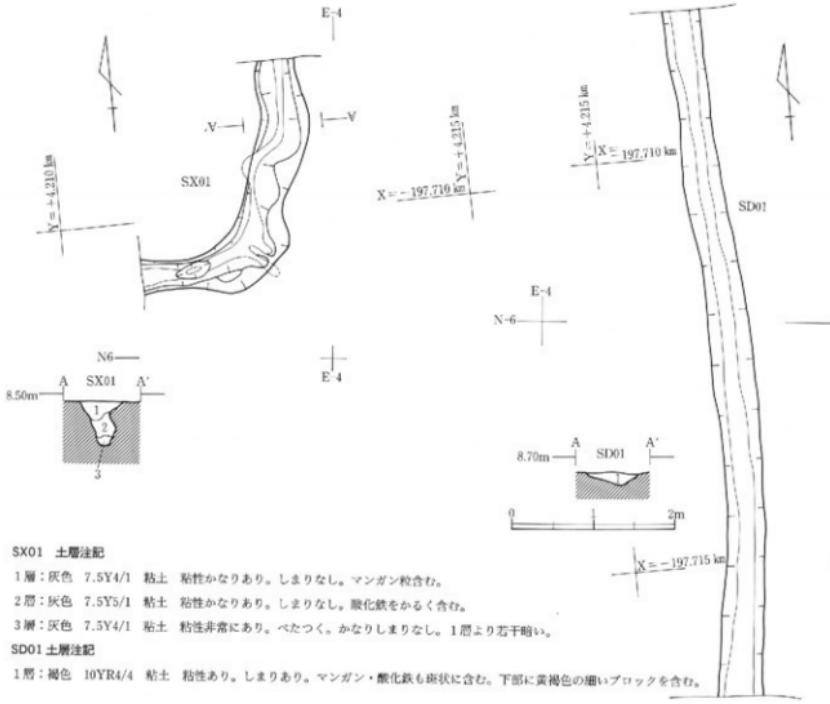
溝跡 (SD) を1条検出した。

SD01 (第3図)

調査区の中央やや西寄りで検出した。3b層上面で検出したが南壁断面より3a層上面の遺構と判断した。規模は検出長8.5m、上幅0.5m前後、下幅0.15~0.3m、深さ6~12cmである。方向はほぼ真北で直線的に伸びる。断面形はやや不整形な皿状を呈する。底面は平坦でほぼ水平である。堆積土は1層で出土遺物はない。

3層出土遺物

陶器2点、磁器2点が出土している。いずれも細片で図示していない。陶器は灰釉の碗で1点は瀬戸美濃産（写真2-1）で、1点は大振相馬産でともに18世紀のものである。磁器は肥前産の急須の蓋（18~19世紀）と产地不明の色絵の碗（19世紀後半）である。



第3図 SX01・SD01 平面・断面図

(3) 10層

10層水田跡（第5図）

調査区南側で10層を掘り下げ中に11層の帯状の伸びとして、擬似畦畔Bを2条（1・2）と区画①を検出した。

10層は下面に凹凸がみられ攪拌を受けた層相で水田耕作土壤を呈していること、11層が自然堆積層であること、プラントオパール分析で水田跡の可能性が指摘されていることなどから、前述の11層の帯状の伸びを10層水田跡が形成した擬似畦畔Bと判断した。

擬似畦畔1は方向が北西（N-55°-W）、検出長6.5m、幅0.2~0.35mである。2は方向が北東（N-43°-E）、検出長が3m、幅が0.15~0.3mである。

10層は灰色粘土層で全域に分布する。しかし、層厚が東半で5~10cmと西半よりやや厚く、下面の凹凸も東半が顕著であることから、境界線は不明だが耕作域は擬似畦畔の検出された東半部である可能性も考えられよう。

出土遺物はない。

(4) 16層

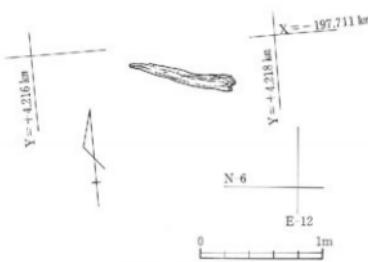
樹根跡（写真2-3）

深掘区東半部の16層下部で小規模な根株を検出した。平根、根株は16~17層にかけて出土しているが、互いに連続した状態では検出できなかった。なお、17層上面では樹根状の16層の落込みを検出している。

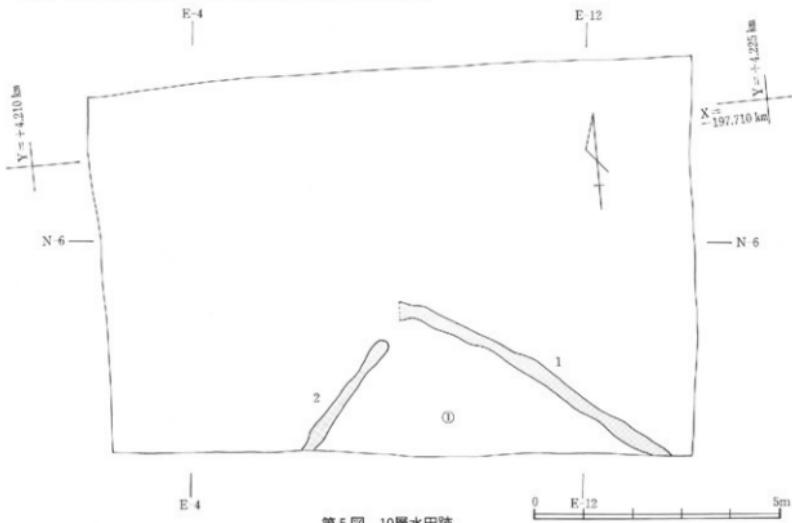
(5) 24層

樹木片（第4図）

24層中で長さ約90cm、径約10cmの樹木片を横位で検出した。



第4図 24層樹木片



第5図 10層水田跡

一端が尖っているが加工されてはいない。

6 遺構の所属年代とまとめ

(1) 検出した遺跡は、2層で性格不明の遺構(SX01)、3b層で溝1条(SD01)、10層水田跡である。また、2~6層は層相から水田土壤の可能性がある。

(2) 周辺調査区との対比

今次調査区は富沢遺跡における北部A地区基本層序(佐藤甲:1991)に包括される。近接した調査として、41次(佐藤甲:1989)、49次第8地点(佐藤甲:1990)、64次(佐藤淳:1991)がある。それらとの層の対応関係は層相から以下のようなになる。

今次	41次	49次-8地点	64次	北部A
5		5 b	7	6
6		6 b		8 a
7	5	8 b	8	8 b
				9 a (弥生:十三塚式期水田跡)
8	5	9 b	8	9 b
9	6	10 a	8	10 a
10	7			10 b (弥生:水田跡) 或いは10d (弥生:水田跡)
11	8	10 e	9	10 e
				11 (弥生:樹形圓式期水田跡)
12	8	12 a	10	12 a
13	8	12 b	10	12 b
14	9	13	11	13

(3) SX01

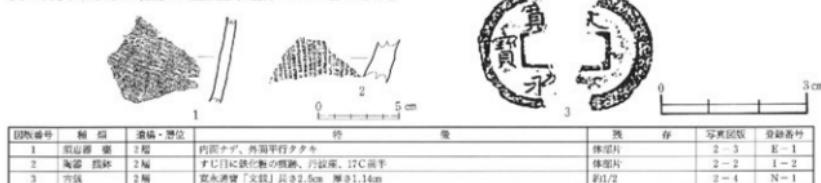
2層上面で検出されたSX01は、不整形な形状や基本層を壊したような堆積土の状況から人工的なものではなく自然營力によるものと判断された。同様のものが87・89次等で確認されている。

(4) SD01

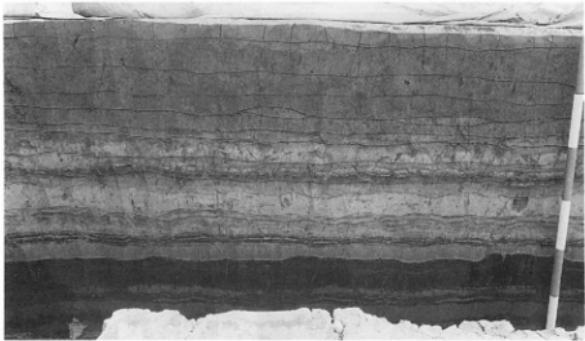
SD01からの出土遺物はないが、検出面の3層から19世紀後半の磁器が出土していることから近代以降のものと考えられる。南の隣接する41次調査においても南北の溝跡が検出されているが位置が不明のため対応は不可能である。

(5) 10層水田跡

出土遺物はないが、北部A地区基本層序の10b或いは10d層に対応することから、弥生時代の樹形圓式期から十三塚式期にかけての時期に位置づけられよう。擬似畦畔が2条検出されたのみであるが、10b或いは10d層が西半で薄くなることから耕作域の境界が存在した可能性が考えられる。近辺における同時期の水田ないし水田耕作上は53次・83次とともに北部A地区基本層序の10d層である。



第6図 出土遺物



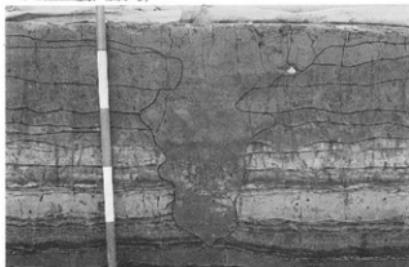
1. 南側断面



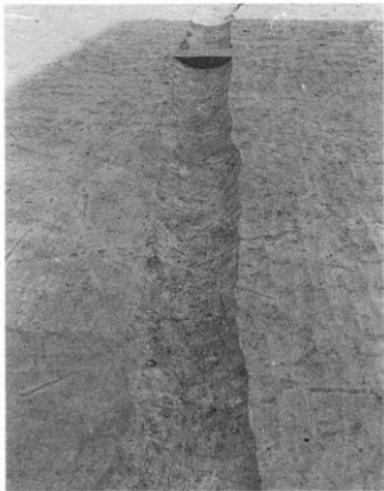
2. 調査区近景（西から）



3. SX01（南から）



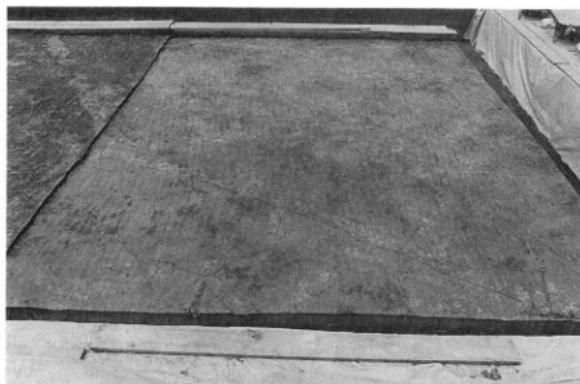
4. SX01断面（西壁）



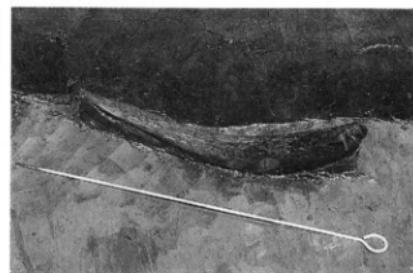
6. SD01（南から）



5. 3層下部地割れ状（南から）

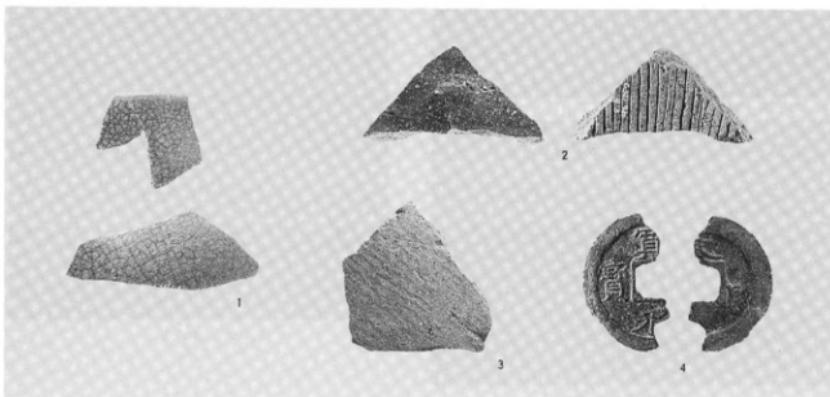


1. 10層水田跡（南から）



3. 24層樹木片（南から）

2. 16層樹根痕（南から）



4. 出土遺物

写真 2

第3節 富沢遺跡第97次調査

1 調査に至る経緯

平成7年10月11日付けで、松浦 学氏よりRC7附建共同住宅建設の発掘届が提出されたが、当教育委員会では7年度の調査は決定していたため、平成8年度の発掘調査として受託することでご了解を得たものである。

平成8年3月、発掘調査の実施に先立ち申請者側と第1回目の協議を持った。内容は調査時期、期間、契約額、事前の準備事項などであり、以後も打ち合せを重ね契約を交わし、9月5日から発掘調査を開始した。

2 調査の方法

調査箇所は富沢遺跡のやや南西部にある。付近は20年ほど前に行われた区画整理以後は1~1.2mほどの盛土がなされ宅地や店舗等になっている。それ以前は水田として利用されており、調査箇所は泉崎の集落南側の等高線がややくぼむ谷の中央やや北により位置している（第1図）。旧字名では泉崎前にあたる。

今回の調査対象面積は590m²である。その中に東西25m、南北9~11m、面積240m²の調査区を設定した。測量基準線は調査区南西隅外の任意の点を原点（N=00、E=00）として、南北方向をN01~13、東西方向をE01~27とした。遺跡内の正確な位置は調査地内の任意の2点A（X=-197863.026m、Y=+3557.125m）、B（X=-197869.745m、Y=+3601.245m）の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し把握している。

遺構の実測、写真などは95次調査と同様である。土壤サンプリングは、プラント・オパール分析用に7a+b層を中心5地点で計21点、火山灰分析用に15層で実施している。

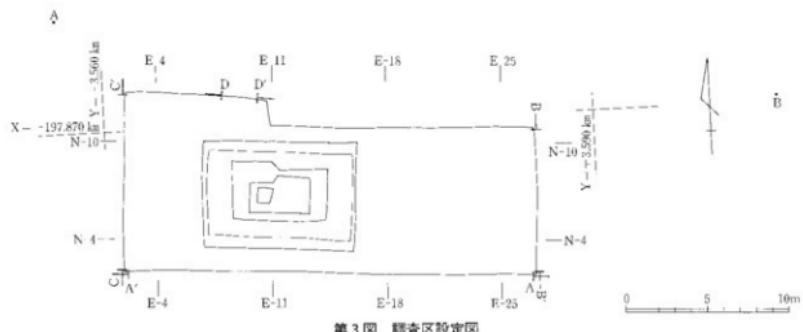
調査は平成8年9月5日から調査員2名、作業員21名の体制で開始した。盛土及び旧耕作土は重機により除去し、以下は人力により掘り下げた。なお、調査区周囲には土層観察および排水用の側溝を設けた。近世以降と考えられる2層の水田跡から弥生時代の水田耕作土を掘り上げた8層上面までは全面調査を実施した。8層以下は縄文・旧石器時代の層の確認を目的とし調査区を縮小した（5×9m）。深掘に関しては安全性を考慮し、該当層までできる限り広い面積を確保し行うこととした。16層で縄文時代早期末の遺物を含む層を検出した。さらに約1.5m掘り下げ（深度約5m）22層まで確認したが、湧水が激しく安全性を考慮し掘り下げを終了した。旧石器時代の層は確認されなかった。調査の一切を終了したのは11月26日である。



第1図 調査区位置図(1)



第2図 調査区位置図(2)



3 基本層序

確認された層は大別で22層、細別で24層である。層序を大まかにみると1～5層がシルト・粘土層、6～12層が粘土や泥炭質粘土と粘土の互層を中心とした層、13層以下がシルト・粘土層となる。顕著なグライ化は15層以下である。

1層は旧水田耕作土、2～5層も水田耕作土と考えられる層である。これらの層には、下面の凹凸が著しなり、層の下部には直下に層を起源とするブロックが分布する、という水田耕作土に一般的な特徴が認められる。

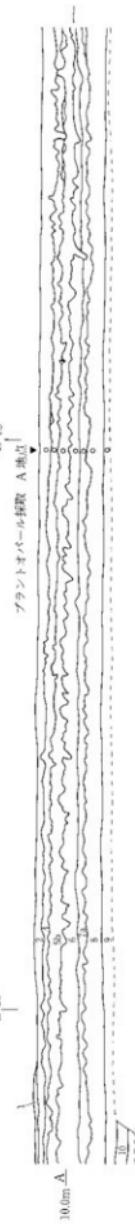
2層は東側に薄く西側に厚くなるが、それは東側では2層上部が1層の耕作により影響を受けたためと考えられる。3層は東側に部分的に残存するのみである。4・5層は平安時代の水田耕作土と考えられる。4層中には10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰がごくわずかに小ブロックで含まれる。4層は東に厚く堆積する6層の砂

第1表 基本層序注記表

層序	土 色	生 性	施 作	しまり	層厚(回)	備 考
1	黒褐色	2.5Y3/1	6ヶ月シルト	ややあり ややあり	正水田耕作土。	
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	あり ややあり	10~20 木耕耕作土。上面に鐵化系鉄錆、鐵化系鉄錆、粉粒・風化・腐灰付着。下面凹凸あり。	
3	黒褐色	10YR2/1	砂質シルト	ややあり ややあり	2~5 水田耕作土。部分的に残存するのみ。	
4	黄灰色	2.5Y4/2	砂質シルト	ややあり ややあり	5~6 木耕耕作土。鐵化色灰土をマッシュ小ブロックで含む。鐵化系鉄錆。下面凹凸あり。	
5a	黒褐色	10YR2/1	粘土	ややあり	なし	5~20 木耕耕作土。鐵化色灰土をマッシュ小ブロックで含む。下面凹凸あり。
5b	黒褐色	10YR2/1	粘土	あり	なし	3~15 木耕耕作土。5a 層よりやや薄い。鐵化鉄錆。下面凹凸あり。
6	單色	10YR1/7	泥炭質粘土	あり	なし	5~40 自然堆積物。豆層。上部が砂で、下部が粘土と黒褐色となる。
	灰黒褐色	10YR1/2	粘土	あり	なし	
	オリーブ色	7.5Y5/2	粗砂・細砂	なし		
7a	黒褐色	10YR2/1	粘土	あり	なし	5~25 木耕耕作土。植物體・鐵化鉄錆を含む。下面に凹凸あり。
7b	黒褐色	10YR3/1	粘土	あり	なし	4~10 自然堆積物。瓦層。黒褐色粘土の方はa層より明るく、褐色風化に見える。
8	褐色	10YR1/7	泥炭質粘土	あり	なし	20 自然堆積物。褐色土の方は植物體を多く含む。
	灰黒褐色	10YR4/2	粘土	あり	なし	
9	褐色	10YR2/1	泥炭質粘土	あり	なし	15 自然堆積物。下部が明るい。植物體を含む。
	黒褐色	10YR3/1	粘土	あり	なし	
10	黒褐色	10YR2/2	シルト質粘土	あり	なし	10~15 自然堆積物。植物體を含む。丁度に凹凸あり。
11	オリーブ色	7.5Y5/2	粗砂	なし	40	自然堆積物。下部に大粒の砂、風化灰岩を含む。
12	灰黒褐色	10YK4/2	粘土	あり	なし	10~15 自然堆積物。正規、植物體を含む。
	黒褐色	10YR2/1	泥炭質粘土	あり	なし	
13	褐色	10YR2/1	粘土	あり	なし	8~20 自然堆積物。植物體を含む。
14	黒褐色	5YV3/1	粘土	あり	なし	10~20 自然堆積物。植物體を含む。
15	オリーブ色	7.5Y4/2	シルト質粘土	あり	なし	30~40 自然堆積物。植物體を含む。火山灰を極少ブロックに含む。
16	オリーブ色	7.5Y3/2	シルト	あり	なし	20~30 自然堆積物。植物體を含む。下面に凹凸あり。通物を含む。
17	暗褐色	5GY4/1	砂質シルト	ややあり	なし	15~25 自然堆積物。植物體を含む。15層をブロックに含む。
18	暗褐色	10GY4/1	細砂	ややあり	なし	60 自然堆積物。植物體を含む。
19	暗褐色	5GY4/1	砂質シルト	ややあり	あり	20 自然堆積物。植物體を含む。
20	暗褐色	10GY4/1	シルト質粘土	ややあり	かなりあり	10~15 自然堆積物。植物體を含む。
21	緑灰色	10GY4/1	シルト質粘土	ややあり	かなりあり	10~15 自然堆積物。植物體を含む。
22	暗褐色	7.5GY4/1	シルト	あり	あり	10~15 自然堆積物。植物體を含む。

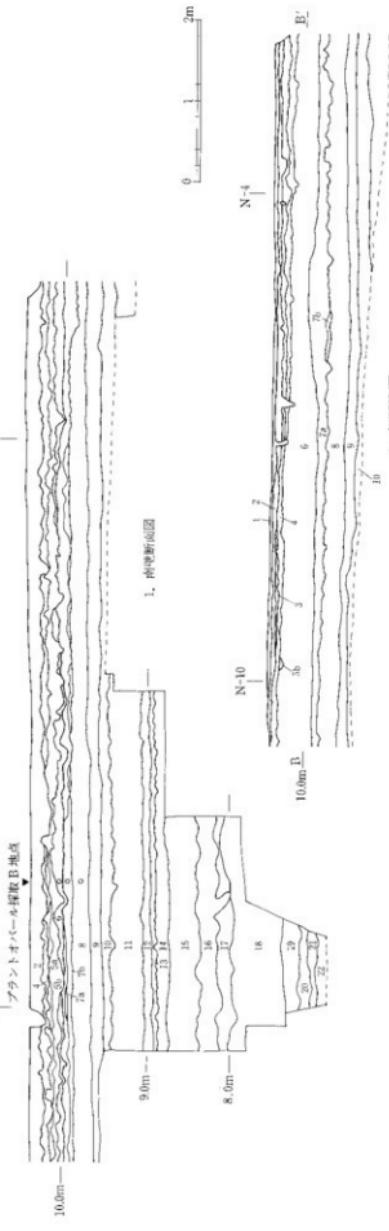
E-25

E-18

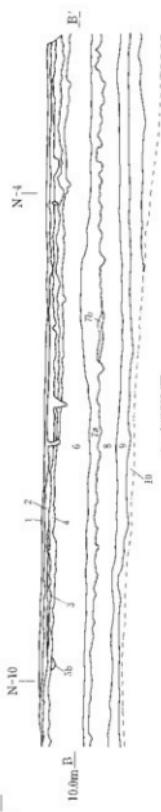


E-11

プラントオバール探取 B 地点

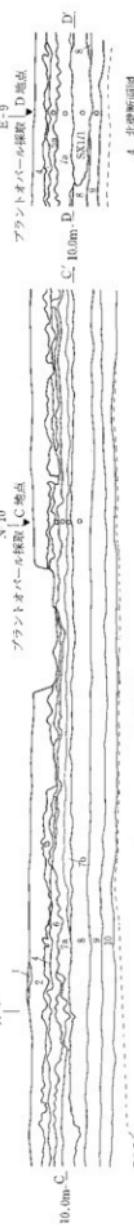


N-4



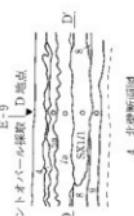
N-10

プラントオバール探取 C 地点



E-9

プラントオバール探取 D 地点



第4図 基本層序断面図

層のため、東側ほど砂のブロックを増してより砂質化し西側ほど粘土質化している。5a層はより西側に分布する。

5b層は西側で5a層により搅拌を受けている。

6層は上部が若干の薄い粘土層を挟む砂層、下部が泥炭質粘土と粘土の相互となる自然堆積層である。砂層は北東、特に7a層の畦畔1の北側に厚く(最大厚40cm)調査区中央まで分布し、北東から南西への傾斜を形成している。この砂の堆積は6層より上位各層の微地形に影響を及ぼしている。

7a層は弥生時代と考えられる水田耕作土で、黒色の粘土である。7b層は7a層より明るく褐色気味に見える層で、7a層の母材と考えられる。

8層以下は自然堆積層で、11層には層厚40cmの厚い砂層があり、15層以下はグライ化する。15層には白色の火山灰が極小ブロックで含まれる。

16層はグライ化した中でも黒味を帯びた層で繩文時代早中期の遺物を含む層である。下面に凹凸が見られるが樹根などによるものと考えられる。20・21層はかなり堅く、これらが旧石器時代の腐植層の上位によく見られる固結粘土層(太田:1995)に相当する可能性があるが確証はない。22層以下は湧水が激しくなり安全性を考慮し掘り下げは標高約6.8mで断念した(深度5m)。ボーリング調査によれば基底疊層は標高5.5~6.0mである。

4 検出された遺構と遺物

(1) 4層

4層水田跡(第5図)

4層は黄灰色の砂質～粘土質シルト(東に行くほど砂質化する)で、全域に分布している。層中にわずかに灰白色火山灰を含む。

畦畔状高まり3条、段差1ヶ所、区画5区画、土坑(SK)2基を検出した。

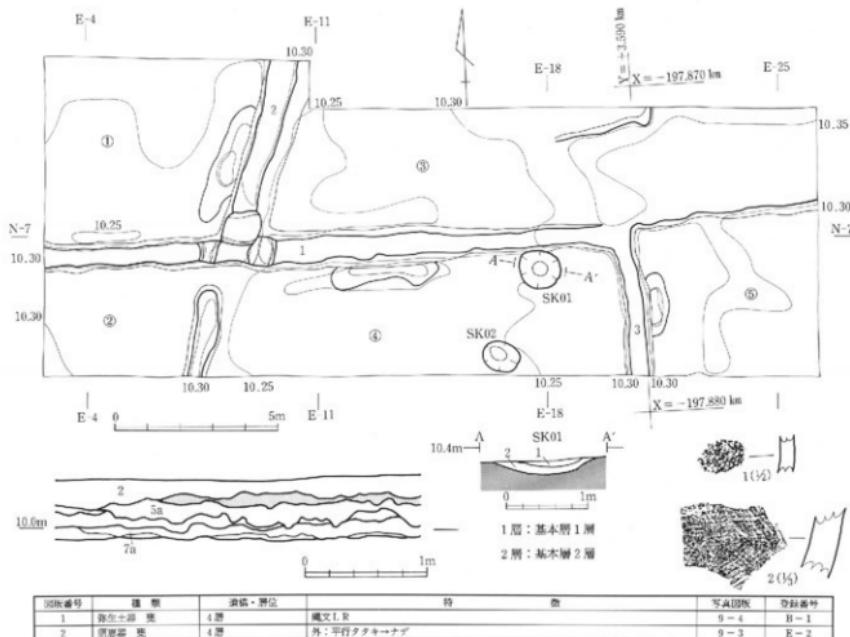
畦畔状の高まりは、真東方向の1とそれに接続する南北方向の2・3である。1は上端幅0.5~0.7m、下端幅0.6~1.2m、高さが残存のよい所で6cmで、方向はN-90°-Eである。検出長は23.5mであるが3との交差点より東は長さ約5.5mの段差で検出されている。2はやや東に振れて(N-20°-E)交差する。交差点の北側が上端幅0.7m、下端幅1.3mと大きく、南側が上端幅0.4~0.7m、下端幅0.7~0.9mとやや細く、高さは良好な部分で6cmである。3は1にほぼ直角に接し方向はN-5°-W、規模は上端幅0.5m、下端幅0.8m前後、高さは良好な部分で7cmである。4は東西方向の段差で東端が北へくびれている。方向はN-80°-E、高さは良好な部分で4cmである。

区画は5枚あるが全体のわかるものはない。③は段差の4などからさらに区画される可能性がある。標高は10.2~10.35mで、③の西半が最も低い。③の東半が高いのは6層の砂層が厚く堆積しているためである。

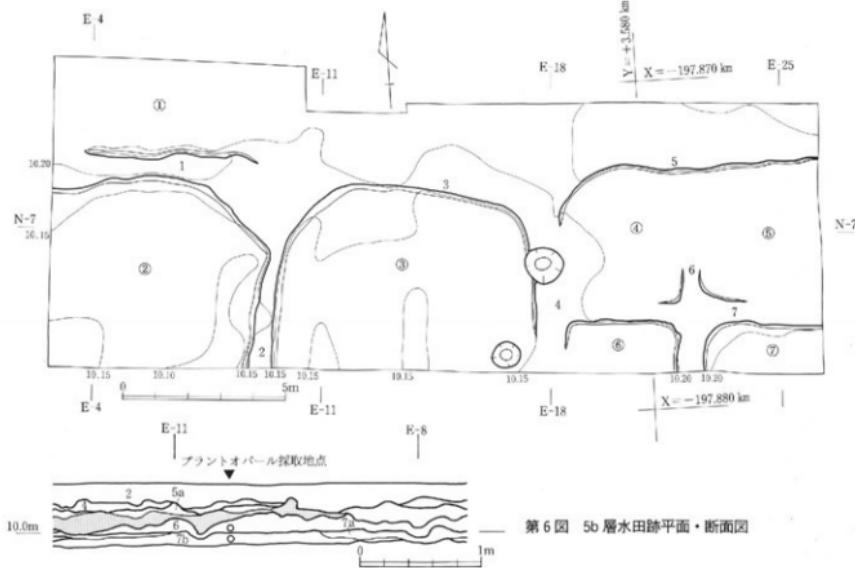
水口状のものが1と2の交差点で検出されている。南側は2が途切れおり幅0.9m、深さは4cmである。他は凹み状で幅0.5~1m、深さ2~4cmである。畦畔状高まりに接して溝状に浅く落込む部分が3ヶ所検出された。1の中央南側、2の西側、3の東側である。長さは2~4m、幅0.7m前後、深さ5cm前後である。堆積土は基本層2層である。

SK01・02は区画④内で検出された。SK01は、径約1.2mのほぼ楕円形、深さ20cm、SK02は0.8×1.2mの楕円形、深さ10cmである。堆積土はいずれも基本層2層である。底面、壁とも基本層4層であることから、下層に土坑状の存在が予想されたが、5層上面でも5層が底面、壁となる浅い凹み、6層では凹みがなくなることから、遺構とは認め難く、上位から強い圧力を受けこんだものと理解した。

この水田面での畦畔状の高まりは、その上に上層の搅拌があまり見られないこと、畦畔状の高まりの脇に上層の耕作が深く及んだ落込みがあること、畦畔状の高まりの直下に疑似畦畔がないことなどから4層に伴うものではなく、2層の形成した擬似畦畔と考えられる。



第5図 4層水田跡平面・断面図



第6図 5b層水田跡平面・断面図

出土遺物は弥生土器片と須恵器片で、1は須恵器は甕の体部片である。2は弥生土器はLR縄文の小片である。

(2) 5層

①5a層

5a層は層相から水田土壤と判断されたが畦畔などの遺構は検出されなかった。

②5b層

5b層水田跡（第6図）

5b層は黒色の粘土層でほぼ全域に分布するが、西端付近では5a層の攪拌を受け残存が悪くなっている。

畦畔状高まり5条、段差2ヶ所、区画7区画を検出している。

畦畔状高まりは、ほぼ東西方向にのびる1とその延長方向の段差3・5、それらに接続する2・4・6・7である。1は方向がN-85°-Wで上端幅0.5~1m、下端幅0.8~1.2m、高さは良好な部分で4cmである。3はやや北に振れN-77°-Wで高さは良好な部分で7cmである。5は真東方向(N-90°-E)で高さは良好な部分で5cmである。1・3・5は、3の方向がややずれるものの連続するものと捉えられよう。2は1・3に広がりながらほぼ直角に接するもので方向はN-10°-E、上端幅0.4~0.7m、下端幅0.6~1mで、高さは良好な部分で6cmである。4は3・5に直角に接するがほぼ西側の段差のみとなっている。その方向は真北方向(N-0°-E)で、高さは良好な部分で5cmである。7は4に直角に接し、6は7に直交する。7の方向はN-85°-W、上端幅0.6m、下端幅0.7mで、高さ4cmである。6は方向N-3°-Eで上端部0.5~0.8m、下端幅0.6~1mで、高さは4cmほどである。

区画は7区画検出されているが全体のわかるものはない。規模のわかるものでは③と⑥の東西で約7.5mと約3.3m、④と⑤の南北が約4mである。標高は10.15~10.3mで北東が高くなっている。

畦畔状高まりの下位に擬似畦畔は検出されていない。

この水田跡は、畦畔状高まりの上に上層の攪拌があまり見られないことや、下位に擬似畦畔がないことなどから上層の4層あるいは5a層の形成した擬似畦畔の可能性が高いといえよう。出土遺物はない。

(3) 6層

6層上面で畦畔状高まり1条と段差2ヶ所を検出した(第7図)。6層は上部が砂層で、下部が粘土層の自然堆積層であることから、畦畔状高まりは擬似畦畔B、段差は耕作深度の違いにより生じたものとして擬似畦畔Bに準ずるものと捉えられよう。したがって、これらの遺構は上層の5bの水田跡が形成したものと考えられる。2は擬似畦畔Bで方向がN-85°-Wのほぼ東西である。1・3は段差で1の方向がN-67°-E、3がN-74°-Eと並行している。出土遺物はない。

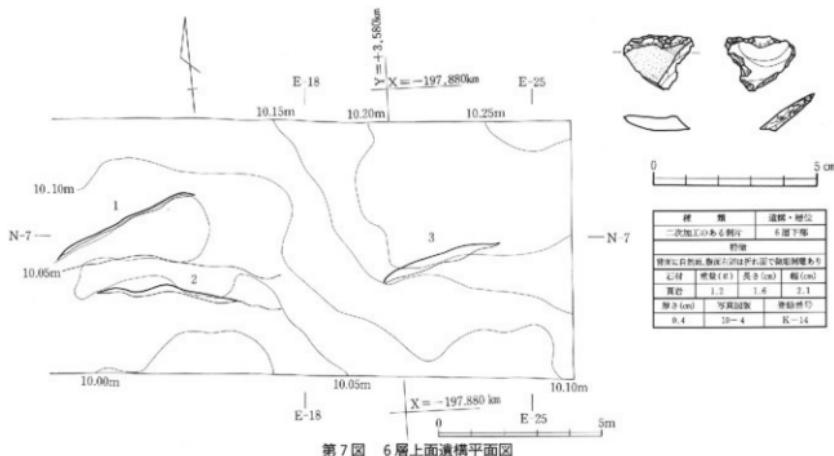
(4) 7a層

7a層水田跡（第8図）

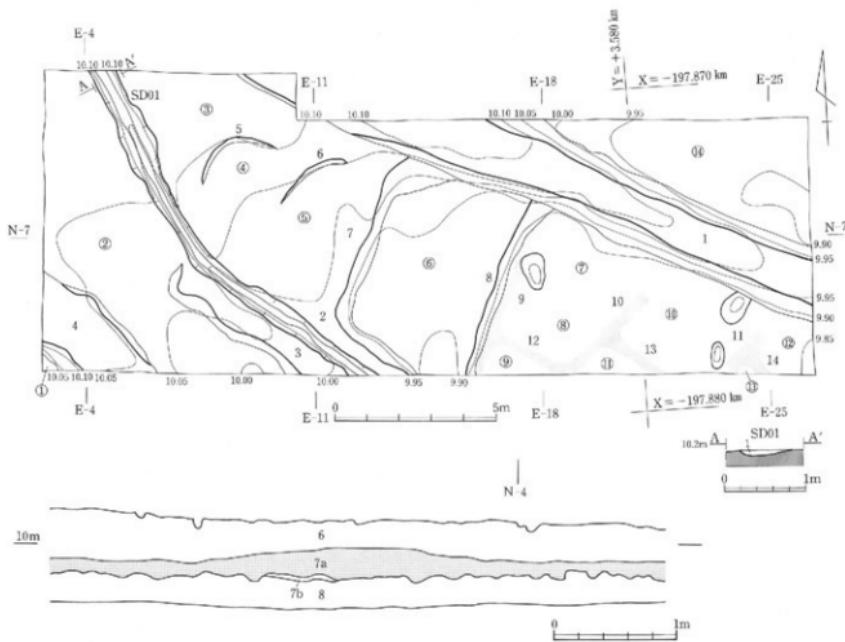
7a層は黒色の粘土層で全域に分布する。7a層を覆う6層は自然堆積層である。

畦畔4条、段差4ヶ所、溝跡(SD)1条、擬似畦畔B6条を検出した。

畦畔4条は北西-南東方向に並行するものである。うち1・4の2条は規模が大きく、1は上端幅1~1.6m、下端幅2~2.4mで方向がN-63°-W、高さが7~15cmと残存の良い畦畔である。4は上端幅1.5~2m、下端幅2.4mで方向がN-46°-W、高さが西側の良好な部分で8cmである。2・3はSD01の両側に沿う畦畔で、方向はともにN-50°-Wである。2は上端幅0.5m、下端幅1m、高さは6cm程度である。3は上端幅0.8m前後、下端幅1.3mで、高さ3cm程度である。2・3が同一の畦畔でSD01が畦畔上を流れる溝とすれば、2・3は上端幅1.9mとなり1・4



第7図 6層上面遺構平面図



第8図 7a層水田跡平面・断面図

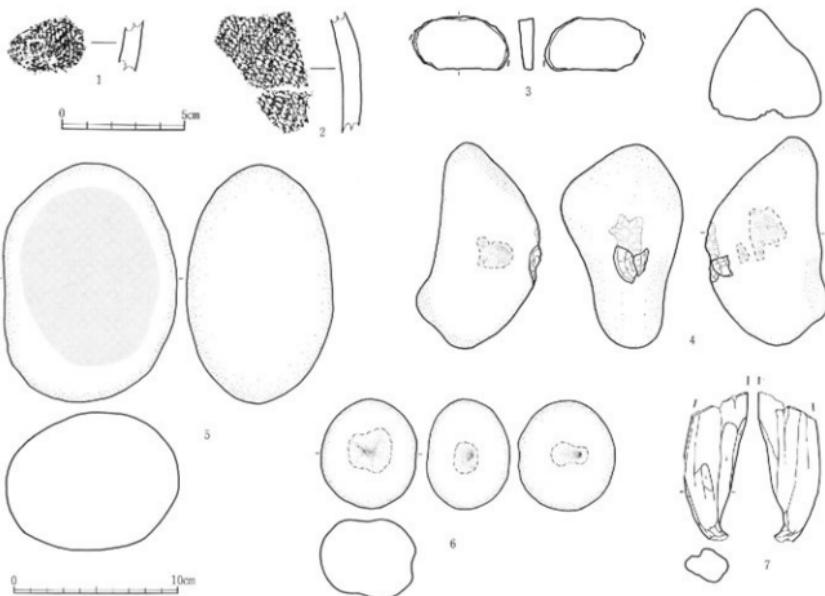
と同様の大規模な畦畔となる。段差7・8は1にほぼ直角に接続するもので方向がともにN-25°-Eである。高さは良好な部分で7が10cm、8が6cmと明瞭なものである。5・6は高さが3~4cmとやや小さく畦畔にも接続しないが、方向が7・8に並行し小区域の残存の可能性が考えられることから段差と捉えた。

擬似畦畔Bは7a層の掘り下げ中に黒色の8層が帶状にのびることで確認された。9は段差8の下位である。10・11は8に並行するがN-50°・45°-Eとやや東に振れている。12・13・14は1に並行し、N-60°・50°・45°-Wである。これらは固定的な小区域が形成したものと考えられる。

区画は14区画確認された。1区画の規模が推定されるのは⑥のみで、3.7×5.8m、面積約21.5m²である。10~14の擬似畦畔Bからは一辺が2~3mの小区域の存在が窺える。標高は9.85~10.1mで北西から南東への傾斜で6層より上位の面とは異なる傾斜となっている。

SD01は調査区北西端から中央でやや屈曲しながら南東に向かい、南半では畦畔2・3の間を流れる。上端幅0.5~1m、下端幅0.1~0.3m、深さ4~9cmである。断面形は浅い皿状で底面は南東へ傾斜している。堆積土は基本層6層の最下部黒色泥炭土である。明瞭な水流の痕跡はないが畦畔2・3と並走することなどから水田跡に関連する水路の可能性が考えられる。

出土遺物は、弥生土器片（第9図1・2）、礫石器（同図4~6）、石製品（同図3）である。1・2はLR繩文の体部片である。4から6は畦畔上出土で、凹み痕、凹み痕と敲打痕、摩痕のあるものである。3は石製円盤である。



測定番号	種類	遺構・層位	内 面	外 面			保存	写真回数	登録番号
				特徴	調文LR	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
1・2	弥生土器	7層	ミガキ						B-2
3	石製円盤	7層				3.2	5.9	0.9	K-5
4	礫石器	7層	円孔、タガキ、根拠岩質變山岩、重さ296g			12.7	7.5	6.8	K-3
5	礫石器	7層	円孔、根拠岩			14.6	11.6	8.4	K-6
6	礫石器	7層	円孔、安山岩、重さ160g			6.7	5.8	4.9	K-4
7	丸	7層	丸穴			9.1	3.5	—	L-2

第9図 7層出土遺物

(5) 8層

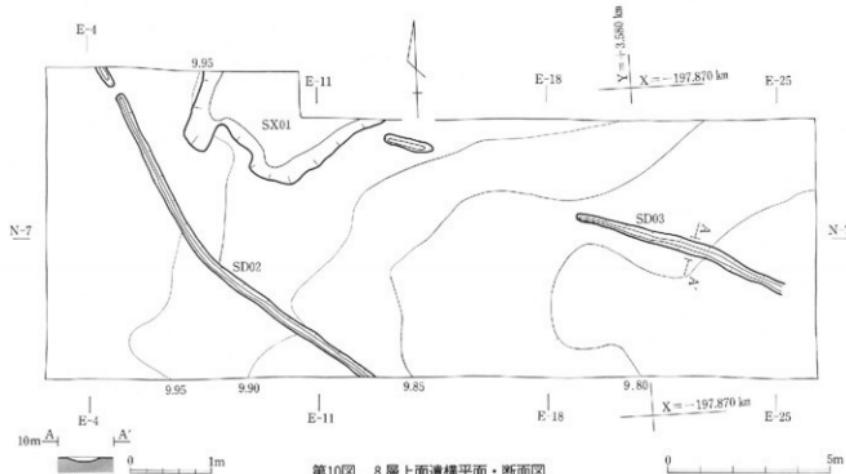
溝跡 (SD) 2条と性格不明遺構 (SX) 1基を検出した。

SD02 (第10図)

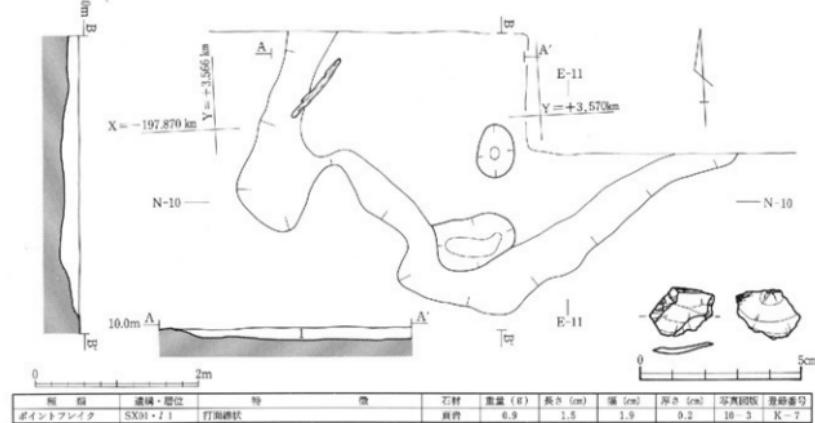
SD1 とほぼ同位置である。上端幅0.3~0.5m、下端幅0.1~0.2mで深さは6cmほどである。断面形は浅い皿状で、地積土は7b層である。出土遺物はない。

SD03 (第10図)

7a層付近1の下位に位置する。上端幅0.3~0.4m、下端幅0.15mで深さ約4cmはである。断面形は浅い皿状で堆積土は7b層である。出土遺物はない。



第10図 8層上面遺構平面・断面図



第11図 SX01 平面・断面図

種類	遺構・想定	特 徴	石 材	重 量 (t)	長 さ (m)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	写真番 号	登録番 号
ポイントフレイク	SX01・I-1	打痕研状	頁岩	0.9	1.5	1.9	0.2	10-3	K-7

SX01 (第10図)

調査区北壁西寄りで検出された。平面形は不整形で全体は不明である。規模は南東が4.5m以上、北東が3m以上で、深さは20cmである。堆積土は1層で、基本層8層を攪拌した状況を呈していたため、プラント・オパール分析を行ったが種は未検出であった。底面は2ヶ所の凹みがある他は平坦である。ポイントフレイクが1点出土している。

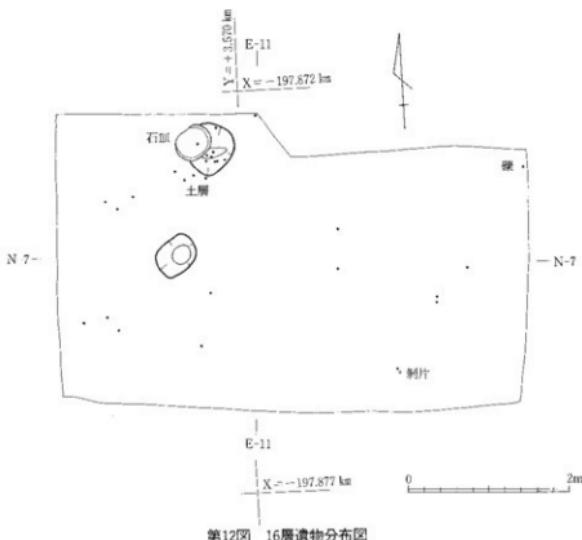
(6) 16層

16層から繩文土器片53点、石器2点、礫石器1点、石皿1点が出土している(第12図)。深掘区北側から石皿が出土し、その脇に土器がやや集中する。土器片はすべて纖維を含む土器で、内外面に条痕あるいは纏文のあるものがほとんどである。A1の同一固体が多く53点中13点で、石皿周辺の出土が多い。

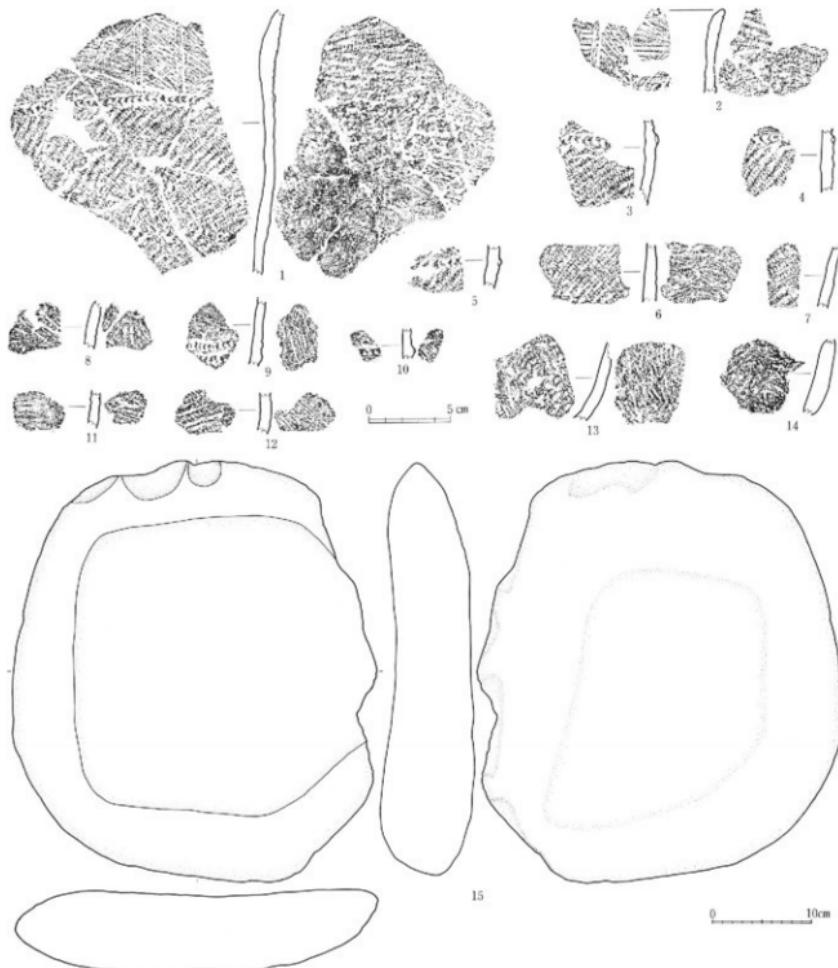
第13図1～7は同一固体の深鉢である(A1)。体部はわずかに膨らみ、口縁部は外傾する。1の縦位沈線の上部が突起になる波状口縁で、その口縁部は肥厚している。口縁部の上端下端に隆帯を巡らし半載竹管による刺突を施す。口縁部は条痕施文後、半載竹管による縦位、斜行、格子状の沈線を施文している。体部は0段多条のLR纏文である。口縁部内面はLR纏文で、体部内面の一部には条痕が観察される。体部内面下半に炭化物が付着している。8～10は口縁部片で、8は斜行沈線、9・10には隆帯がある。11・12は外面纏文内面条痕の体部片である。13・14は底部付近体部片で、その形状から底部は丸みのある尖底と考えられる。15は石皿である。第14図1はエンド・スクレイバー、2は打面側が欠損したフレイクで、ともに流紋岩である。3は磨痕のある礫石器である。

(7) その他の出土遺物

1・2・10層から土師器、須恵器、素焼土器、石器、礫石器、金属製品などが出土している。

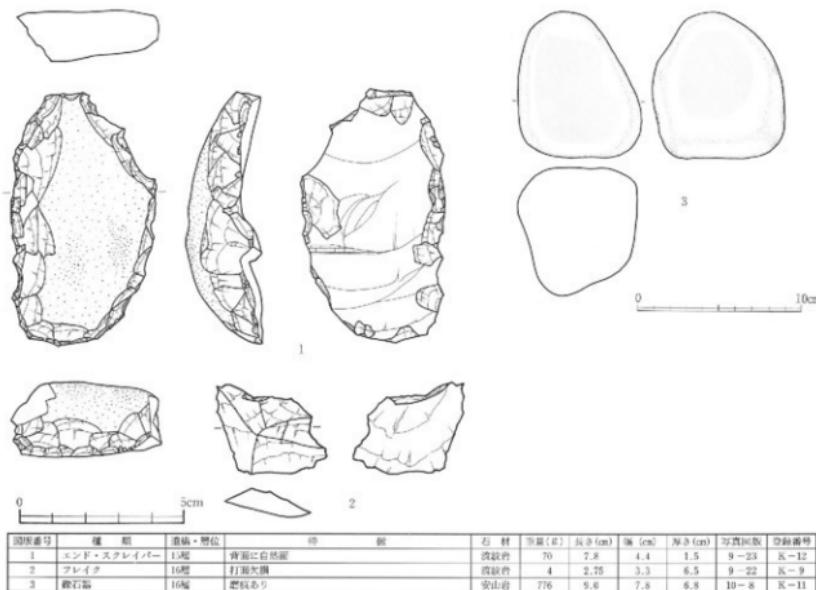


第12図 16層遺物分布図

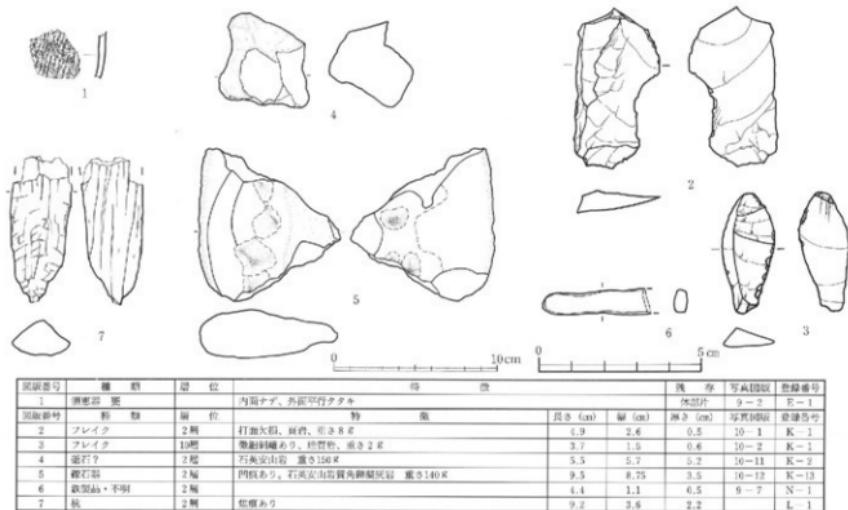


回収番号	種類	深度・層位	内面	外面	残存	写真回数	登録番号
1~7	鍋文土器	深鉢	16層	口縁：鍋文L.R.、体：一部尖頭。底化物状。肥士に纏膜を含む	口縁：輪海剥皮、口縁：朱底一堅皮・側面沈黙(半纏竹管)、底：剥文L.R. (D波多形)	9~8~14	A-1
8	鍋文土器	深鉢	16層	マメツ、胎土に纏膜を含む	条痕 (?) - 小塊	口縁断片	9~17
9	鍋文土器	深鉢	16層	柔軟、胎土に纏膜を含む	条痕、薄帶2条、剥肉	口縁断片	9~16
10	鍋文土器	深鉢	16層	柔軟、胎土に纏膜を含む	条痕、薄帶、剥肉	口縁断片	9~15
11	鍋文土器	深鉢	16層	柔軟、胎土に纏膜を含む	調査不明	体測片	9~18
12	鍋文土器	深鉢	16層	柔軟、胎土に纏膜を含む	調査L.R	体測片	9~19
13	鍋文土器	深鉢	16層	柔軟、胎土に纏膜を含む	剥文、尖底?	底部付近	9~20
14	鍋文土器	深鉢	16層	ケヅ、柔軟、胎土に纏膜を含む	剥文L.R (D波多形)、尖底?	底部付近	9~21
15	石頭	16層	有田次相?	安田型	43.0	36.6	8.9
						写真回数	登録番号

第13図 16層出土遺物（1）



第14図 16層出土遺物（2）



第15図 その他の遺物

5 遺構の所属年代とまとめ

(1) 検出した遺構は、4層、5b層、6層、7a層上面での畦畔状高まり、8層で溝2条(SD02・03)と性格不明遺跡(SX01)である。2~5・7a層は水田耕作層と考えられる層である。16層からは縄文時代早期末の遺物が出土している。

(2) 周辺調査区との対比

今次調査区は富沢遺跡における南部A地区基本層序(佐藤甲:1991)に包括される。近接した調査として、1次(篠原・吉岡:1989)、4次(同)、8次(工藤:1984)、39次(中富:1989)、55次(佐藤甲:1990)、70次(五十嵐:1992)、泉崎浦3次(主浜:1988)がある。それらとの層の対応関係は層相から以下のようなになる。

今次	1次	1次	4次	8次	39次	55次	70次	泉崎浦	南部
IN 試掘	IN 試崎	IN 泉崎						3次	A地区
No.3	No.4	II区							
3					3			4	
4	3		4		4		IV・V	5(平安:灰白火山灰降下以降)	
5a・b	4		4		3a	5	IV・V	6(平安:灰白火山灰降下以前)	
6砂	5	2	5~7			2~4e	IV	9(古墳中期以前)	
6互層	6a・b	3・4	5~7		3b	6a	5a~8	VII・VIIIa	11
7a	7	5	8	8B	4a	9	VIIIb	12	
7b	8			9	6b			13	
8	9~13	6~9			4b~8	7		14(弥生:守下町式期以前)	
11砂		13			10		19	XV	

(3) 4層上面検出の畦畔状の高まりは、2層の水田が形成した擬似畦畔と判断された(2層水田跡)。真東方向を基準とした方形区画を基本と水田跡である。年代は2層中から出土した近世の陶器や周辺との対比から近世頃と推定される。

(4) 5b層上面の畦畔状の高まりは、4層ないし5a層の形成した擬似畦畔と判断された(4層水田跡、5a層水田跡)。両者を同時に検出した可能性が高いが、ほぼ真北を基準とした方向で方形を基調とした水田跡である。年代は層中から出土した土師器や灰白色火山灰のあり方、周辺調査との対比などから、4層水田跡は平安時代の灰白色火山灰降下以降、5a層は平安時代中火山灰降下以前と推定される。

(5) 6層上面の畦畔状の高まりは、5b層の水田が形成した擬似畦畔と判断された(5b層水田跡)。畦畔の方向や区画などについての詳細は不明である。6層は4次の5~7層に相当し、4次の5~7層に相当し、4次の4・5層では古墳時代中期を中心とする遺構遺物が検出されていることや5a層の年代から、5b層は古墳時代中期以降平安時代灰白火山灰降下以前と推定される。

(6) 7a層水田跡では、畦畔4条、段差4ヶ所、溝跡1条、擬似畦畔B6条を検出した。畦畔は傾斜面と同じ南東方向へ並行し、その規模から基幹的なものと考えられる。区画は方形を基調としているが、一辺が2~3mの区画の存在が覗えた。溝跡も水田に関連する水路の可能性が高い。年代は、層中から年代を示す資料は出土していないが、周辺調査との対比から弥生時代中期樹形団式期と推定される。

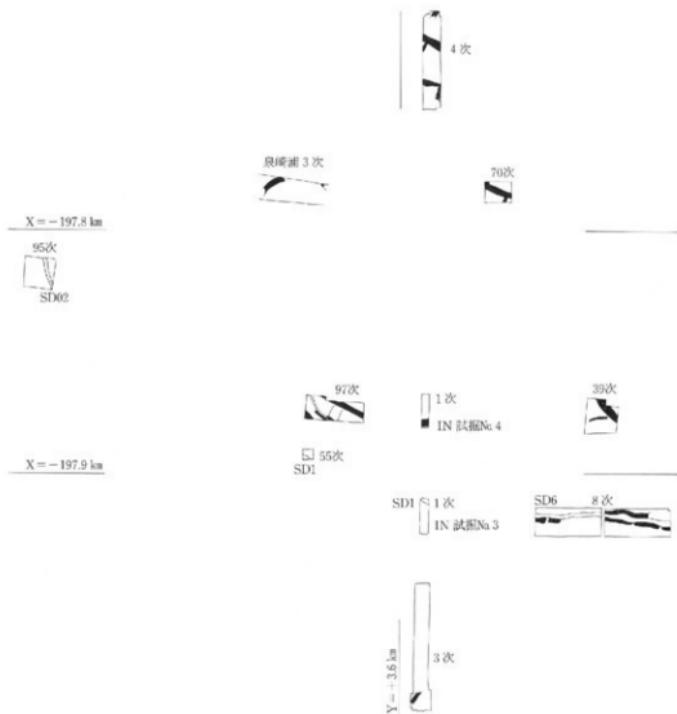
周辺の同時期水田跡畦畔は、1次(IN試掘No.4)5層、3次(泉崎I区)11層、4次(泉崎III区)15層、8次8B層、39次4a層、70次9層、泉崎浦3次VIIb層で検出されている。3次以外の調査区で大畦畔が検出されている(第図)。その規模は下限幅で1.5~3mで、高さが良好に残存している場合が多い。その方向は南東方向(N=40~65°-W)のものが多い。周辺地形面は、1・4・70・97・泉崎浦3次が標高9.8~10.0mとほぼ平坦で、南東に

ある3・8・39次が9.0~9.76mと低くなる南東方向の緩斜面である。大畦畔の方向はこの傾斜方向に沿ったためと考えられる。

また、今次調査区南隣での55次6b層（今次7b層）上面でSD01が検出されている。SD01は南東方向の溝で、その北東側（今次調査側）には非耕作土層の6b層が存在する。その延長方向には今次の畦畔4があり、4の南西側には耕作土が存在する。よって、畦畔4と55次SD01との間には耕作境の在在が想定される。

(7) 8層上面では溝跡2条と性格不明遺構1基が検出された。SD02はSD01と同位置にあるが、8層は自然堆積層であるのでSD01以前の自然流路と考えたい。SD03は7a層畦畔1の下位に位置する。畦畔との関連が考えられよう。SX01は堆積土が基本層の攪拌を受けた様相であるが人為的營力か自然かは不明であるが、これも畦畔1の下位に位置することから水田に関連した溝構の可能性も考えられよう。年代は7a層の年代観より梯形圓式期以前と推定される。

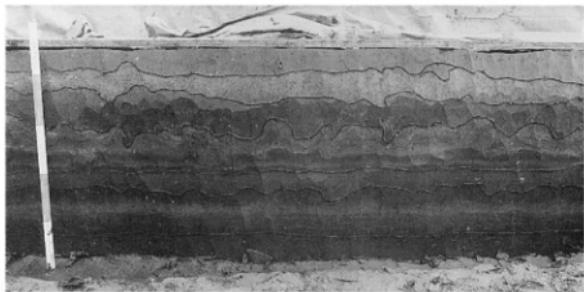
(8) 16層出土遺物はその特徴から早期末葉の縄文条痕土器群に位置づけられる。類例は仙台市北前遺跡、福島県松ヶ平遺跡などに見られる。これらは梨木畠式に比定される土器群である（相原：1990）。



第16図 97次周辺弥生梯形圓式期水田 (1/2500)



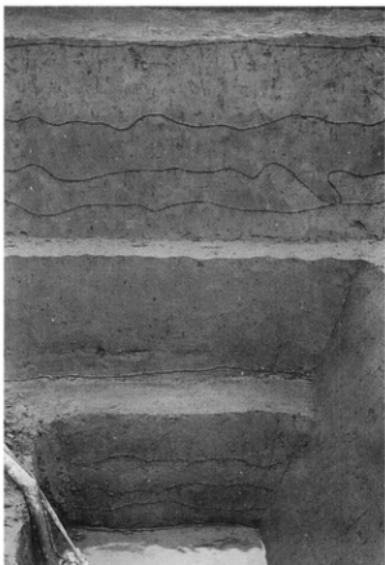
1. 東壁断面 (N48付近)



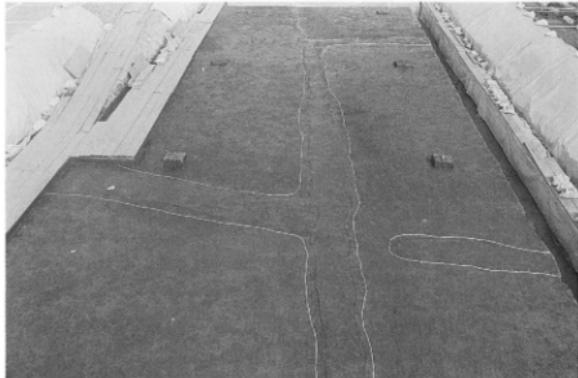
2. 南壁断面 (E21・22付近)



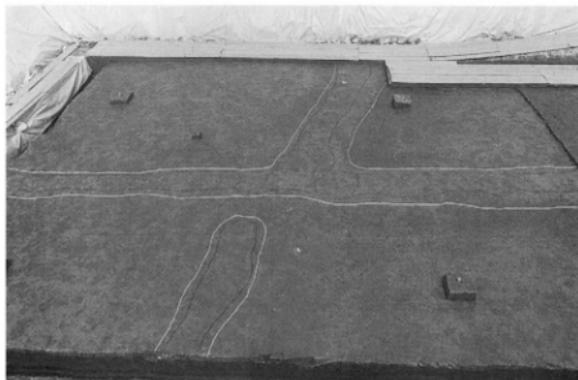
4. 調査区近景 (西から)



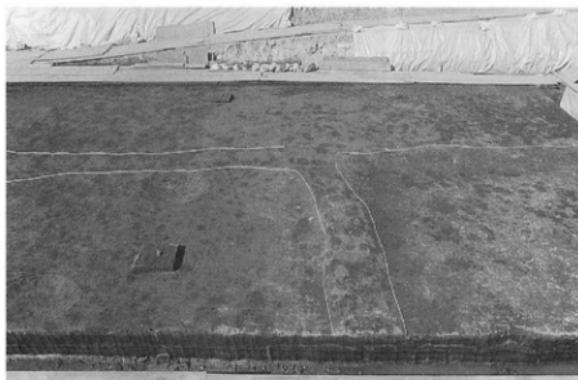
3. 深堀南壁断面



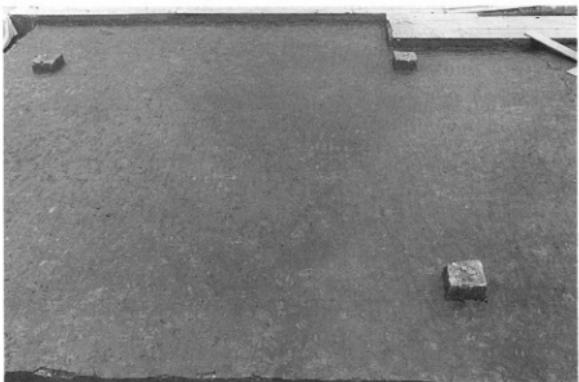
1. 4層水田跡全景（西から）



2. 4層水田跡西半（南から）



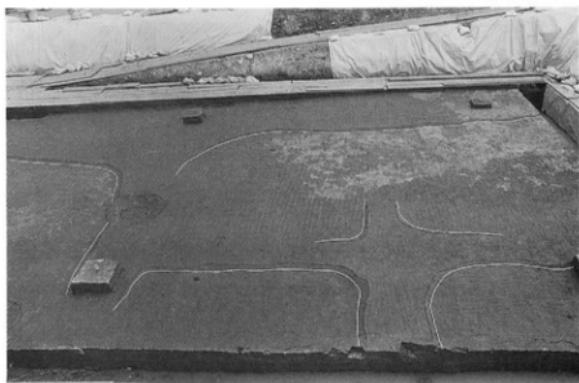
3. 4層水田跡東半（南から）



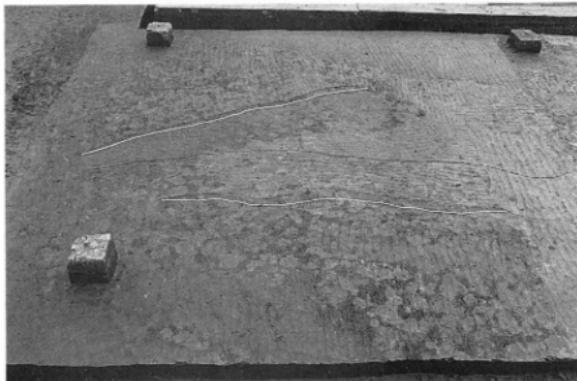
1. Sb層水田跡堆積状況（南から）



2. Sb層水田跡堆積状況（南から）



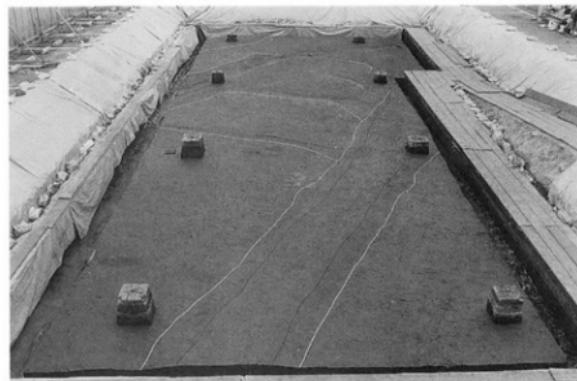
3. Sb層水田跡東半（南から）



1. 6層上面畦状状造構（南から）



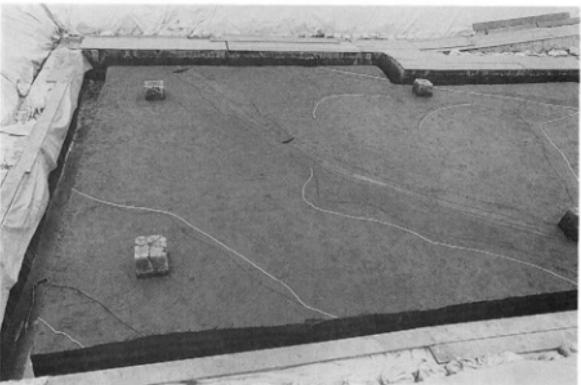
2. 7a層水田跡畦畔検出状況（南から）



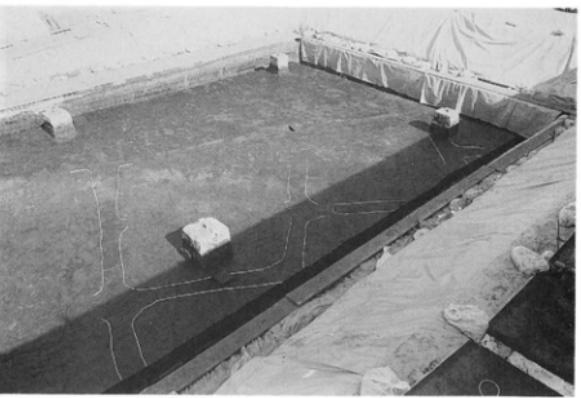
3. 7a層水田跡全景（東から）



1. 7a層水田跡西半（南東から）



2. 7a層水田跡西半（南から）



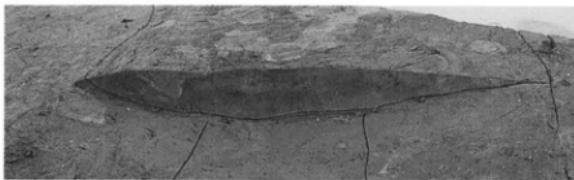
3. 7a層水田跡東半（南から）



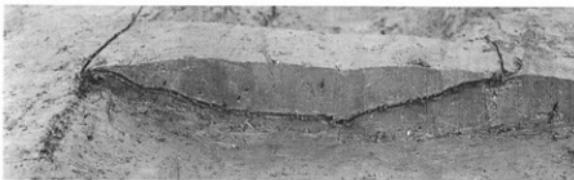
1. 8層SD02・SX01（南から）



2. 8層SX01（北西から）



3. 7層SD01断面（南から）



4. 8層SD03断面（西から）



1. 16層土器出土状況



2. 16層石皿出土状況



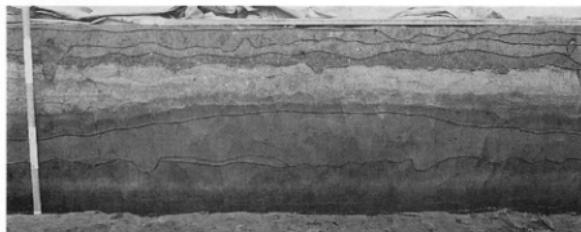
3. 深掘区全景（北東から）



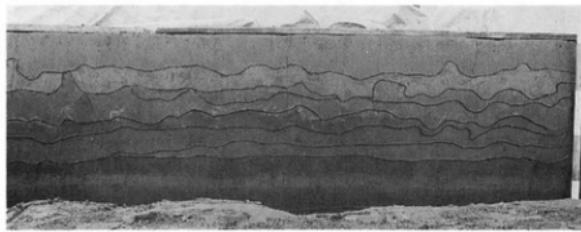
1. 4層水田跡畦畔2南壁断面



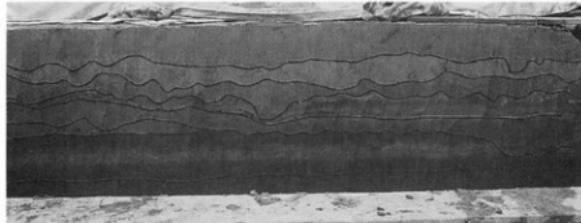
2. 5b層水田跡畦畔2東側南壁断面



3. 7a層水田跡畦畔1東壁断面



4. 7a層水田跡畦畔3南壁断面



5. 7a層水田跡畦畔4西側南壁断面

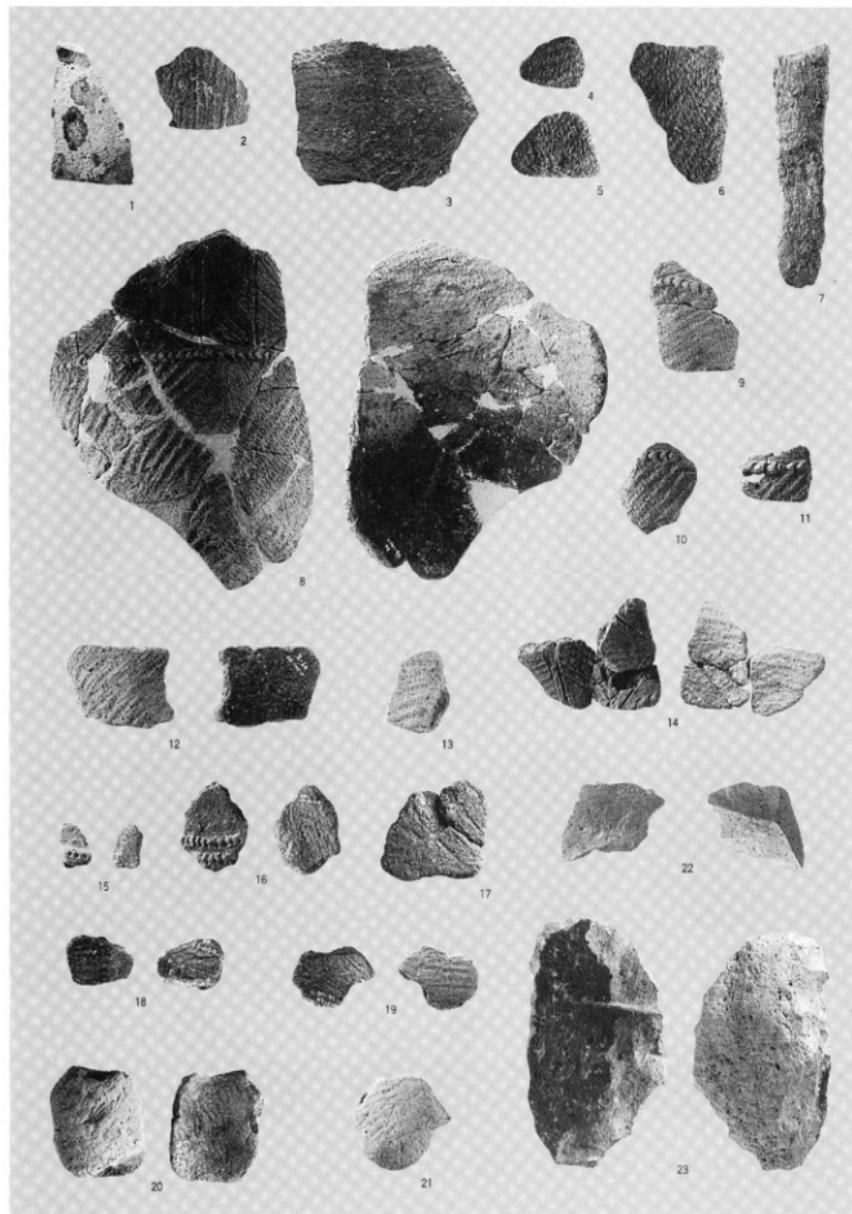


写真9 出土遺物(1)

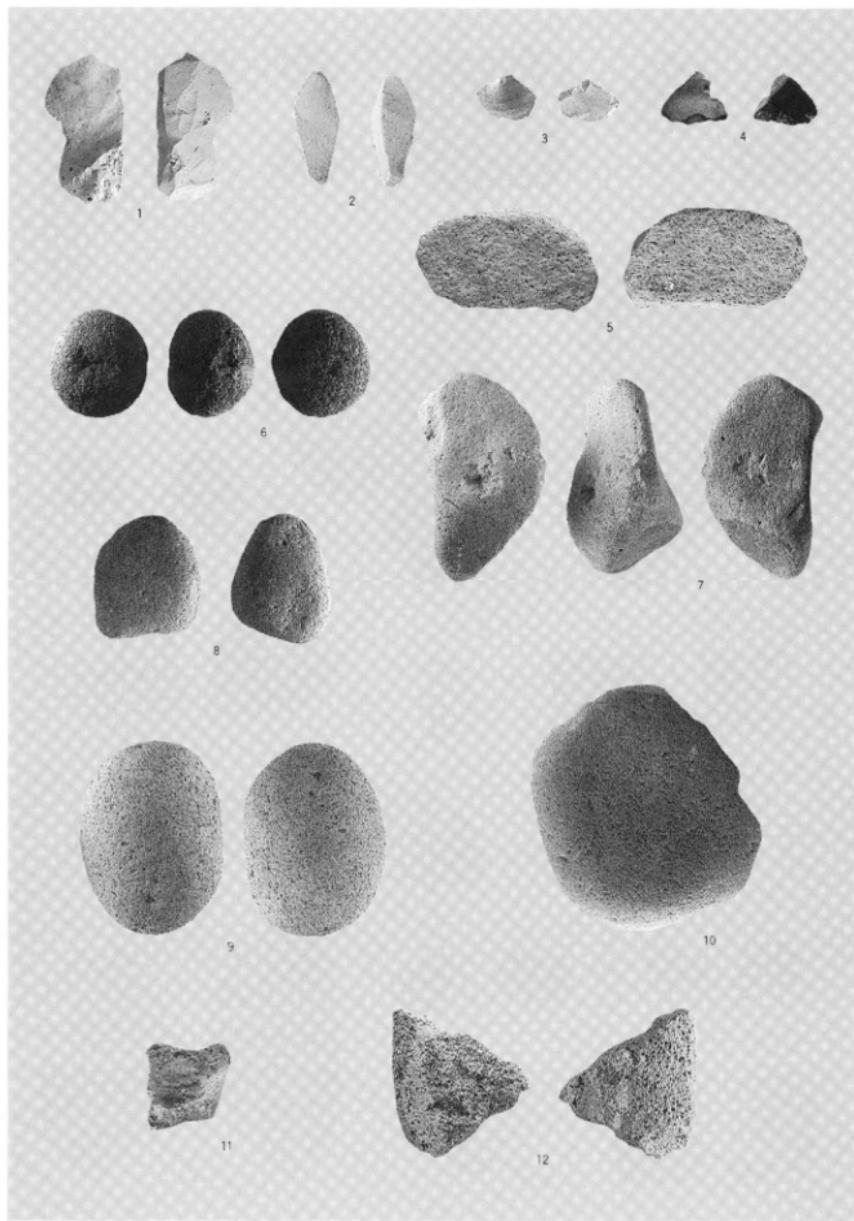


写真10 出土遺物（2）

第4節 富沢遺跡第98次調査

1. 調査に至る経過

平成7年4月17日付けで、RC 3階建テナントビルを建築したいとして文化財保護法に基づく届け出が成された。

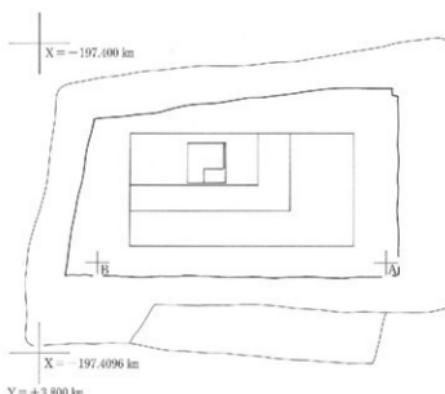
平成8年3月2日、発掘調査の実施に先立って調査の時期、期間、概算契約額、申請者側に準備、提供いただくものの第1回目の打ち合わせを持った。以後も打ち合わせを重ね契約を交わし、平成8年6月19日から調査を開始した。

2. 調査の方法

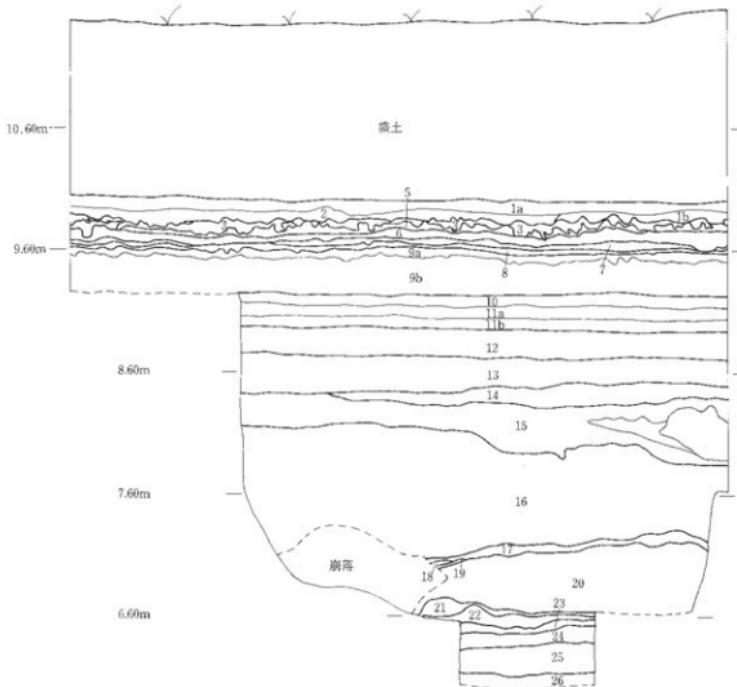
調査箇所は、富沢遺跡の北部に位置する。付近は早くから宅地化が進み、現在約1.5mほどの盛土が成されている。区画整理前の地形を第2図に示した。旧地名では、長町字中谷地、烏居原にあたる。今回の調査対象面積は528m²であるが建物によって破壊される範囲は340m²になる。その中に13×8m、面積約112m²のやや台形の調査区を設定した。盛土が約1.5mと厚いために安全確保のため盛土下での調査可能面積は約60m²であった。遺構の測量には、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -197407.008m・Y = +3810.793m、杭B：X = -197407.000m・Y = +3801.787m）。また、盛土上面での標高は約12mである。検出された遺構の作図に関しては、杭A・Bを基準として1mメッシュを組み縮尺1/20で行った。遺物の取り上げについても杭A・Bを基準としている。写真記録には35mmカメラ2台を使用しモノクローム、カラーリバーサルで撮影し



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図・区画整理前の状況



第1表 基本層序土色記表

層序	土 色	土 性	粘 性	しまり	層厚 (cm)	備 考
遺土						
1a	10YR2/1	黒色	粘土	あり	なし	15a 近年耕作時の遺土
1b	7.5YR2/1	黒色	粘土	あり	ややあり	10 土質整理前の水出耕作土 透半幅で分布
2	5GY2/1	オリーブ黒色	粘土	あり	あり	0~15 壁面に凹凸あり (近世の水田)
3	5GY2/1	黒色	粘土	あり	なし	5~20 壁面に凹凸あり (近世の水田) 5~20 壁面に凹凸あり (近世の水田)
4	5GY2/1	オリーブ黒色	粘土	あり	なし	2~10 植物遺体を多く含む
5	10YR2/2	濃褐色	粘土質泥炭	あり	なし	2~15 植物遺体を多く含む
6	7.5YR1.7/1	褐色	泥炭質粘土	あり	なし	3~16 植物遺体を含む
7	5GY2/1	オリーブ黒色	粘土	あり	なし	2~7 植物遺体を含む
8	7.5YR1.7/1	黒色	泥炭質粘土	あり	なし	5前後 植物遺体を含む
9a	2.5Y2/1	黒色	粘土	あり	なし	2~8 壁下部に凹凸 (近世の水田)
9b	2.5Y2/1	褐色	泥炭	あり	なし	20前後 9a, 9b水田の以降層、植物遺体を多く含む
10	5GY2/1	オリーブ黒色	泥炭質粘土	あり	なし	5~10 植物遺体を含む
11a	2.5Y2/1	黒色	泥炭	弱い	ややあり	10前後 植物遺体を多く含む
11b	10YR1.7/1	黒色	粘土	弱い	なし	10前後 植物遺体を含む
11c	10YR1.7/1	黒色	粘土	強い	なし	10前後 カラムでは判別できなかったが11b層よりはさらに黒い
12	2.5Y4/1	濃褐色	粘土	強い	なし	15~25 叠置、植物遺体を含むが量は少ない
13	10YR1.7/1	黒色	粘土	強い	なし	30前後 植物遺体、炭化物を少々含む
14	10YR2/1	黒色	粘土	強い	なし	0~20 透半幅に分布、火山灰の小ブロックを含んでいる、植物遺体を含む
15	10YR5/2	オリーブ灰色	粘土	強い	なし	20前後 ブラウニ、植物遺体を多量含む
16	7.5G6/1	褐色	粘土	あり	あり(強)	60~120 ブラウニ、層下部に砂質層を介している、植物遺体を少量含む
17	7.5GY6/1	濃灰色	粘土	あり	あり(強)	0~15 ブラウニ、植物遺体を少々含む
18	10YR2/2	濃褐色	粘土	あり	あり	0~16 部分的に分佈、炭化物、針葉樹の葉、根を含む
19	5GY5/1	オリーブ灰色	粘土	強い	あり	0~6 ブラウニ
20	5GY5/1	オリーブ灰色	砂	なし	10~50 ブラウニ、層中に粘土層を2~3枚挟むする	
21	7.5Y5/2	オリーブグレー	粘土	強い	ややあり	0~10 砂かにブラウニ、針葉樹、根、枝、葉を含む
22	10YR2/2	濃褐色	粘土	あり	ややあり	10~15 蒸縮層、針葉樹の葉、根、枝、葉を含む、粘土層を1~2枚挟むする
23	7.5Y5/2	オリーブグレー	粘土	強い	ややあり	4~10 砂かにブラウニ、針葉樹の葉、根、枝、葉を含む
24	10YR2/2	濃褐色	粘土	あり	あり	10前後 蒸縮層、針葉樹の葉、根、枝を含む
25	7.5Y2/3	灰褐色	粘土	あり	あり	25前後 蒸縮層、針葉樹の葉、根、枝を含む
26	5Y5/3	灰オリーブ色	粘土	あり	あり	僅かにブラウニ

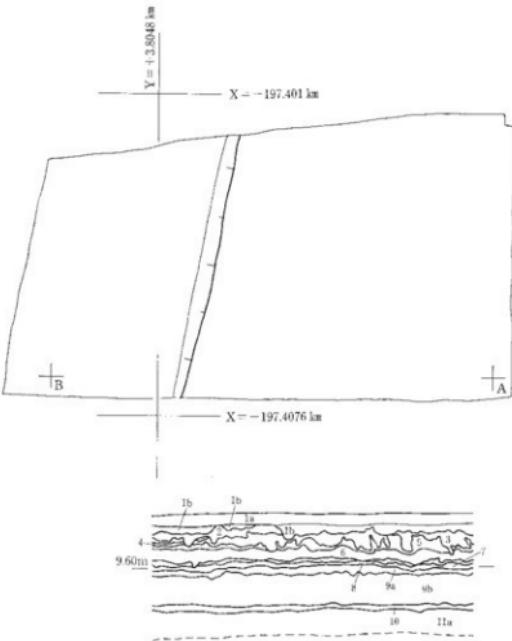
第3図 基本層序土色記表

た。また、ネガカラーについては状況に応じて実施している。土壤サンプリングはプラント・オパール分析用に2層から9a層で行っている。

調査は、平成8年6月19日から調査員2名、スタッフ23名体制で開始した。盛土および旧耕作土である1a層は重機により除去したが、これより以下は人力による調査を実施している。調査区周囲には土層観察および排水用の側溝を設けた。断面観察の結果2・3・9a層に水田跡の存在が確認された。10層までは、調査区全面の精査を行ったが、以下の層序に関しては断面観察の結果、自然堆積層が連続し造構の存在する可能性は低いものとなった。従つて、10層以下の調査は第28次調査（佐藤甲：1988）などで検出されている縄文時代早期の層の存在や、森林跡を伴う後期旧石器時代層の有無の確認を目的としたものとした。後期旧石器時代の森林跡を検出した第30次調査（太田：1991）、第88次調査（太田：1995）は当調査地点から南西に約150m前後と近接していることから、同様の森林跡の広がりの確認が期待された。下層の調査には調査区を $7 \times 3.5\text{m}$ と縮小し、安全性を考慮しながら28層（27・28層はポンプ穴で確認）まで精査を行った（最下面では $1.2 \times 0.8\text{m}$ ）。14層で火山灰ブロック（周辺の調査成果との対比により、十和田中郷火山灰であると予想したが、分析により沼沢テフラの可能性が高いとされた（第3章分析・同定参照。）を検出し、18・22・24・27層で小枝、球果を含む腐植質粘土層を確認した。28層で標高が6mとなり、これ以上の深掘は危険であると判断し、調査の一切を終了したのは7月24日である。

3. 基本層序

今回の調査で確認された層は、大別28層、細別32層を数える。1層は旧耕作土で粘土、2層から4層は粘土で、2層は近世の水田と考えられ、3層は、層中に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰（白鳥：1980）をブロック状に含むことから平安時代以降の水田土と考えられる。尚、下面の凸凹は顕著である。5層～11a層までは、泥炭と粘土が互層をなしており各層に植物遺体を含んでいる。このうち9a層は遺物が出土していないが、周辺の調査との対応から弥生時代中期の水田跡と考えられる。11b層～15層は非常に粘性の強い粘土層である。また、14層中には灰白色の火山灰を含んでおり、分析・同定は行っていないが、周辺の調査成果から見て縄文時代前期に降下したとされる十和田中郷火山灰の可能性が考えられる。15層からグライ化が始まる。16層、17層はしまりの固い粘土層である。18層で



第4図 2層平面・断面図

針葉樹の葉・小枝を含む腐植層を検出したが、部分的な分布である。22層、24層、25層でも針葉樹の葉・根・枝・球果を含む腐植層を検出している。しかし、樹根は検出できなかった。設定調査区が狭いので、これ以上の深堀調査は困難と判断し、砂礫層までの検出は断面した。(ポンプ穴で確認した27層は腐植層、28層は砂層である。)

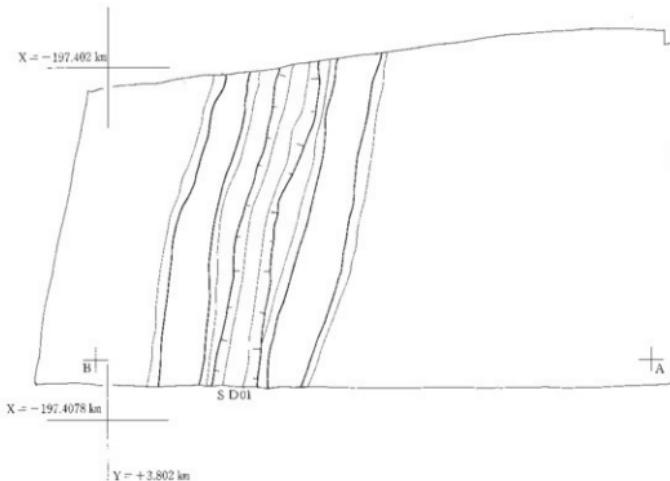
層の堆積状況は、15層まではほぼ水平に堆積しており、以下の層位では、厚く堆積する16層、20層以外は起伏の見られる堆積状況で一様ではない。

4. 検出された遺構と遺物

(1) 2層の遺構と遺物

2層水田跡(第4図)

2層はオリーブ黒色の粘土層である。1b層が堆積するところには、2層はほとんど存在せず、調査区の主に東半部において確認できた。2層の上面で段差を1ヶ所検出したが、鞋印は確認できなかった。段差の検出長5.5m、比高差4~6cmで、方向は、N-10°-Eである。2層上面の標高は、約9.9m前後である。この段差がどの段階で形成されたかについて考えてみたい。上層の1a層、1b層とともに水田耕作土であり、このように水田耕作土が重なる場合においては、層の帰属が問題となってくる。今回の段差が形成された可能性としては、次の2つが考えられよう。まず2層段階での水田耕作において、ここに段差を伴う水田区画が存在し、その後1b層水田が形成される。(これは2層段階の形状を踏襲するものである。)次に1a層水田の耕作によって高い部分の1b層が削平されている。次に考えられるのは、1b層水田の耕作において、この段差を生じるような耕作が成された場合で、このときには2層上面の耕作痕はすべて削平されている。その後1a層水田の耕作によって高い部分の1b層が削平された場合である。今回の検出状況では、このどちらかであるかを確認することは困難であったので、この段差がどちらに帰属するかについては不明であるとしておきたい。



第5図 3層平面図

遺物は、層中から染付の陶器の皿の破片が1点出土したのみである。産地は肥前で、時期は近世以降と考えられる。

(2) 3層の造構と遺物

3層上面で畦畔2条と、畦畔に挟まれた溝跡(SD)1条を検出した。

3層水田跡(第5図)

3層は、黒色の粘土層である。層中には灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。この灰白色火山灰は、富沢遺跡における他の調査箇所において10c前半に降下したとされる十和田a火山灰と層の特徴が似ているので、同様のものと考えられる。層下面の凸凹は著しい。調査区全面に分布するが、北半部は2層水田の耕作により削平され、遺存状況は悪い。畦畔は2条で平行しており、方向はN-10°-Eである。規模は、2条ともほぼ同じで検出長約5.5m、上端幅約0.6m、下端幅約0.8m、水面からの高さは約3cmである。水田区画については不明であり、面積は測りえない。標高は、9.8-9.85mで、北東から南西方向へ緩やかに傾斜している。

遺物は出土していない。

SD01

SD01は、畦畔1、2に挟まれた溝跡である。方向は、N-10°-Eである。規模は検出長約5.5m、上端幅約0.6m、下端幅約0.3m、深さ約5cmである。北東から南西方向に傾斜している。断面形は、逆台形である。埋土は、基本層の2層が堆積しているが、一部溝底で砂の堆積するところが認められ水が流れた痕跡を示しているので、SD01は3層水田に伴う水路であった可能性が考えられる。

遺物は、溝底面から、金属製品が1点出土した。煙管の吸い口で、内部に羅字は遺存していなかった(第8図3)。

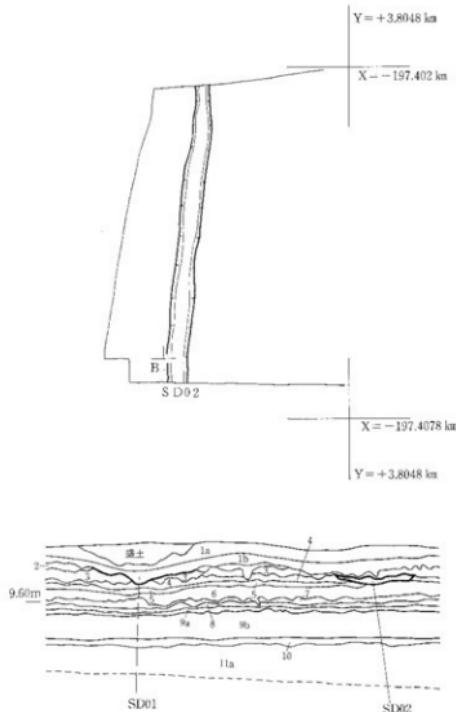
(3) 5層の造構と遺物

5層上面で溝跡1条を検出した。

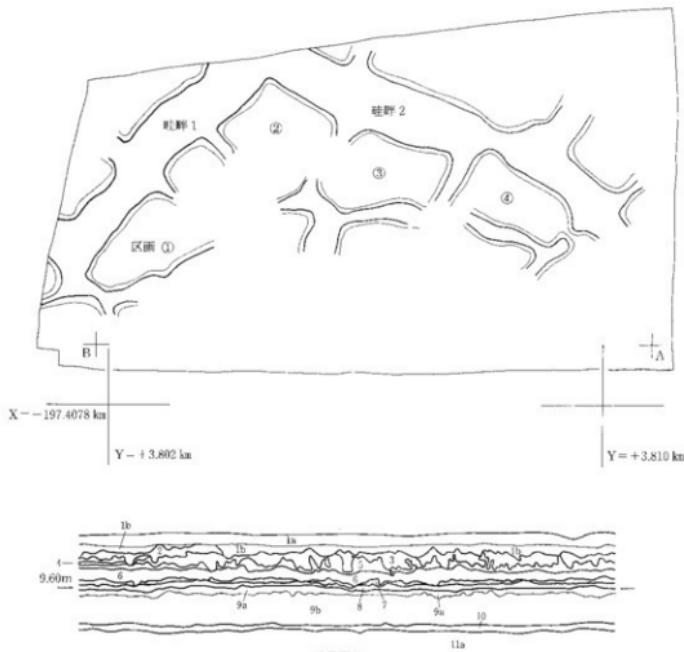
SD02(第6図)

5層の上面で検出し、方向はほぼ真北を向いている。直線的な溝で、規模は検出長約5m、上端幅約0.35m、下端幅約0.2m、深さは約2cmである。断面形は浅い皿形で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面には緩やかな起伏が見られる。埋土は1層で粘性の強い黒色の粘土である。

遺物は層中から金属製品が1点出土した。煙管の吸い口で、内部に羅字は遺存していなかった(第8図4)。



第6図 5層平面・断面図



第7図 9a層平面・断面図

(4) 9a層の構造と遺物

9a層上面で畦畔18条と、水田区画4区画を検出した。

9a層水田跡（第7図）

9a層は、黒色の粘土層であり、層中には植物遺体を含んでいる。層下面の凸凹は、認められるものあまり顕著ではない。また、層中には下層土である9b層をブロック状に含んでいる。

遺存状況が悪く完全な形で検出されたものはないが、畦畔18条とこれらによって区画されると想定できるものが4区画、水口と思われる箇所を1ヶ所検出した。畦畔1、2は比較的規模の大きな畦畔で状況から見て基幹的な性格を持つ畦畔と考えられる。1は方向がN-45°-Eで、上端幅約0.7m、下端幅約0.9、水田面からの高さは約5cmである。2は1と交わり方向はN-65°-Wで、上端幅約0.8m、下端幅約1m、水田面からの高さは約3cmである。畦畔3以下は、畦畔1、2に取りつくものがほとんどである。しかし、遺存状況が悪いために詳細は不明な点が多いが、畦畔1、2との接続がわかる部分では、「T」字状が多い。

これらの畦畔に区画されることが想定できる水田区画は、①から④4区画である。それぞれの大きさは、1.3m²~1.9m²で2m²に満たない小区画のものである。水田面の標高は9.6mほどで北西から南東方向への傾斜が見られる。

作土は、自然堆積層である9b層を摂拌している。層下面の起伏はあまり顕著ではなく、10層までは耕作までが及んでいない。

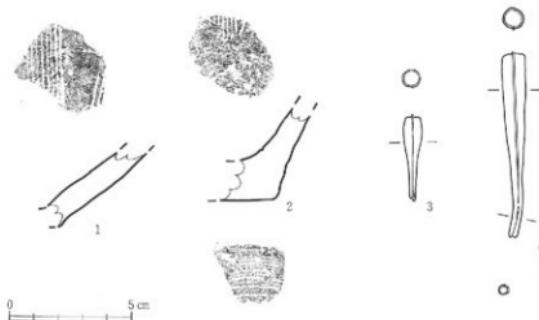
遺物の出土は見られなかった。

(5) 旧石器時代相当層の調査

10層以下には遺構が存在しないことが断面観察より確認されたために、周辺の調査で確認されている旧石器時代層の確認のために調査区を縮小して深掘を行った。その結果、18層で針葉樹（グイマツ）の葉、根、枝、球果を含む腐植層を検出した。更に、22層、24層、25層でも球果等を含む腐植層を検出したが、樹根のような物は検出されなかった（写真図版3）。しかし、これらの層は安定した堆積状況を示すものではなく、大きく波打ち所々にしか存在していない。石器等の遺物は出土しなかった。

(6) 他の出土遺物

1層から陶器の擂鉢底部を出土した（第8図1・2）。产地は在地と思われるが、特定はできない。時期は、室町時代頃と考えられる。



第8図 出土遺物

98次 胸・磁気観察表

調査番号	種 別	遺構・層位	特 徴	層 地	年 代	磁 学	地 磁	資 源	写真図版	登録番号
1	陶器・下り鉢	基本層 1層		Ⅱ相系	17C～	磁強片	口 備	底 面	—	6-1 1-1
2	陶器・下り鉢	基本層 1層		Ⅱ相系	17C～	弱強～体強片	—	—	—	6-2 1-2
写真のみ	陶器・瓦	2層半田	変付	泥炭	過世～	口強片	—	—	6-3 1-3	
写真のみ	陶器・鉢	基本層 1b 層	鉢物	湖戸灰燼	18C～	口強片	—	—	6-6 J-1	

98次 金属器観察表

調査番号	種 別	遺構・層位	特 徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
3	金属製品 キセキ	基本層 1層	すい口のみ	0.50	1.0	—	6-4 N-2	
4	金属製品 キセキ	SD01(3層)、1層	すい口のみ	0.50	0.9	—	6-5 N-2	

5. 遺構の所属年代とまとめ

1. 今次調査は、富沢遺跡の中心から北よりの地点にある。近接した調査として、7次（篠原・吉岡：1989）・25次（松本：1987）・50次（佐藤淳：1990）・76次（五十嵐：1992）・88次（太田：1995）がある。また、富沢遺跡北部東側基本層序（佐藤甲：1991）に包括される。それらの層との対応関係は層々から次のようになる。

今次	7次	50次	76次	88次	北部
2		2	2	2	(近世～現代)
3				3	
4		3	4 a	4 a	(平安：灰白色火山灰降下以降)
9 a	7 c		9 a	11	(弥生：樹形圓式期)
9 b					
14	24				
20			8		
21			9 b		
22			9 c		
23			10		
24			11 a		
25			11 b		

2. 検出した遺構は、2層で段差、3層で畦畔2条と溝1条（SD01）、5層で溝1条（SD02）、9a層で畦畔18条とそれらによって区画された区画を4区画検出した。

3. 2層で検出した段差は、水田耕作に伴うものであることは確認できたが、2層に伴うものか上層に起因するもののかの判断はできなかった。年代は層中から出土した陶器から近世以降現代までの水田跡と推定される。

4. 3層水田跡では、畦畔2条と畦畔に挟まれた溝跡1条を検出した。検出状況から見てこの溝跡は水田に関する水路と考えられる。調査面積が小さいので、水田区画等は明確ではない。年代は、時期を決定する資料は層中からは出土していないが、層中に灰白色火山灰を含むことや周辺の調査との対応から平安時代（灰白色火山灰降下以降）から中世頃と推定される。

5. 5層では溝跡1条を検出している。年代を示す遺物は、層中から金属性の煙管が出土しているが、上層からの流れ込みの可能性も否定できないことから明確な年代は決定できない。

6. 9a層水田跡では、畦畔18条、水田区画4区画、水口1ヶ所を検出した。遺存状況が悪いので、区画がはっきりしないが面積2m²ほどの小区画水田になるものと考えられる。年代は、時期決定資料が出土していないので周辺の調査（7次調査・30次調査）との対応から弥生時代中期（樹形圓式期）の水田跡と推定される。また、近接する調査では畦畔を伴う水田跡は検出されておらず、同時期の水田跡の広がりが確認できた。

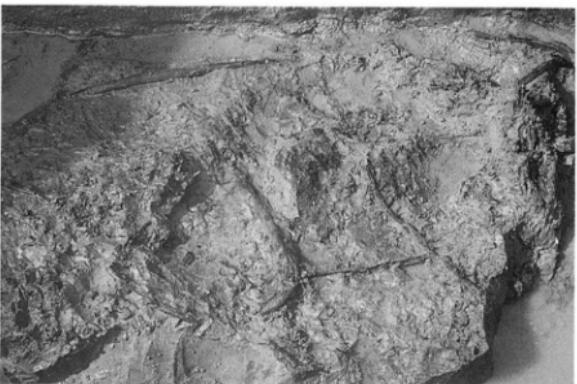
7. 21層以下で検出した腐植層は、主にグイマツの葉・枝・球果を含んでいる。これらの層の自然科学的な年代測定は行っていないが、周辺の調査の成果より後期旧石器時代の相当する層と考えられることができる。



1. 9a 番水田跡検出状況確認（東より）



2. 9a 番水田跡検出状況確認（東より）



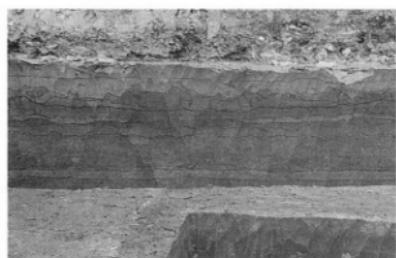
3. 22番高塚層全景（南より）



1



2



3



4



5

- 1 SD02 全景
2 3層水田跡検出状況（東より）
3 北壁 1段目セクション①（南より）
4 北壁 2段目セクション②（南より）
5 北壁底地層（南より）
6 出土遺物

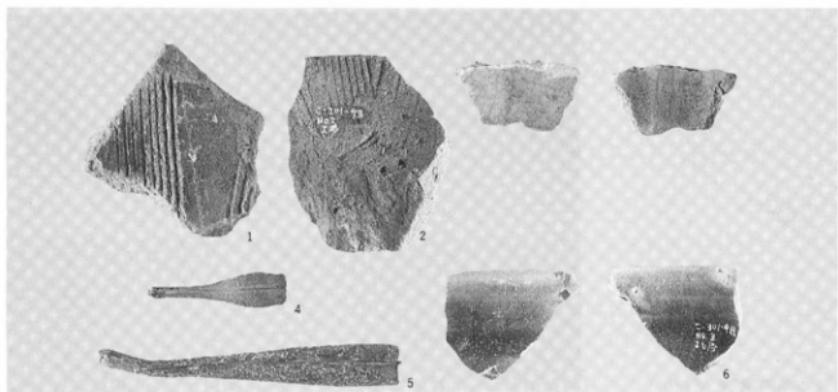
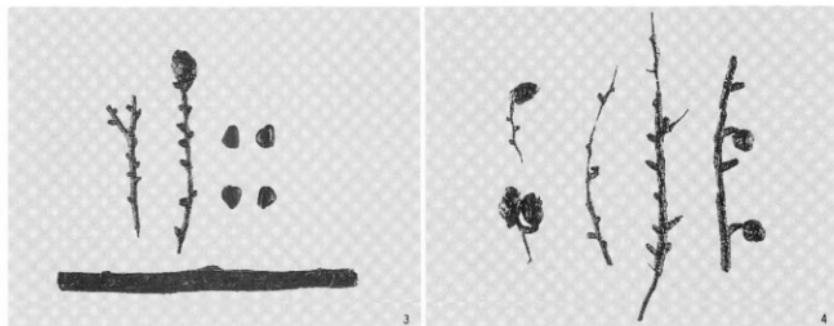


写真 2



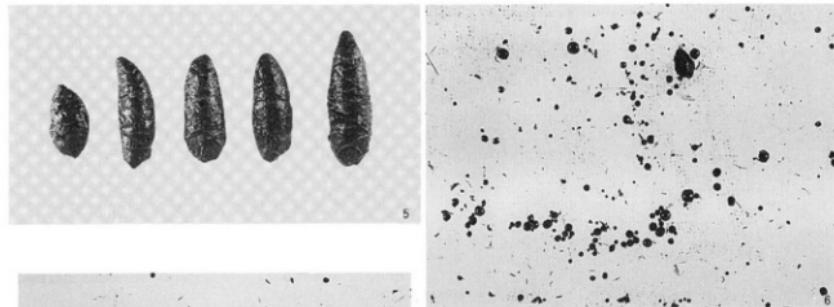
1

2



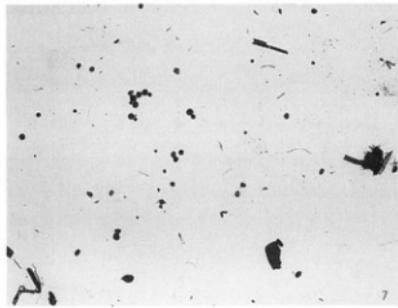
3

4



5

6



7

18層 トミザワツウヒ (種果)

18層 グイマツ (種果)

18層 グイマツ (種果十枝)

22層 グイマツ (枝十種果)

22層 トミザワツウヒ (種果)

24層 トミザワツウヒ (種果)

25層 トミザワツウヒ (種果)

第5節 富沢遺跡第99次調査

1 調査に至る経過

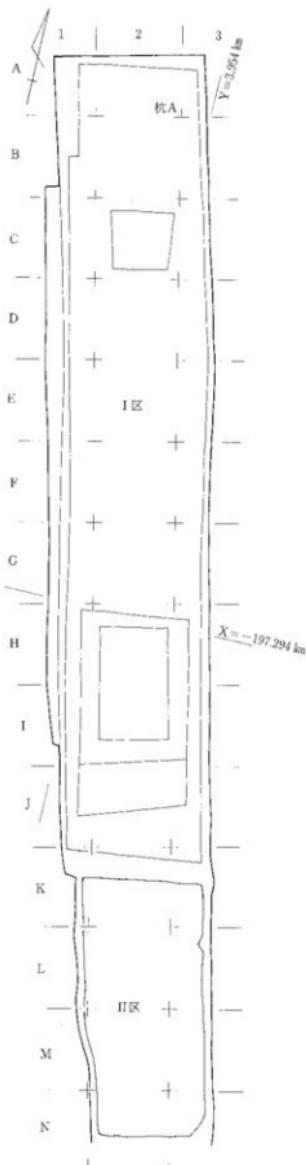
平成8年7月4日付で、(仮称)仙台女性センター、大規模小売店舗等の建設に伴い旧東北特殊鋼株式会社(以下「特殊鋼」と略す)の敷地の西端に道路を建設したいとして文化財保護法に基づく届け出が成された。平成8年7月17日に第1回目の話し合いが関係各課、機関との間で持たれた。内容は、調査時期、期間、契約額などであり、以後も話し合いを随時行い契約を交わし、平成8年8月19日より調査を開始した。

2. 調査の方法

調査箇所は、富沢遺跡の北部に位置する。特殊鋼の敷地として利用されていたところで、西隣の民地との境にはブロック塀が立っていた。そのため調査に先立ち塀、および基礎の撤去を行った。

今回の調査対象面積は、1300m²であるが、隣地が近いので安全確保のため南北約115m、東西約9m、面積1026m²の調査区を設定した(第1図)。しかし、重機により盛土を排除したところ特殊鋼時代の大規模なカクランが露出し、地表から約1.5mほど下げたところで湧水が激しくなり調査を断念した箇所がある【この箇所は、II区とIII区の間に相当し、昭和29~30年頃まで存在した特殊鋼の大形池跡である。(第4図)】。そのため調査区をI~III区に分け調査を実施している。盛土を除去した後の各区の調査面積は、I区433m²、II区189m²、III区129m²である(第2図)。遺構の測量は杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平

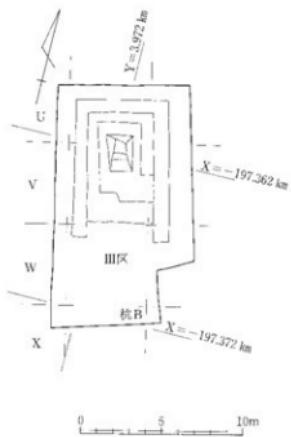




第2図 調査区設定図

面座標系Xにおける座標値を測量し、遺構内の正確な位置を把握している（杭A：X = -197263.373m・Y = +3952.337m、杭B：X = -197370.776m・Y = +3976.095m）。基準杭A・Bを基に5mメッシュを組み南北方向をアルファベット、東西方向を算用数字をあて、その組み合わせでグリッド名とした（第2図）。遺物の取り上げ、遺構の実測にはこれらグリッドを更に1mメッシュに分けて行っている。遺構実測図は1/20を基本とし、遺物が集中するようなところでは随時1/10などで実測し作図している。写真記録には、35mmカメラ2台を使用し、モノクローム・カラー・リバーサル撮影を行い、カラーネガは随時インスタントカメラで行っている。また、空中写真撮影には6×7、4×5の大型カメラ等を使用している。自然科学分析用としてプランツ・オパール分析にI・III区で2層～10層、火山灰分析用に35層から土壤サンプリングを行った。また、37層から出土した樹木片を¹⁴C分析用に採集している。

調査は、平成8年8月19日から調査員2名、スタッフ23名で開始した。盛土を重機で除去し、以下は人力による調査を実施している。調査区の周囲には排水と土層観察を兼ねた側溝を設定した。断面観察の結果5・7・12・14層に水田土壤の可能性のある層の存在が確認されたので9月18日、調査員1名・スタッフ19名を増員し、遺構の検出に努めた。また、12月からはスタッフ17名を増員し調査を行った。



ている。

16層上面までは調査区全面の精査を行ったが、以下の層位は自然堆積層が連続することが確認され、また、周辺の調査の成果からも同様のことが窺えるので、これより以下では28次調査などで検出されている縄文時代早期の層および、30次・58次・88次調査などで検出されている森林跡を作り後期旧石器の層の有無の確認を目的とした深掘り調査を実施した。深掘り調査区はI区2箇所、III区1箇所設定し、深掘りに関しては安全管理に十分に配慮しながら行った。III区32層中で十和田中源火山灰と思われる火山灰ブロックを検出した。また、III区35層からナイフ形石器1点が出土したので東南に1×1mほど拡張したが、これ以上の出土はなかった。III区では37層を確認した段階で標高5mとなり、また、ボーリング棒で下層に疊層の存在を確認できることによりこれ以上の深掘りは危険であると判断し調査を終了した。III区で確認できた腐植層は、34層・37層・38層である。I区では、34~37層で腐植質粘土層を検出した。しかし、37層まで掘り下げた段階で湧水が激しくなり、これ以上の調査は危険であると判断し12月27日調査の一切を終了した。

3. 歴史的環境

富沢遺跡の全般的な自然的・歴史的環境については、すでに何度か取り上げられており割愛する。詳細は富沢遺跡第15次調査（斎野他：1987）、同第30次調査（太田他：1991）の報告書を参照していただきたい。ここでは、特殊鋼の敷地付近について述べることにしたい。

特殊鋼の敷地内の旧地形は、北部で南側に張り出す微高地となっており、この上に金岡八幡宮が奉られている。南部と西部が低地になっている。特殊鋼の所有地になる前は「舞台八幡宮」と呼ばれ、地元の信仰を集めていたようだ。この八幡宮は塚上にあるが、塚自体は古墳と理解されており、仙台市では「金岡八幡古墳」として登録している。ただ、調査されたことはなく詳細は不明である。

この八幡宮は、「名取郡誌」によれば天喜年中に河内国平岡より遷祀したと言い、その後永禄年中に地元の国人領主栗野大膳が再興したといわれる。また、「東北特殊鋼二十年小史」によれば、明治18~19年頃に火災に合いその後荒廃していた。昭和14年に特殊鋼がこの地一帯を購入し、その際八幡宮の再建（昭和15年）を計った。工事直前まで塚上には数百年を経たと見られる老杉や三本の松、小さな堂祠があった。また、工事に際しては、延宝や安政などの年号のある墓石・屋根瓦・煙管などが発見されたと指摘されている（発見位置は不明）。特殊鋼の敷地になる前は、地元では神社の周辺にある旧字名の「宮田・八幡前・矢流」などは神域であったと言い伝えていたようである。この神社や調査地点の属する行政単位は、中世には正応五年（1292）の『中務丞惟秀譲状』（斎藤文書）にある「なとりのこほりひらおかのかう」にみられるように、片穗氏が地頭代である名取郡平岡郷に属していた。近世には「平岡村」と呼ばれていたことが『封内風土記』などにみえる。第3図の『名取郡北方根岸村・平岡村入会絵図』（文政五年）でも「平岡村」が確認できるとともに、塚上に鳥居が表現され「舞台八幡」の名が明記されている。この神社は、前述したように河内国平岡より遷祀したという記述と村名が一致する点興味深いのであるが、これを裏付ける資料はないようである。いずれにしろ、この神社はこの村の重要な位置を占めていたと推察される。なお、調査区のI区内に「八幡前」と「鳥居原」の字境が位置することが、地図の検討によって判明したことを報告しておきたい（第3図）。

4. 基本層序

今次調査区は特殊鋼敷地内にあり、工場解体に伴って削平され、その後山砂による盛土整地がなされていた。このときの削平や工場使用時の搅乱等によって、I・II区の基本層上部は失われている。一方、南側のIII区は、元来低地部のためか工場建設以前の耕作土が、盛土によって保存されていた。なお、調査区北部では、基本層1層以下

第5図 富沢道路第99次調査



区画整理前の都市計画図 昭和33年

仙臺市長町八幡前附近實測平面圖

鉢巣堂・新町今幸

新町今幸

「東北特殊鋼二十年史」より引用



第3図 調査地付近の土地利用実測図



第4図 昭和30年当時の特殊調査敷地図
「東北特殊調査十年史」より引用

クがのるが、III区では層中に混入している。II区では火山灰が確認できない。6層より17層までが泥炭質粘土・粘土層で、植物遺体の目立つ層群である。特に、II区・III区に分布する15層は、植物遺体を極めて多量に含有している。これらの層序中、7a・8・12a・14層が水田土壤である。また、10a層も下面に細かな起伏があり、水田土壤の可能性がある。ただし、畦畔等の水田施設は検出されなかった。III区では、16層以下の層がI・II区と異なるようになる。弱い還元化は、7層以下で認められるようになる。18層は風化礫を含む砂層であり、I・II区に分布しIII区には認められない。I区北部では層厚が非常に厚くなっている。19~24層は粘土層であり、上層に比べて植物遺体は非常に少ない。25層は砂礫層で、上部は黒く土壤化している。この層も18層同様、III区では認められない。26~30層は粘土層で、このうち28層で火山灰と見られるブロックが出土した。また、28~29層の上面でビットが検出され、樹根跡と判断した。31~36層も粘土層であるが、還元化して緑灰色へと変化する。32~36層は締まって硬く、特に33層は緑色が強く非常に硬い土である。腐植層そのものは検出できなかったが、腐植質粘土層(35層)は確認できた。旧石器時代に相当する層である。また、34~37層中には、針葉樹の葉が含まれているが、球果・樹根・枝等は出土していない。37層は砂層である。

(III区の特徴)

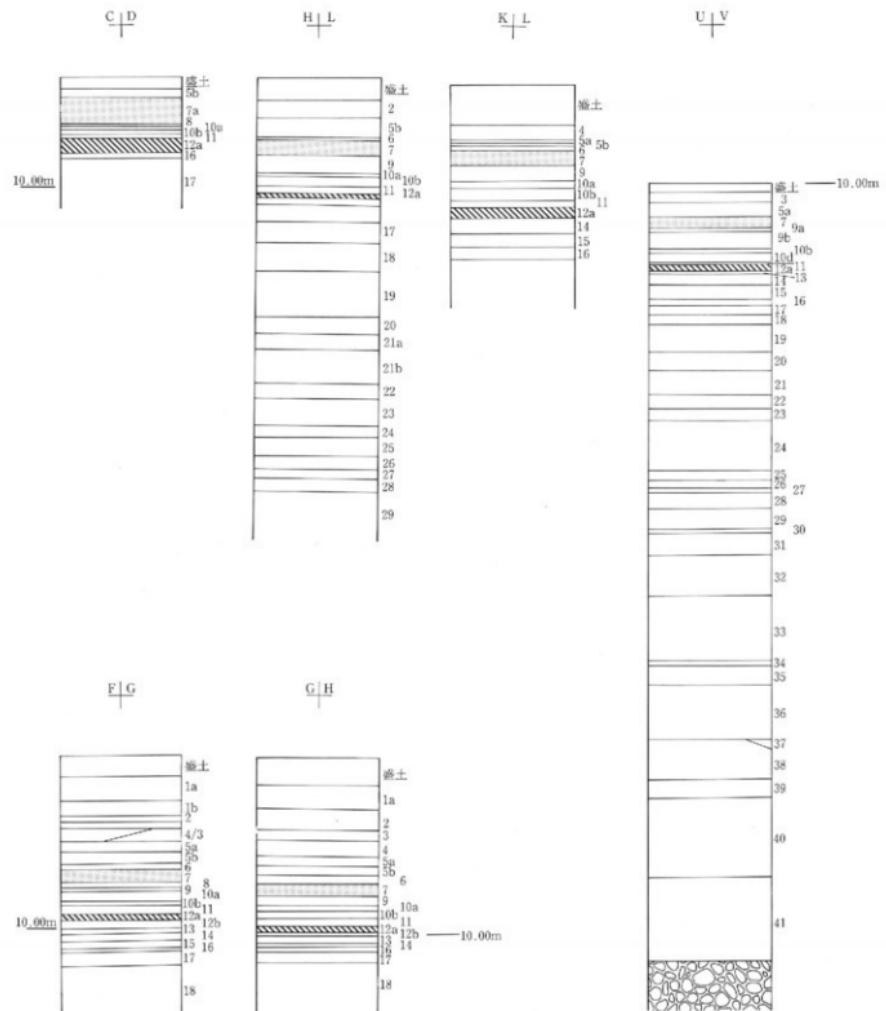
III区では5a層が存在し、9層が2層に細分される。III区では泥炭質粘土が発達しており、16層以下でも顕著である。16~31層は泥炭質粘土・粘土であるが、風化礫を含む24層を境に上・下に大別できよう。24層自体は、I区の18層に対応する可能性があろう。31層では、上面に火山灰ブロックがのり、層中から縄文時代早期末の条痕土器が出土した。この火山灰の存在から、I区の28層、第98次調査区の14層、地下鉄長町南駅深掘り区(第5次調査)の33層や、同長町南駅B換気口区(第17次調査)の24層との対応が考えられる(1989: 篠原・吉岡)。32~41層は還元化の顕著なシルトや粘土の層が主体で、締まっている。特に、38~40層は強い還元化を受け緑色の土に変化している。但し、これらの層はI区ほど硬く締まつてはいない。腐植質化が見られるのは34~37層で、マツ科と思われる針葉樹の葉が含まれている。また、37層では枝、38層では木片や種子(約1.5cm×約0.8cm・中空)3個体分が検出された。今回の調査で特に注目される点は35層で1点ではあるが石器が出土したことである。本遺跡では、これまで石器の出土は第30次調査地点に限られていたが、今回の出土により分布域が広がった。

以上で層序の特徴を概観したが、次に地形との関係について若干触れておきたい。

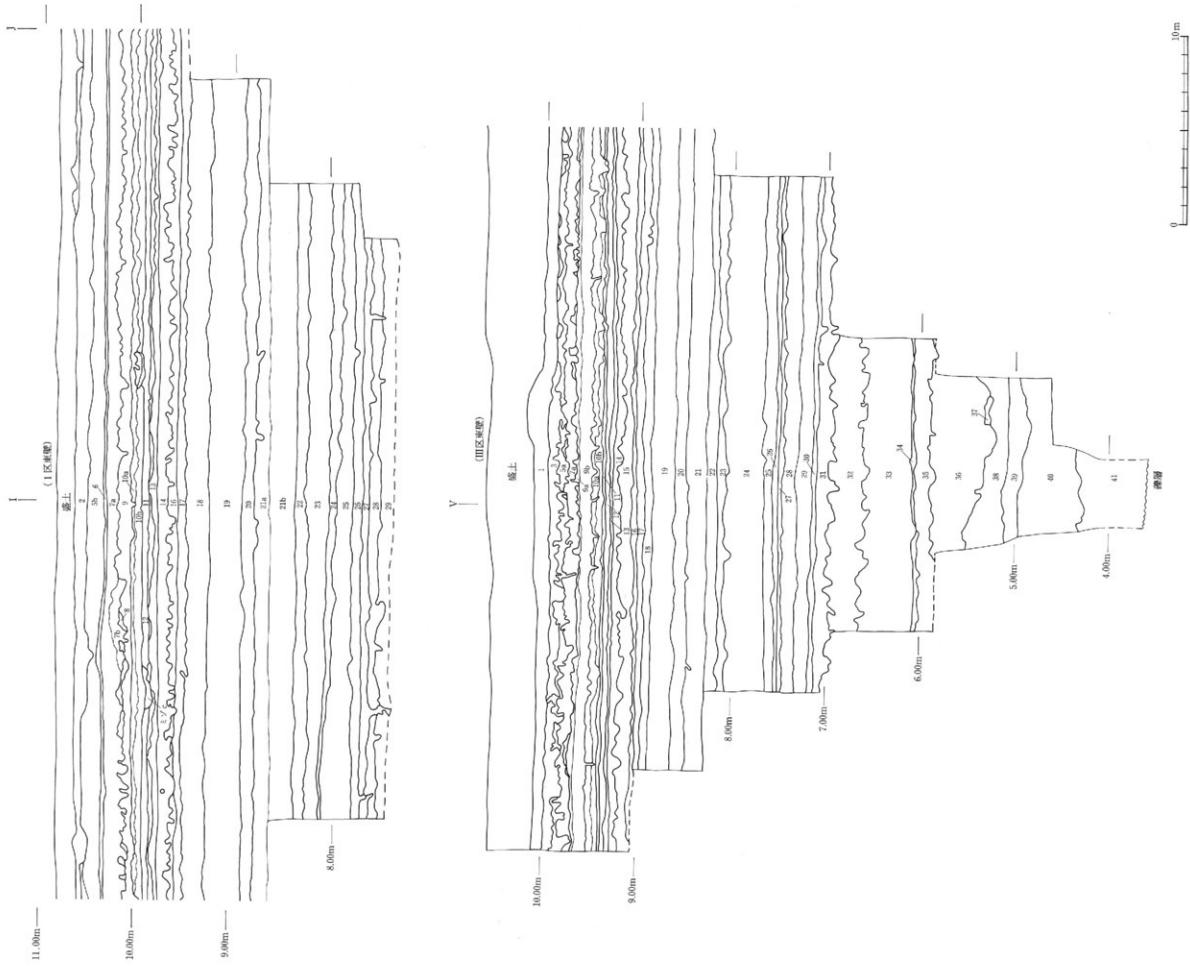
今回の調査区は、遺跡の北端部にあたり北側の微高地から東・南西に下がる傾斜地である。調査区内では、I区中央からやや北寄りと、II区・III区間に傾斜の変換点があるようである。基本層序もこの変換点に対応するよう、I区北部では下層の砂層が発達しており、III区では泥炭質粘土や粘土が発達している。I区では、変換点付近で各層水田跡の大畦群の集中傾向が見られる。一方、旧石器時代の地層は、I区・III区ともおよそ34層以下が相当する

の層序は西壁セクションのみ確認できるが、1~4層の平面的精査・理解はできなかった。

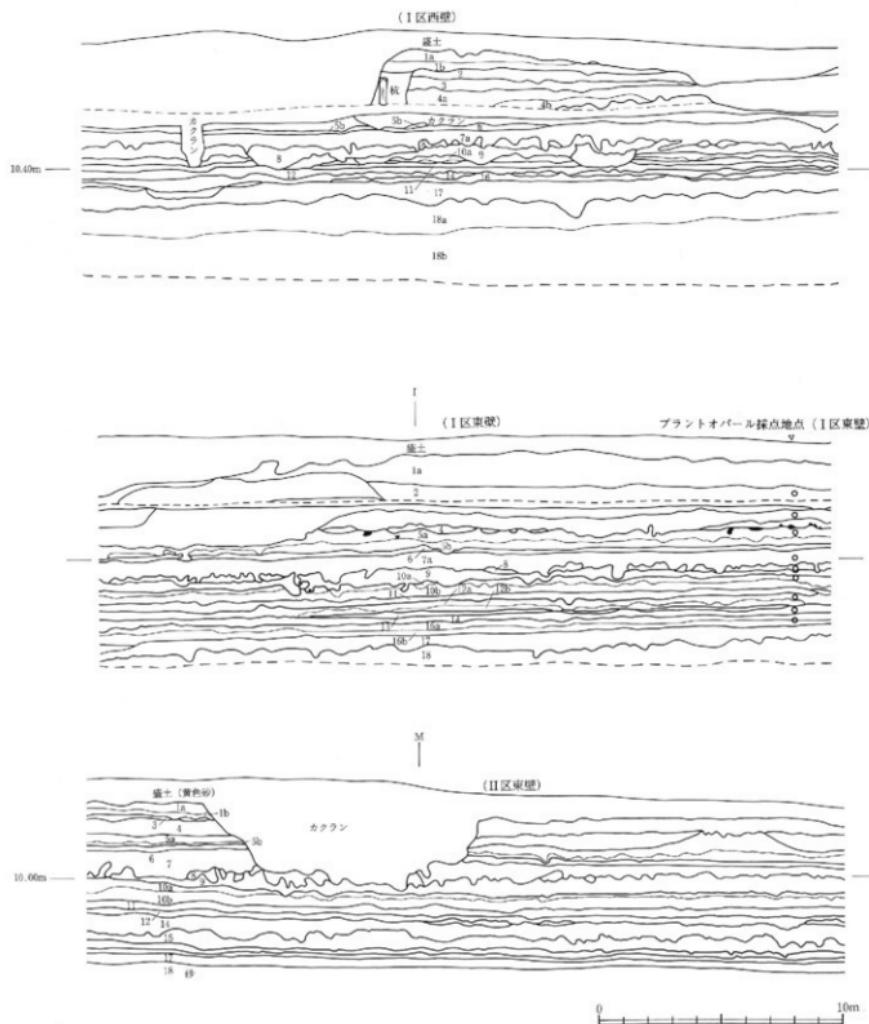
基本層はI・II区では大別37層、細別43層に分けられたが、さらに細分可能な層もある。1~3層は、砂を多量に含むシルト系の土壤である。いずれも水田土壤と考えられる。4層は、風化礫を含みラミナ状の堆積を示す砂層である。下部に薄い粘土層がI・II区で見られ、一部で灰白色火山灰をブロック状に混入する。5層はかなり砂の影響が認められる。5a層は水田土壤だが、下部に比較的厚い砂層を伴う地点(I区南半~II区)がある。I区では本層の上面に灰白色火山灰ブロック



第5図 層序模式図



第6回 I・山区基本層序



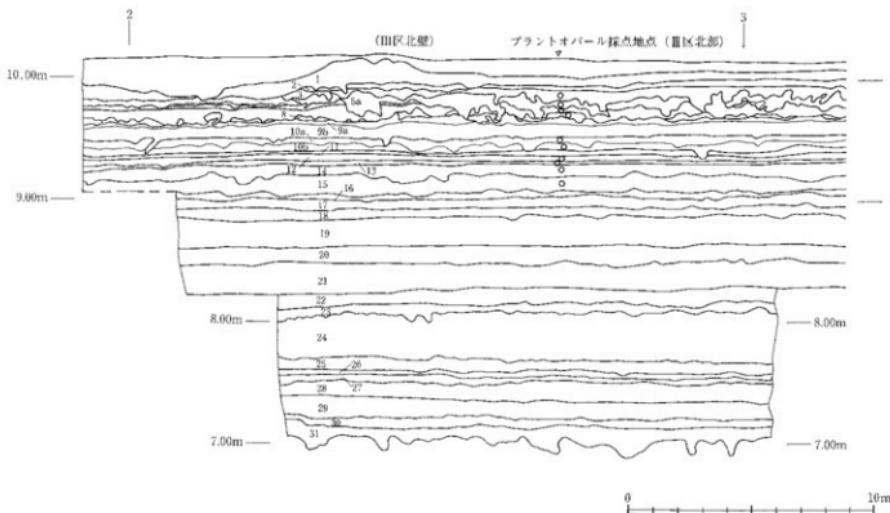
第7図 I・II区基本層序

99次I・II区註記

順序	土色	土性	粒性	しまり	層厚 (cm)	備考
1a	灰黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	10~18 (Ⅲ区)	砂多量 ～Ⅱ区では削平が少し 黒色シルトや黄灰色砂質シルトのブロックを含む
1b	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	ややあり	あり	2~10
2	にじむ黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	ややあり	あり	6~20 小穂はないが、砂は多い (逝世の水田?)
3	黒色	10YR2/1	シルト質粘土	ややあり	あり	4~20 (Ⅲ区)
4	にじむ黄褐色	10YR6/4	砂	なし	なし	0~20
5a	にじむ黄褐色	10YR4/3	粘土	あり	あり	3~28 1・Ⅳ区では1層に砂層があり、層上面に火山灰ブロックを含む (水田)
5b	にじむ黄褐色	10YR5/3	粘土	あり	あり	0~22 1・Ⅳ区では1層に砂層を含む 砂多量、灰白色砂を含んでる
5c	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	あり	あり	2~3 四区の北部のみ分厚、植物遺体を含む
6	黒色	10YR1/7	泥炭質粘土	あり	なし	2~8 植物遺体を少含む
7a	オリーブ黒色	2.5Y3/3	粘土	あり	ややあり	5~30 腐化鉄・植物遺体を僅に含む (平安水田)
7b	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	あり	なし	0~26 1・Ⅳ区の分布 上部にじむ黄褐色土層がある 黑化鉄・植物遺体を少含む
8	褐色	10YR1/7/5	粘土	あり	なし	0~15 腐化鉄・植物遺体・化合物を少量含む (半良~平安? 水田)
9	黒色	10YR2/1/2	泥炭質粘土	あり	なし	0~15 植物遺体を多量に含む 1・Ⅳ区に灰黒褐色灰斑 (10YR4/2) が見られる。
10a	褐色	2.5Y4/2	粘土	強い	なし	6~12 植物遺体を少含む
10b	黒褐色	2.5Y6/2	泥炭質粘土	強い	なし	0~12 且層 植物遺体を含む
11	黒色	10YR1/7/3	泥炭質粘土	あり	なし	0~11 植物遺体を含む
12a	黒色	10YR2/4	粘土	あり	なし	2~14 植物遺体を含む 鮎生木水田
12b	黒褐色	2.5Y5/1	粘土	あり	なし	0~6 1・Ⅳ区のみ分厚 植物遺体を含む
13	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	あり	なし	0~12 黄褐色の土 (10YR5/7) 層を挟む
14	黒色	2.5Y3/1	粘土	あり	なし	0~19 植物遺体を薄く 1・Ⅳ区北部には少ない 鮎生木水田
15	黒色	10YR2/1	泥炭	あり	なし	0~28 植物遺体を多量に含む 1・Ⅳ区では分厚い 黃土層を含む
16	黒色	10YR1/7/1	泥炭質粘土	あり	なし	0~28 1・Ⅳ区の場所に沿って分厚い 1・Ⅳ区では更に4層に細分が可能で、北端では砂が積じら
17	黒褐色	10YR2/2	粘土	あり	なし	6~30 シを含む 1・Ⅳ区北部では特に多い
18	オリーブ黒色	2.5Y4/4	砂	なし	なし	18~34 上層は腐葉質で変化が多い、北端部では粘土層を挟む
19	灰黒褐色	2.5Y4/2	粘土	あり	なし	27~39 万層 植物遺体を含む
20	黒色	10YR1/7/3	粘土	あり	なし	10~17 上層に多くの植物遺体を含む 3層に細分ができるところもある
21a	灰黒褐色	10YR4/2	粘土	強い	なし	12~19 万層 植物遺体を含む 腐葉が不明瞭
21b	灰黒褐色	2.5Y3/1	粘土	強い	なし	24~30 且層 植物遺体を含む 層上面で古墳試掘 (埋柵) を検出
22	黒色	10YR1/7/1	粘土	あり	なし	8~18 植物遺体を含む
23	灰黒褐色	2.5Y5/2	粘土	あり	なし	8~22 万層 植物遺体を含む
24	黒色	2.5Y2/1	粘土	あり	なし	0~10 植物遺体を含む
25	暗灰黒色	2.5Y2/1	砂質	ややあり	ややあり	21~34 植物遺体・粘土を含む 上部は土壤化して無い (2.5Y2/1)
26	黒色	2.5Y2/1	粘土	あり	ややあり	6~12 植物遺体少量
27	黒色	10YR1/7/8	粘土	あり	ややあり	5~13 植物遺体少量
28	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	あり	ややあり	4~14 火成岩 (?) ブロックを含む 上面で樹根跡検出
29	オリーブ黒色	5Y6/3	粘土	あり	ややあり	約200mm後 砂を含む 上面で樹根跡検出
30	にじむ黄褐色	10YR5/3	粘土	あり	ややあり	約200mm後 砂が多量で、色調は透綠色である (確認のみ)
31	色片になし	粘土	あり	あり	39~60 (透緑のみ)	色片になし、色調は透綠色である (確認のみ)
32	崩れ風	7.5Y6V8/1	粘土	あり	かたい	6~9 (透緑のみ)
33	色片になし	シルト質粘土	ややあり	かたい	75~80 (透緑のみ)	非常にかたく、砂層を挟在し、色調は透綠色である (確認のみ)
34	崩れなし	10YR2/1	泥炭質粘土	あり	あり	3~6 (透緑のみ)
35	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	あり	ややあり	4~7 斧削器・針葉樹の葉を多く含む、結果や枝などは含まれない (確認のみ)
36	にじむ黄褐色	10YB6/3	粘土	あり	あり	13~24 利用器・葉を多く含む (確認のみ)
37	明瞭灰褐色	9G2/1	砂質	なし	なし	1632上 計画的の葉を少し含む (確認のみ)

99次III区註記

順序	土色	土性	粒性	しまり	層厚 (cm)	備考
1a	灰黒褐色	10YR4/2	砂質シルト	ややあり	あり	10~18 (Ⅲ区)
1b	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	ややあり	あり	2~10
2	にじむ黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	ややあり	あり	6~20 小穂はないが、砂は多い (逝世の水田?)
3	黒色	10YR2/1	シルト質粘土	ややあん	あり	4~20 (Ⅲ区)
4	にじむ黄褐色	10YR6/4	砂	なし	なし	0~31 斧削器・砂質・粗砂をラミナ状に堆積する 下部に粘土層があり、火山灰ブロックを含む
5a	にじむ黄褐色	10YR4/3	粘土	あり	あり	3~28 1・Ⅳ区では1層に砂層があり、層上面に火山灰ブロックを含む (水田)
5b	にじむ黄褐色	10YR5/3	粘土	あり	あり	0~22 1・Ⅳ区では1層に砂層を含む 粘化鉄、底内色を含んでいる
5c	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	あり	あり	2~3 四区の北部のみ分厚、植物遺体を含む
6	黒色	10YR1/7/1	泥炭質粘土	あり	なし	2~8 植物遺体を少含む
7a	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	あり	ややあり	5~30 砂少量、植物遺体を僅に含む (平安水田)
7b	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	あり	なし	0~16 1・Ⅳ区のみ分厚 上部にじむ黄褐色粘土層がある 黑化鉄・植物遺体を少含む
8	黒色	10YR1/7/1	粘土	あり	なし	0~15 砂少量、植物遺体を含む (平安水田)
9a	黒褐色	5Y6V2/2	泥炭質粘土	ややあり	ややあり	1~8 植物遺体を多量に含む
9b	黒色	7.5Y8V3/1	泥炭質粘土	あり	ややあり	8~17 植物遺体を多量に含む
10	黒色	10YR1/7/3	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2~6 植物遺体を少し量に含む
11	黒色	10YR1/7/3	泥炭質粘土	つよい	ややあり	3~10 植物遺体を多量に含む (赤田)
12	黒色	2.5Y3/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2~7 植物遺体を多量に含む
13	オリーブ黒色	5Y3/2	泥炭質粘土	つよい	あり	4~16 植物遺体を多量に含む (赤田)
14	黒色	10YR1/7/1	泥炭質粘土	つよい	あり	4~23 植物遺体を多量に含む (赤田)
15	黒色	7.5YR1/7/1	泥炭	あり	赤田の水田	砂少量
16	黒色	10YR2/1/2	泥炭質粘土	あり	ややあり	2~9 植物遺体を含む
17	オリーブ黒色	7.5Y3/2/2	粘土	あり	ややあり	5~26 破けたところもある
18	黒色	10YR1/7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	5~15 植物遺体を含む
19	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土	つよい	ややあり	21~27 色調ははながったが、開いた五臓である
20	黒色	10YR1/7/1	泥炭質粘土	つよい	あり	11~17 植物遺体多量



第8図 III区北壁基本層序・土層注記

99次III区註記

順序	土 色	土 性	新 性	しまり	幅 厚 (cm)	備 考
21	オリーブ色	7.GY3/1	粘土	つよい	ややあり	18~27 海辺に亘っており、植物遺体を特に多く含む層がある
22	黒色	10YR1L7/1	泥炭質粘土	つよい	あり	7~16 繊維を含む 植物遺体を多量に含む
23	当色	5Y2/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2~14 繊維を含む 植物遺体を多量に含む
24	灰オリーブ色	7.GY4/2	砂質シルト	あり	あり	39~46 薄い瓦膜 黒化物を含む 植物遺体を多量に含む
25	暗オリーブ色	5Y4/3	粘土	つよい	あり	8~16 薄い瓦膜 植物遺体を多量に含む
26	黒色	10YR1L7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2~6 植物遺体を含む
27	黒色	7.5YR1L7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2~9 植物遺体を含む
28	オリーブ色	5Y3/2	粘土	あり	ややあり	9~21 植物遺体を含む
29	黒色	7.5YR1L7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	10~20 植物遺体を含む
30	黒色	10YR1L7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	3~11 層ごとに砂層を含む 植物遺体を含む
31	黒色	2.SY2/3	シルト質粘土	あり	ややあり	6~25 上面に火山ブロックを乗せる 繊維を含む 國文土蔵を出主 植物遺体を含む
32	暗オリーブ色	2.GYV3/3	粘土質シルト	つよい	あり	26~35 植物遺体・炭化物を含む 上面で樹根と思われるビットを多数検出
33	暗緑灰色	7.GYV4/4	粘土質シルト	つよい	あり	45~63 植物遺体を含む 繊維をブロック状に含む
34	オリーブ黒色	7.5Y3/3	粘土質シルト	つよい	あり	1~7 上部は黒色である 細胞繩の裏を含む
35	暗オリーブ灰色	2.GYV4/4	粘土質シルト	あり	あり	12~23 植物遺体・炭化物を多く含む 石炭出土
36	暗オリーブ灰色	2.GYV4/3	細砂	なし	あり	34~76 層下部には粗粒沙に変わる 植物遺体・無化物を含む
37	オリーブ灰色	10Y4/2	シルト質粘土	つよい	あり	0~6 針葉樹の葉・枝を含む 部分的に分布
38	暗灰色	7.GYV3/3	シルト	つよい	ややあり	12~45 大木・橋子を含む 粘土層と砂層が僅い斑調となる
39	緑灰色	5G6/3	シルト質粘土	つよい	あり	12~24 砂層との混在 粘土層は粗粒となる
40	緑灰色	10G6/3	粘土	つよい	つよい	55~73 砂層・プロックを用いた合む
41	オリーブ灰色	2.GYV5/1	粘土	つよい	あり	223cm以下に植物あり

ものと考えられるが、各区の対応関係や地形的な特徴は明確ではない。

5. 検出された遺構と遺物

第99次調査では、水田層7枚・溝跡14条・縄文時代の遺物包含層1枚・旧石器時代の遺物包含層1枚を検出した。なお、水田跡については精査できたものの以外に、調査区の壁面にて認定あるいは予想したものがある。以下では、層位別に報告したい。

(1) 2層の遺構と遺物

2層水田跡

調査時には耕作土がすでに削平されており、平面的な精査を行うことができなかった。I・II区の壁面で、耕作土や畦を確認した。特にI区西壁セクションでは大畦（農道？）や杭を打ち込んだ溝の一部が確認され（第3図）、歴史的環境のなかで述べた「八幡前」と「鳥居原」との字境とみられる。

2層にはいぶい黄褐色砂質シルトで、III区では確認できない。水田区画などの特徴は不明だが、大畦断面はラミナ状の層相が特徴で耕作土とは色調がやや異なっており、客土による造成のように思われる。田面の標高は、区北部で11~11.2m、I区南部やII区では上部を削平されているが、それぞれ10.6~10.7m・10.4~10.5m付近に位置し、比高差はかなり大きかったようである。

遺物は磁器片が出土しているが図示できるものではない。

(2) 3層の遺構と遺物

3層水田跡（第9図）

3層は黒色シルト質粘土であるが、この水田跡はI・II区では削平されて存在しない。僅かに、I区西壁やII区東壁で土層を確認できるのみである。一方、III区では比較的残りが良く、畦畔5条・水田区画4区画を検出した。ただし、1層水田跡（現代）の耕作深度が深いことから耕作土が失われ、5a層が露出している部分もある。畦畔は南北方向がN~10~20°-E、東西方向はN~70~80°-Wに集中傾向がある。真北基準にはなっていないようである。区画面積は、全体を予想できる区画3で約31m²であるが、これが平均的なものか不明である。水田標高は、I区北部で11.1~11.2m、II区10.5m、III区（南半部）約9.8mであり、1m以上の比高差がある。畦幅は下端幅で1mを越すものが多く、最大で2.14mである。畦高は最大12cmである。擬似珪畔や水口は検出されていない。下面の起伏は認められ、特にIII区で著しい。

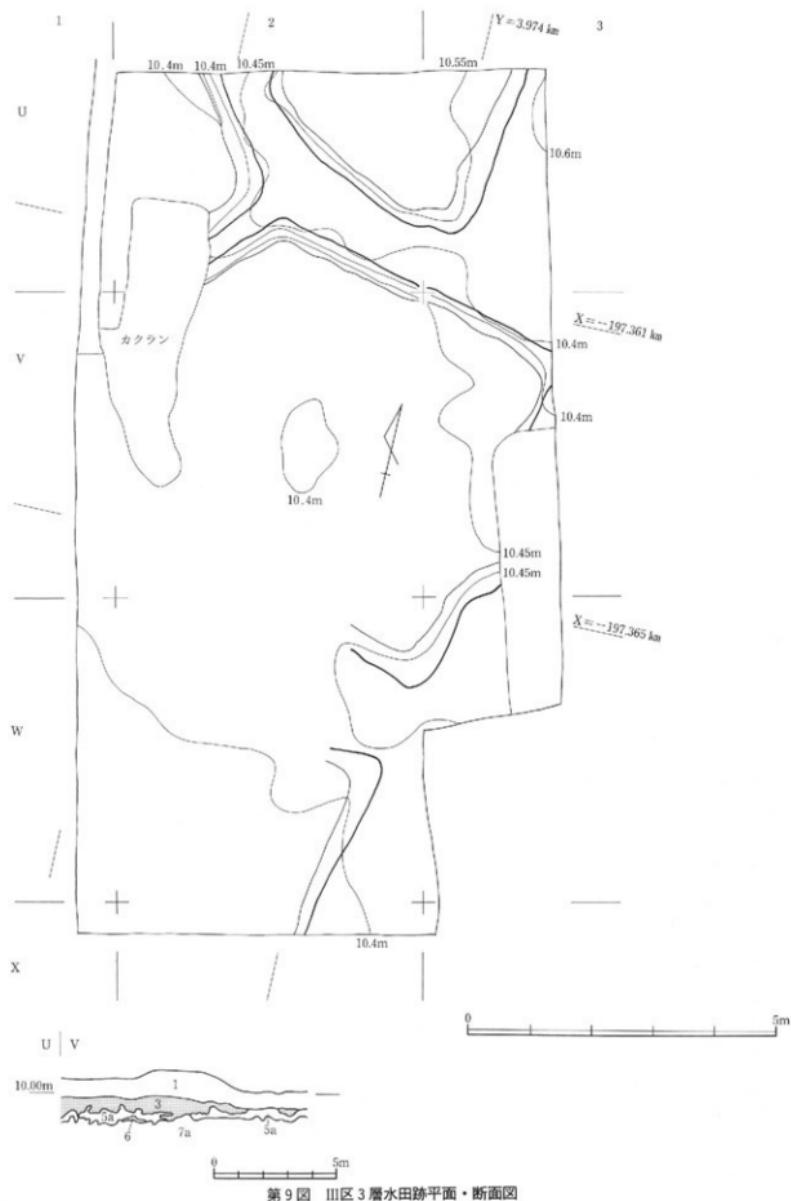
出土遺物は、III区で土師器・赤焼き土器・須恵器片各1点ずつ出土しているが、図示できるものではない。

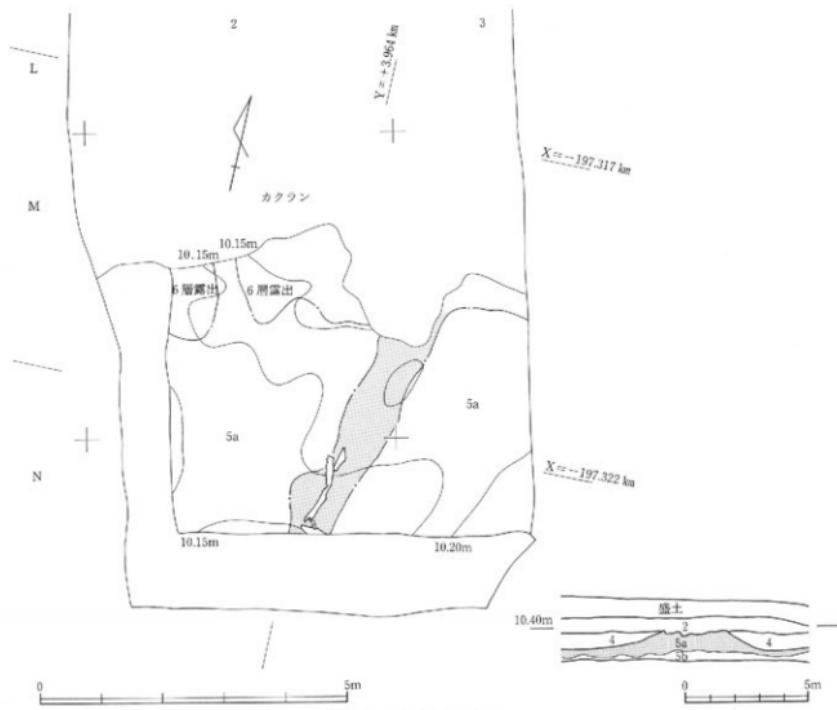
(3) 5a層の遺構と遺物

5a層水田跡（第10図）

5a層は、いぶい黄褐色の粘土層で、調査区の全域に分布している。水田跡が確認できたのはIII区だけである。I区では層の上面に灰白色火山灰を乗せ、層下面には砂層を含んでいる。II区では火山灰の存在は確認できなかった。III区では、層中に灰白色火山灰を含んでいる。

層の遺存状況は悪く、4層を除去した段階ですでに5b層・6層が露出する箇所が多い。その結果、面的に確認できたのはIII区のみであるが、確認できたは段差のみである。これは、上部の3層水田による耕作が深く及んでいた結果と考えられる。段差の方向は、東西方向である。III区5a層上面の標高は10.4mである。層が遺存するところでの下面の起伏は、あまり大きくはない。





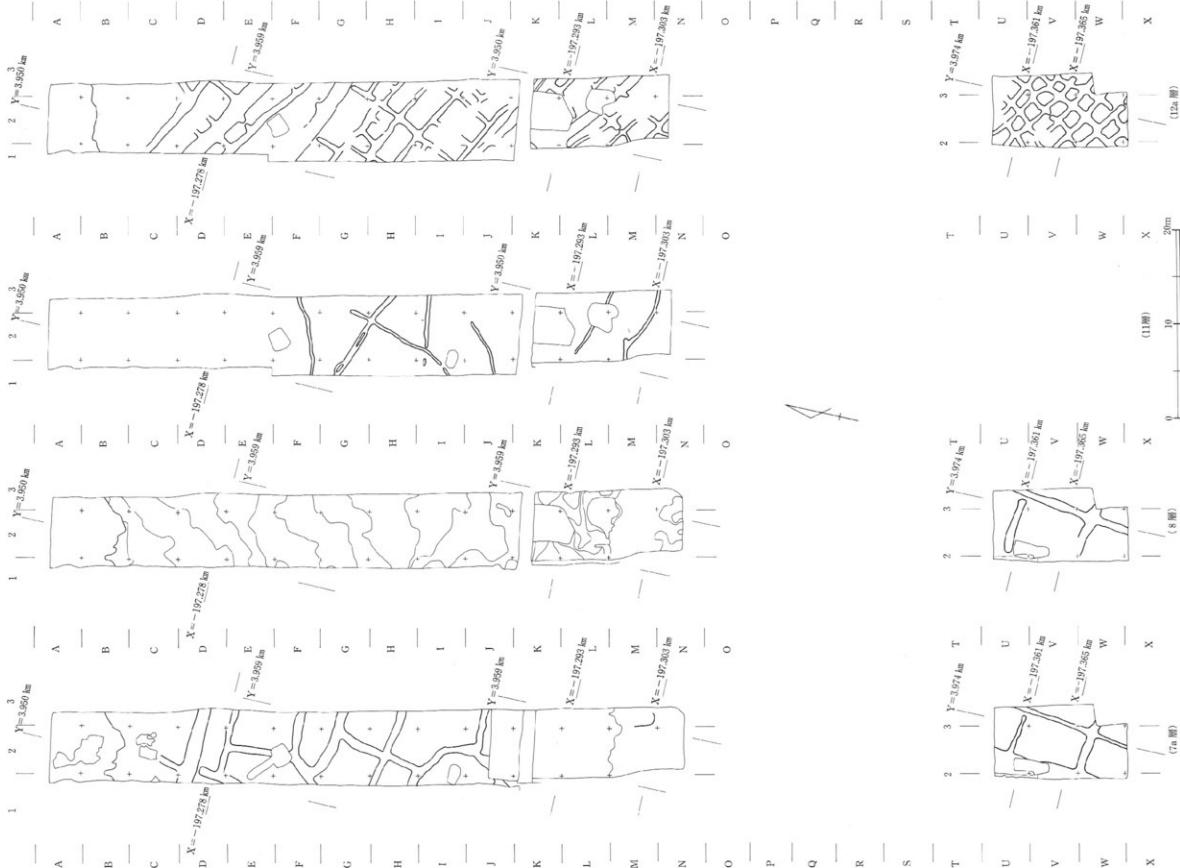
第10図 II区 5a層水田跡

遺物はIII区北半で打ち込み杭が四本確認できたのみであるが、打ち込み層位がはっきりしないのでこの水田跡に伴うものであるかは断定できない。

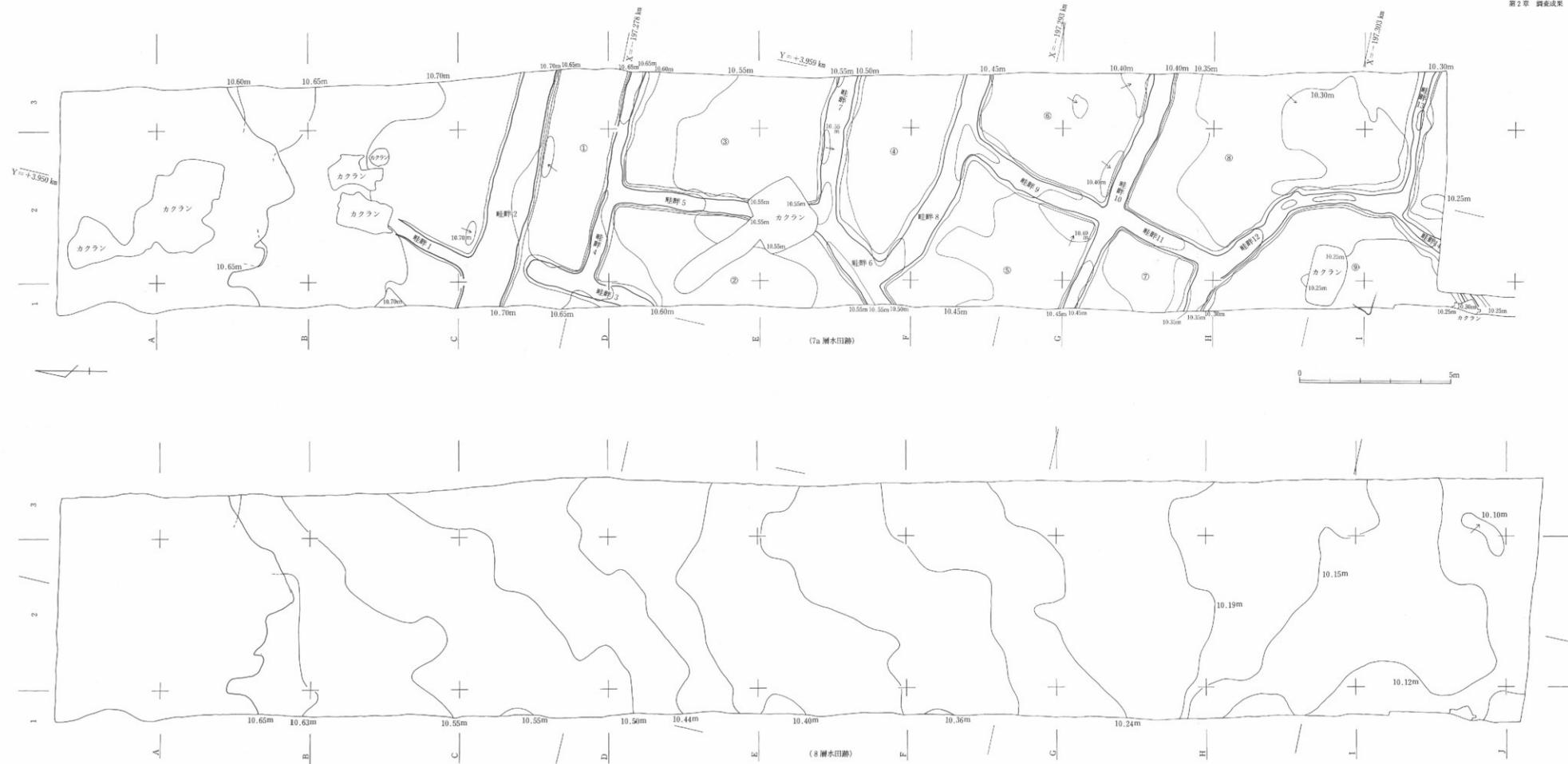
(4) 7a層の遺構と遺物

7a層水田跡（第11・12・13・14回）

7a層は、オリーブ黒色の粘土層で、調査区の全域に分布している。しかし、I区北端部では削平されすでに下層の砂疊層が露出しているところもある。水田区画はI区とIII区で検出し、II区では畦畔は検出できなかった（性格不明の土手状の高まりを検出している）。この水田跡では、畦畔20条（I区14条・III区6条）、水田区画14区画（I区9区画・III区5区画）を検出した。畦畔の方向は、I区では南北方向N-10°～20°-E、N-10°～20°-Wに集中が見られた。しかし東西方向では、ばらつきが多く規格性が見受けられない。III区では南北方向N-6°～8°-E、東西方向N-79°～82°-Wに集中が見られ、下層の畦畔方向を踏襲している。しかし、北半部では遺存状況が悪くなり段差はほとんど確認できなくなっているところもある。区画面積はすべてを検出したIII区区画2で28.9m²を測る。III区は長方形を基調とした整った区画であるのに対して、I区ではすべてを検出した区画もなく、また、検出できた区画では畦畔が湾曲したりと区画に規格性が認められない。標高はI区が10.6m～10.25m、II区

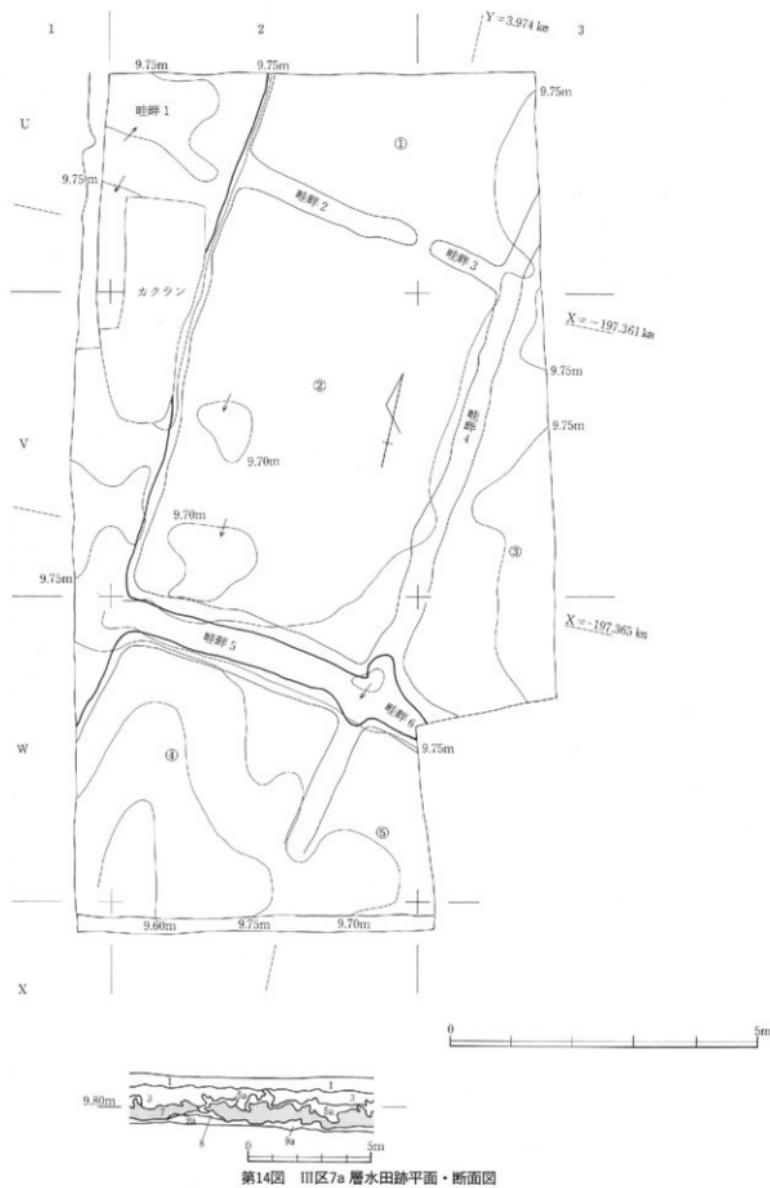


第11图 7a·8·11·12a层全剖面



第12図 I区7a・8層水田跡平面図

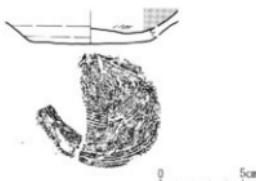




第14図 III区7a 層水田跡平面・断面図

が $10.2\text{m} \sim 9.9\text{m}$ 、III区が $9.8\text{m} \sim 9.7\text{m}$ であり、ほぼ北から南に（I区では畦畔毎に細かな傾斜が見られる）傾斜しており、I区北端とIII区南端とでは約1mの比高差が認められる。これは地形的な影響のようでI区に大きな傾斜の変換点が存在し、I区畦畔2を境として水田面は約10cmの比高差を持っている。他には畦畔6、7、8などが同様の傾向を示している。また、傾斜の方向に沿うような形で湾曲する畦畔12などがあり、このようにI区では、傾斜に合わせて畦畔をつくることによって比高差を是正している。このことはこれより下層の水田跡でも同様の傾向が伺える。畦畔の規模に関しては、前述したように傾斜の変換点となるI区の畦畔2、6、7、8では下端幅平均126cm、上端幅平均101cmと大きく、ほかは下端幅の平均が98cm、上端幅が56cmである。畦畔の接続は「+」状、あるいは「T」字状である。III区で擬似畦畔Bを検出した。I・III区で水口を1箇所ずつ確認した（I区畦畔2・3、III区畦畔2・3）。この水田耕作土の母材層は7b層、8層であり、下面の乱れは著しい。

出土遺物は、内部黒色処理のロクロ成形土師器（第15図）、弥生土器片等である。図示したもの以外は細片である。



既版番号	種類	遺構・部位	外表面	内表面	現存	備考	写真回数	登録番号
15	土師器	7a層	ロクロナマ 底：静止系切無鉢	ミガキ 黒色処理	底部～体部		8-12	D-1

第15図 7a層水田跡出土遺物

(5) 8層の遺構と遺物

8層水田跡（第11・16・17図）

8層は黒色の粘土層で、調査区の全域に分布している。水田区画はIII区で検出し、他の調査区では耕作土のみの検出である。この水田跡では畦畔6条、水田区画5区画を検出した。畦畔の方向は、南北方向N-8°-E、東西方向N-79°~85°-Wで直行している。これらの畦畔は、上層の7a層水田跡とほぼ同じ方向である。区画面積はすべてを検出した区画がないが、ほぼ3辺を検出した区画2から推察すると約40m²以上と考えられる。標高は、I区で10.4m~10.05m、II区で10m~9.9m、III区で9.7m~9.6mである。比高差は、I区が40cm前後あるのに対してII・III区では10cm前後と小さい。III区での水田標高の変化は、北東から南西への動きが窺える。畦畔の交点は「+」状である。畦畔1・2、2・3の間に水口が存在する。この水田の母材となる層は9層で、下面の乱れは著しい。

出土遺物は、土師器、弥生土器片であるがいずれも細片であり、図示できるものはない。

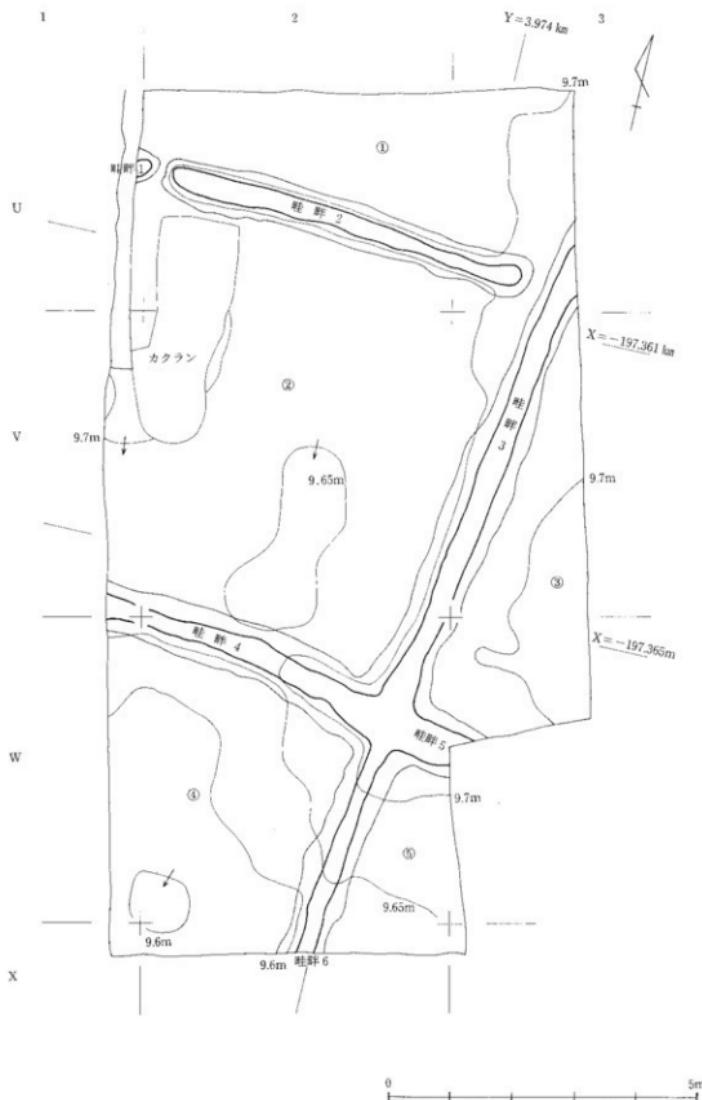
(6) 10a層の特徴

10a層は暗灰黄色粘土層で、調査区の全域で確認されているが、I区北端部では残りが悪い。この層の上面では畦畔が確認できなかったものの、かなりこわれているように見受けられた。また、擬似畦畔は確認できなかったが、下面に起伏が認められ、特に南側のIII区で顕著であった。過去の調査では、近接する第7次調査（地下鉄長町南I区）の5層に類似する（1986：篠原・吉岡）。また、富沢遺跡北部A地区基本層序（1991：佐藤甲）の9a層と類似するようである。水田耕作土の可能性を指摘しておきたい。

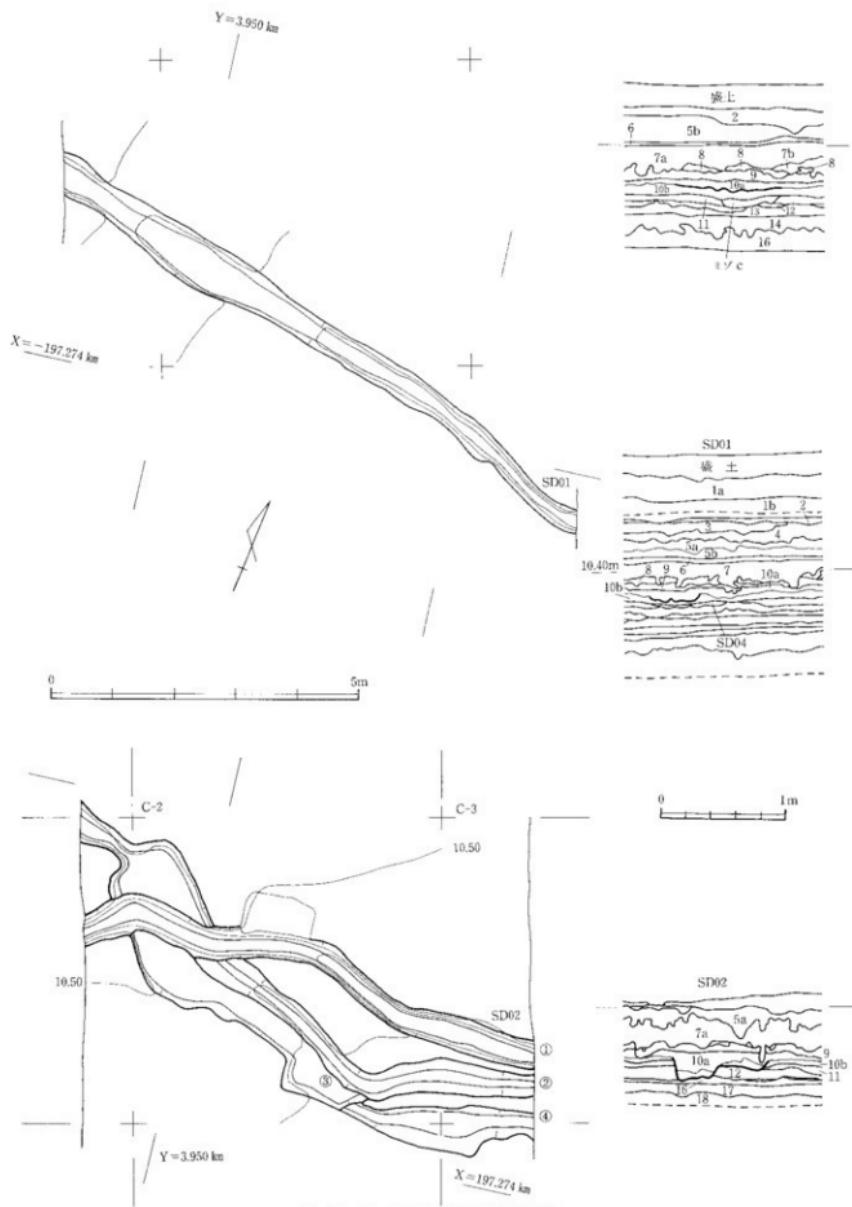
出土遺物は、弥生土器の細片と石器が各1点出土している（第36図）。これらの遺物では、時期決定が難しい。



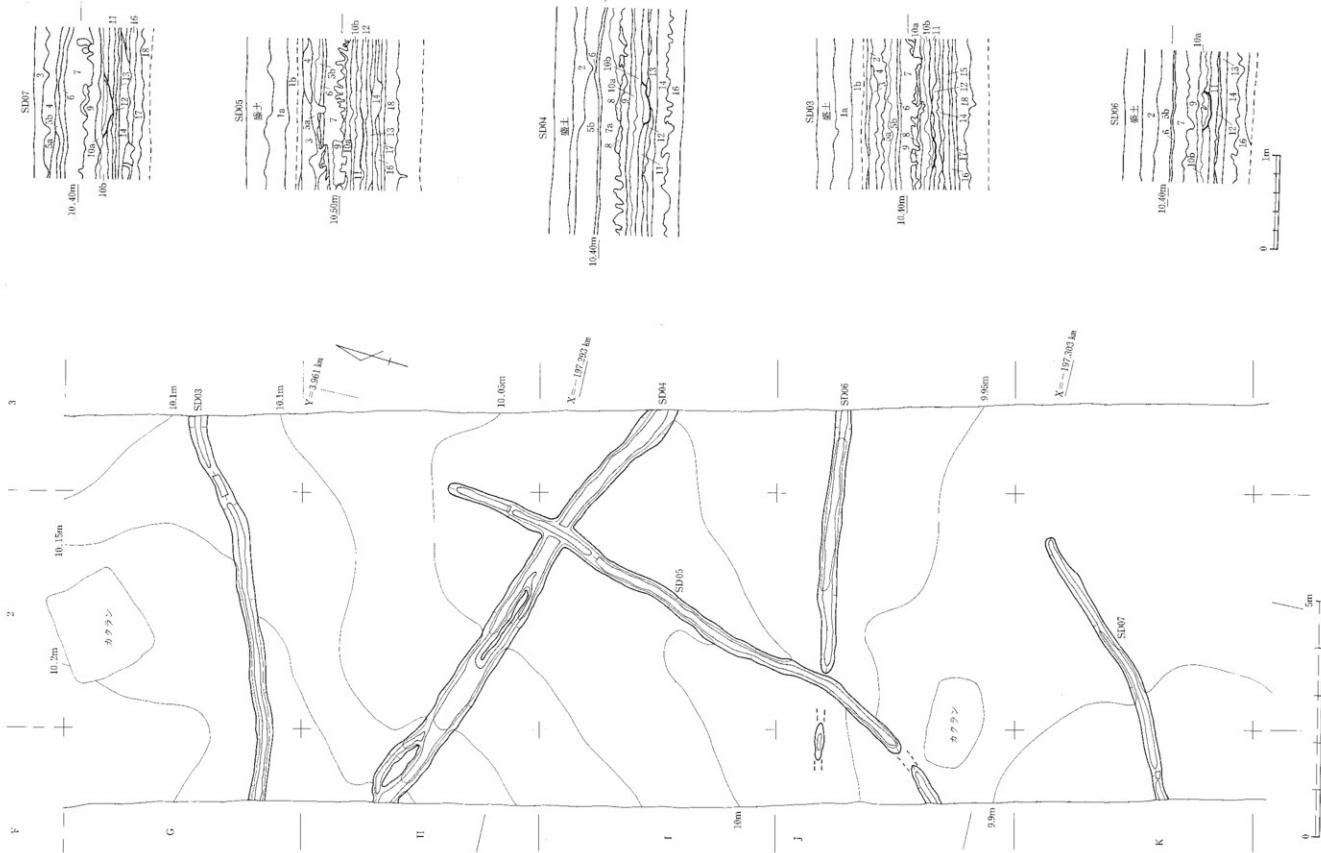
第16図 II区 8層平面・断面図



第17図 III区 8層水田跡平面図



第18図 I区 SD01・02 平面・断面図



第19図 11層上面港湾平面・断面図

(7) 10b層の遺構と遺物

10b層上面で、溝跡2条を検出した。いずれもI区である。(第18図)

SD01

I区中央部(G・H区)に位置し、10b層上面で検出した。下層のSD04と重複し、これを踏襲しているようである。規模は検出長約10.08m、幅0.18m、深さ8cmで、方向はN-69°-Wで直線的に走行する。埋土は10a層が堆積しているが、部分的に9層が堆積しているところもある。遺物は出土していない。

SD02

I区北部(C区)に位置し、10b層上面で検出した。遺構確認当初は一条の溝のように考えられたが、結果は4条の溝跡に細分された。新しい溝から古い溝にa～dを付して、以下述べることにする。aの規模は検出長約8.08m、幅0.6m、深さ20cmで、方向は約N-83°-Wであるが、西端部は南へ屈折している。bは検出長約7.28m、幅0.6m、深さ8cmで、方向はN-63°-W～N-82°-Eである。cは検出長約6.72m、幅0.28～1.32m、深さ6cmで、方向はN-56.5°-Wである。dは検出長約3.6m、幅0.84m、深さ5cmで、方向はN-79.5°-Eである。いずれの溝も不規則であり、埋土はaが砂、bが砂混じり粘土、c・dは粘土である。

遺物は、繩文(地文)のみの弥生土器6点が出土し、内訳はa2点・b1点・c3点である。いずれも小片で表面が摩耗し、地文も不明瞭である。図示したのは2点である(第25図)。

これらの溝跡は、自然流路か人工的なものか判断に難しいが、前者を示唆しておきたい。また、d→c→b→aと変遷し、新しくなる。

(8) 11層の遺構と遺物

11層上面で、溝跡7条が検出され、内訳はI区5条・II区2条である。(第19・20図)

SD03

I区中央部(F区)に位置し、11層上面で検出した。規模は検出長約8.28m、幅0.39m、深さ7cmで、方向はおよそN-69°-Eで、ゆるく屈曲している。埋土は10b層に類似する粘土で、2層に細分できるところもある。遺物は出土していない。

SD04

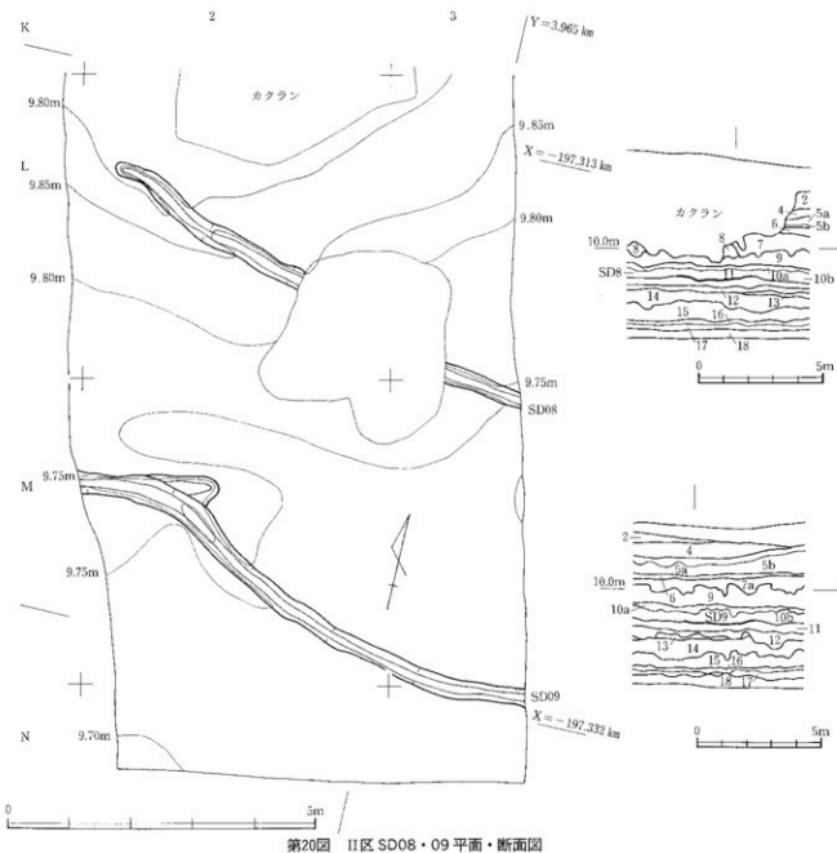
I区中央部(G・H区)に位置し、11上面で検出した。SD01(10b層)・SD05と重複している。このうち、SD05とはほぼ同時期のものであろう。また、下層の12層水田跡の畦17とほぼ同じ位置にあり、何か関連があるかもしれない。規模は検出長10.18m、幅0.69m、深さ10cmで、方向はN-67.5°-Wで直線的である。溝内部では、部分的に2条に分離するところがある。遺物は出土していない。

SD05

I区中央部(G～I区)に位置し、11層上面で検出した。SD04・06と重複する。SD04とはほぼ同時期と考えられるが、SD06との関係は不明である。規模は検出長約12.4m、幅0.39m、深さ7cmで、方向はN-16.5°-39°-Eで南部で屈曲する。埋土は、10b層と類似する灰黄色粘土である。SD04と交差する部分は深くなっている。この溝は、下層の12層水田跡畦25とほぼ同じ位置にあり、前述したSD04と同じ状況である。遺物は出土していない。

SD06

I区南部(I区)に位置し、11層上面で検出した。SD05と重複するが、新旧不明である。規模は検出長約7.42m、幅0.41m、深さ6cmで、方向はN-82°-Eで直線的である。西側は残存状況が悪い。遺物は出土していない。



第20図 II区 SD08・09 平面・断面図

SD07

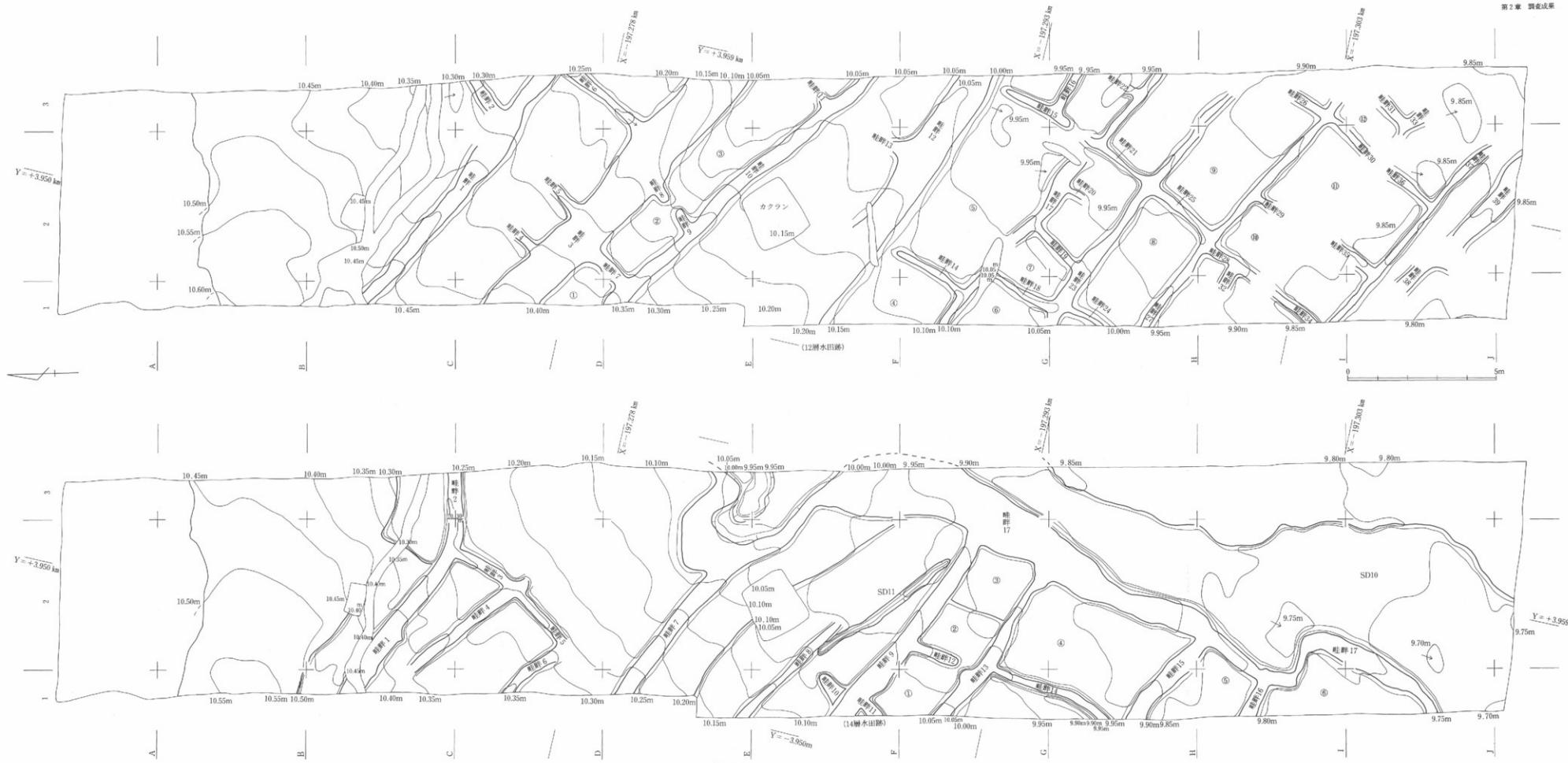
I区南部（J区）に位置し、11層上面で検出した。規模は検出長約6.86m、幅0.26m、深さ3cmで、方向はおよそN-54°-Eで中央部が屈曲する。埋土は10b層である。遺物は出土していない。

SD08

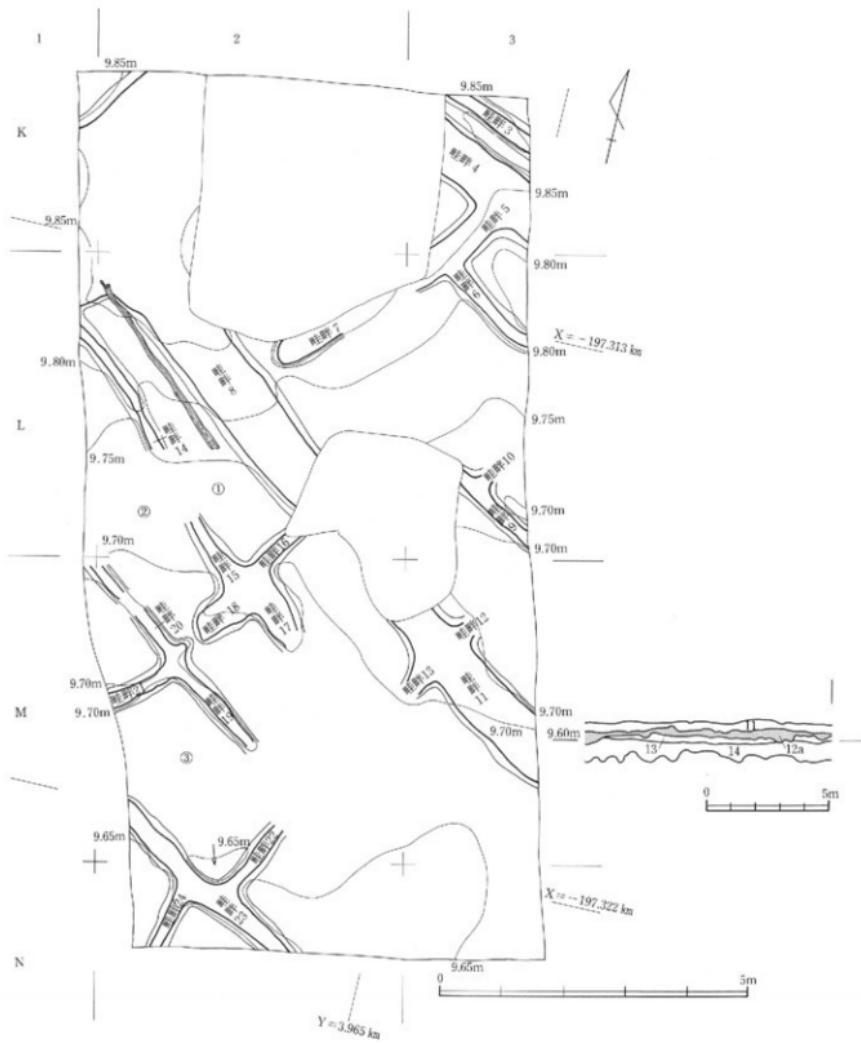
II区北半部（L区）に位置し、11層上面で検出した。撓乱杭により一部消失している。規模は検出長7.58m、幅0.27m、深さ4cmで、方向はN-72°-Wで直線的である。埋土は10b層である。遺物は出土していない。

SD09

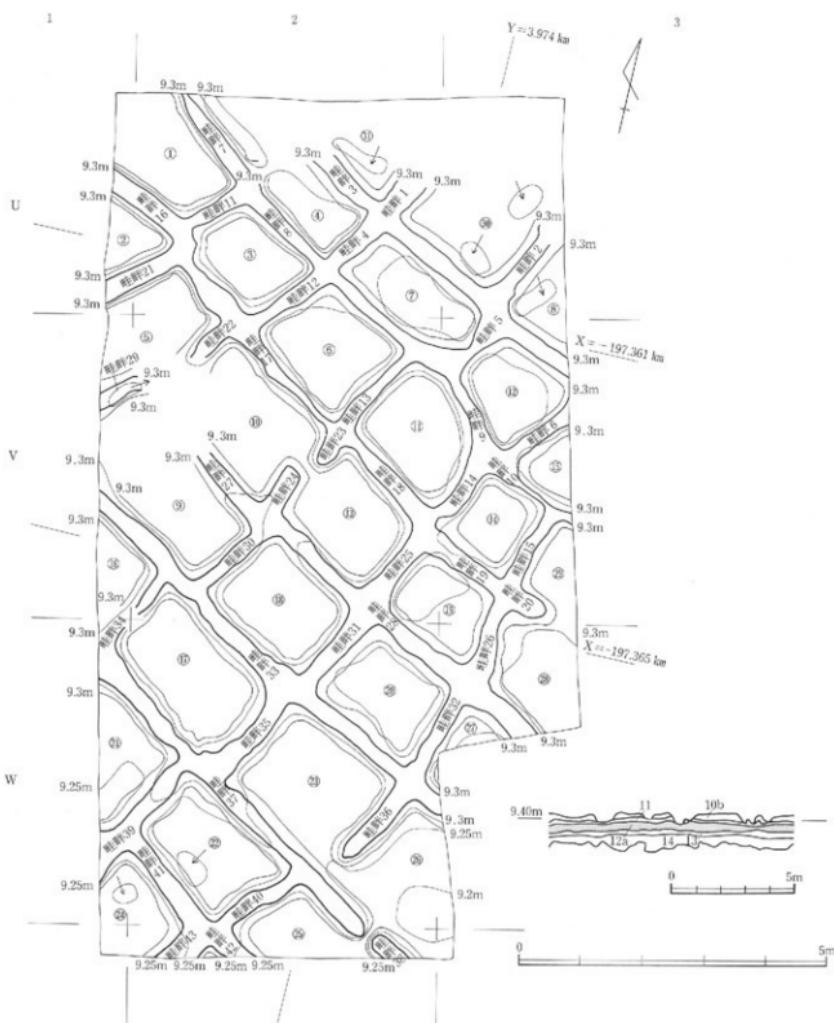
II区南半部（M区）に位置し、11層上面で検出した。規模は検出長約8.22m、幅0.42m、深さ6cm、方向はおよそN-80°-E～N-69.5°-Wへ屈曲する。屈曲部は東へ張り出しを持ち、あるいは東へ溝が分岐していたものかもしれない。埋土は10b層である。遺物は出土していない。



第21図 I区12・14層水田耕平図



第22図 II区12層水田跡平面・断面図



第23図 III区12層水田跡平面・断面図

(9) 12a層の遺構と遺物

12a層水田跡（第21・22・23図）

12a層は黒色の粘土から泥炭質粘土層で、全域に分布している。水田区画も調査区のほぼ全域で検出したが、I区北端部で検出できなくなる。畦畔105条（I区39条、II区23条、III区43条）、推定できる区画79区画（I区32区画、II区16区画、III区31区画）を検出した。畦の方向はI区が南北N-15°～30°-E、東西N-50°～60°-W、II区が南北N-25°～40°-E、東西N-45°～65°-W、III区が南北N-20°～50°-E、東西N-48°～65°-Wにそれぞれ集中傾向が認められる。区画面積は、最小区画単位がよくわかるIII区で平均約1.7m²である。I・II区ではこの2～3倍の区画面積を示すものが多い。水田標高はI区北部で10.3～10.4m、III区で9.3～9.4mで1mの比高差がある。I区中央部とI・II区の境には大畦畔〔I区畦畔3・12と畦畔39（I区）・4（II区）、III区畦畔8・11〕があり、2条一組で比高差を是正し、水平面を確保しているようである。また、I区南端の畦畔37と38・39の間、II区北東部の畦畔3の両側は溝になる可能性があるかもしれない。さらに、II区北西部の畦畔4と8の間には、幅広で畦条の非耕作域が見られる。擬似畦畔は確認できなかったが、下面の起伏は認められた。水口はI区畦畔12の南辺などで検出した。この水田耕作土の母材層は、I区12b・13層、II～III区では13層である。

出土遺物はI区より出土した弥生土器片85点があり、その大部分は北部畦畔1脇より一括で出土した（第24・25図）。おそらく、妻1個体分と予想されるが、細片であり摩耗し接合できない。しかも、口縁部や底部の破片は含まれていない。調整は、前述したように摩減が著しく観察が困難であり、特に内面は一部ヨコナデが確認できるところもあるが、ほとんど判然としない。外面は地文（縄文LR）を施してあるが、沈線等は認められない。頸部にヨコナデが認められる。

(10) 13層出土の遺物について（第26図）

13層出土の植物巻き石製品（第26図5）

この遺物が出土したII区13層は、12a層水田と14層水田の間層を成す自然堆積層で、12a層水田跡の母材層である。出土状況は層中に少し刺さった状態で出土している。これに続く矢柄等は確認できなかった。頁岩製で、最大長は4.8cm、最大幅は1.1cm、厚さは6mmを計る。先端の尖った部分より幅約2mmの植物状のものを巻き初め、鐵身の根元まで巻き、最後の部分を折り返し中を通して巻き終えている（植物は未同定）。更に、茎部のくびれた部分だけにまた植物を巻きつけている。この部分は鐵身の部分と違い若干緩めである。X線写真撮影によると全面に剥離痕が認められるものである。しかし、茎部のくびれや茎部端の形状・全体長など樹形匣式期の石鐵の形態とは違いを認められる点もあり、石鐵としていいものか疑問が残る。今後は民俗例など広く情報を集め、また、植物の同定・保存処理・分析などをとおして類例を探していくたい。

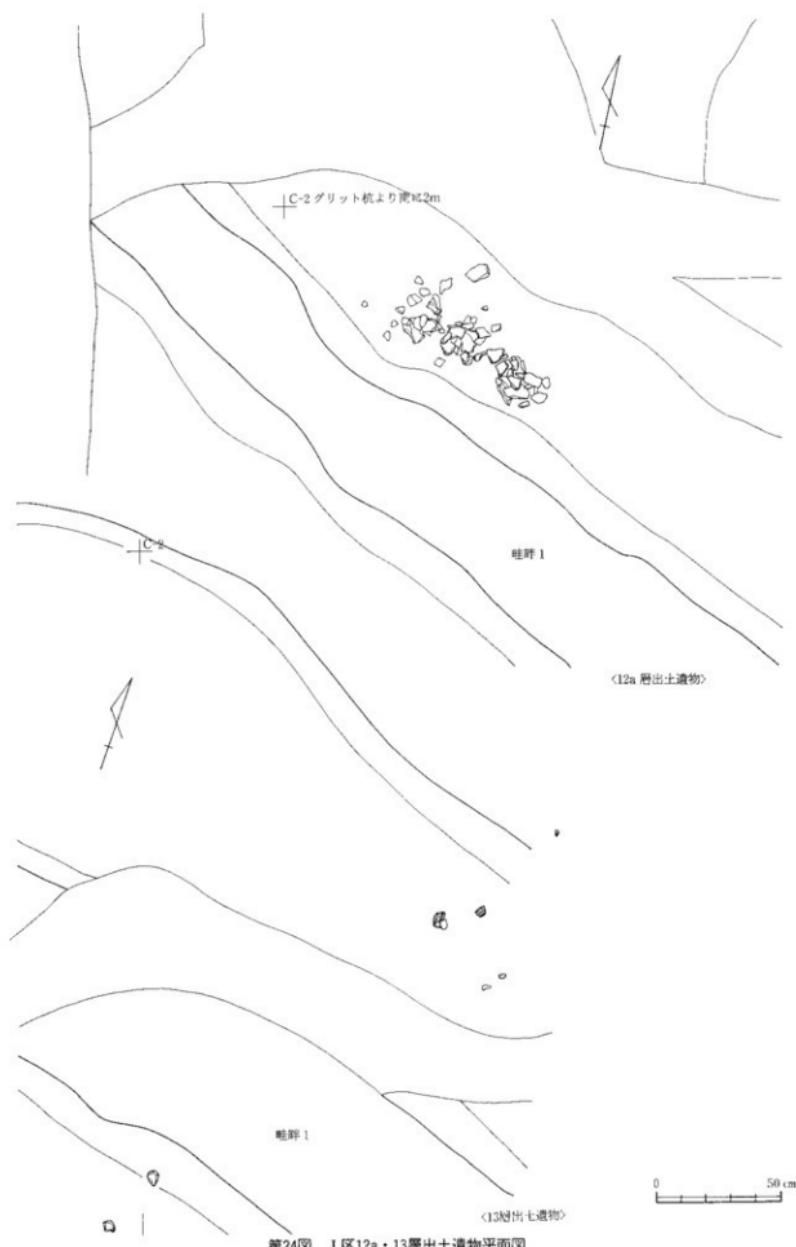
13層からはこの他に、弥生土器片が9点出土している。そのうち図2は鉢の口縁部で外面に幅2mmの沈線で区画したのちに縄文LRを充填する手法で施文されている。内面にも1条の沈線がある。図3は、幅2mmの平行沈線を引くもので、胎土中に白色細砂を多く含んでいる。図4は、図2と類似するような手法が取られている。

(11) 14層の遺構と遺物

14層ではI・III区で水田区画、溝跡3条（I区・II区各1条、I区からII区にかけて1条）を検出した。

14層水田跡（第27・28図）

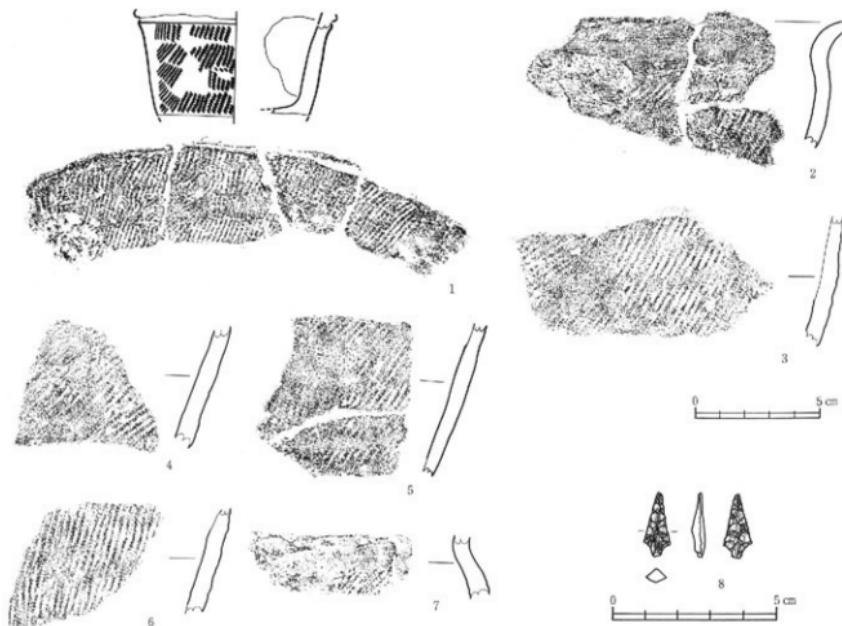
14層は黒色の粘土から泥炭質粘土で、調査区全域に分布しているが、水田区画はI区とII区で検出した。I区はSD10の西側で、III区は全域でそれぞれ検出したがII区では畦畔は検出できなかった。このII区とI区のSD10の東側は非耕作域となっている。この水田跡では、畦畔20条（I区17条・III区3条）、段差4ヶ所（I区3ヶ所・III区1ヶ所）



第24図 I区12a・13層出土遺物平面図

所)、水田区画18区画(すべてI区で、III区は不明)を検出した。畦畔の方向はI区で南北方向がN-10°-E前後とN-30°~40°-Eに分離化し、東西方向がN-50°~70°-Wの間で振れ幅が比較的大きい。III区でも、東西方向がN-50°~80°-Wの間で振れ幅が大きい。区画面積は、最小単位がI区の区画2・3と見られ3m²である。中規模のものは(I区区画4など)は14m²代前後である。水田標高はI区北部で約10.4m、III区南半部で約9.2mで、1.2mの高差がある。水口は、I区中央部で2ヶ所認められた。畦畔の検出されたI区北西側では層厚が薄く、下面の起伏は弱い。一方I・II区のSD10直下や東側の非耕作域及びIII区では層厚が厚く、下面の起伏も顕著である。I区の水田域では擬似珪畔Bは確認できなかったが、SD10直下で南北方向の擬似珪畔Bが検出され(第33図スクリントーン部分)、しかも東側(非耕作域)へ伸びている。ただし、西側へ伸びるものはない。この特徴により、I・II区のSD10下や非耕作域の14層下面の起伏は、耕作によるものもあることが理解できた。つまり、SD10の形成以前や非耕作域もかつては水田域であった。したがって、14層では新旧2時期の水田跡が存在したことになる。一方、III区の水田域は遺存状態が悪く、また、前述した新旧どちらの水田跡かは明確でない。

出土遺物は、弥生土器27点(I区26点・II区1点)、石器7点(I区6点・II区1点)、クルミ1点(III区)がある。I区の土器は畦畔1の畦上部で集中的に出土している(第29図)、いずれも地文(縞文)のみの破片である。畦



図版番号	種類	遺構・層位	外観	内観	性質	参考	写真回数	基盤番号			
25-1	鉢	11層、I区K3	底部欠損、体部: 刷文L.R.、1条の划痕、幅2~3cm、深さ1mm	ミガキ	底面-体部	白色細砂	7-1	B-2			
25-2	甕	12層、I区C2	白練: ヨコナゲ、体部: 縞文L.R.	ヨコナゲ+ミガキ(下部)	底面-体部	熱汚土	7-7	B-5			
25-3	甕	12層、I区C2	縞文L.R.	マツツ	体部	熱汚土	7-6	B-8			
25-4	甕	12層、I区C2	1ガキ、(マツツ多い)	刷文L.R.(一部マツツ)	体部	熱汚土	7-2	B-4			
25-5	甕	12層、I区C2	縞文L.R.	マツツ	体部	熱汚土	7-3	B-6			
25-6	甕	12層、I区C2	刷文L.R.	マツツ	体部	熱汚土	7-5	B-7			
25-7	甕	12層、I区C2	縞文: ヨコナゲ、体部: 縞文L.R.	ミガキ?	底面-体部	熱汚土	7-4	B-9			
25-8	石鏡	I区・1層上面	地文	石	材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真回数	基盤番号
25-8	石鏡	I区・1層上面	地文	石英		0.4	1.9	0.3	0.25	6-1	K-3

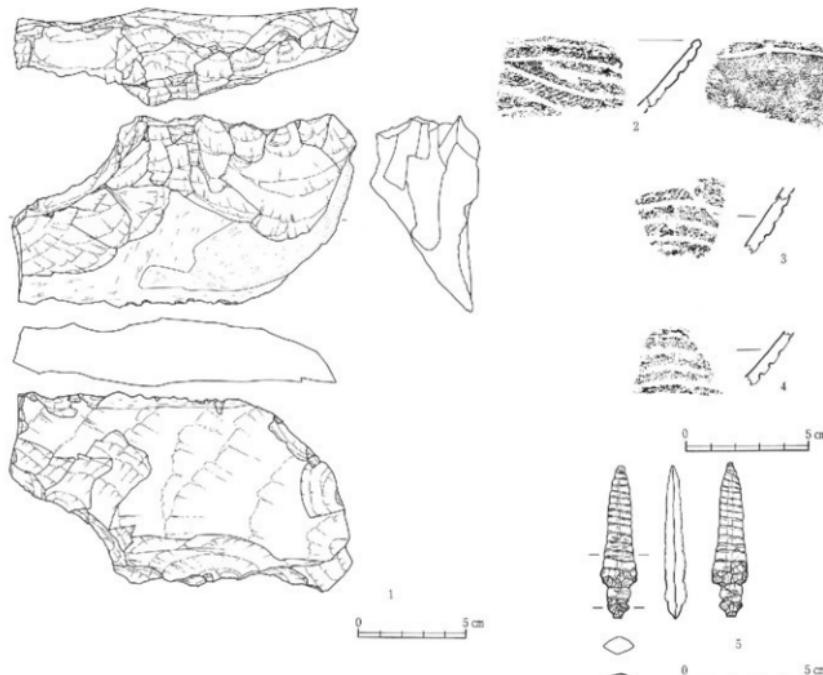
第25図 12層出土遺物実測図

1の北では、幅2mmの沈線文を施し、胎土に白色細砂を多く含んだ土器が出土した(第32図2)。また、この土器の内面には初痕が認められる(写真図版7-18)II区では、SD10下の14層中(N区)で幅3mmの沈線(平行+波状)を施した鉢が出土している(第32図4)。石器は、1・II区で石鐵・石庖丁・二次加工のある剥片・微細剝離痕のある剥片・石核?が出土している。

SD10(第30図)

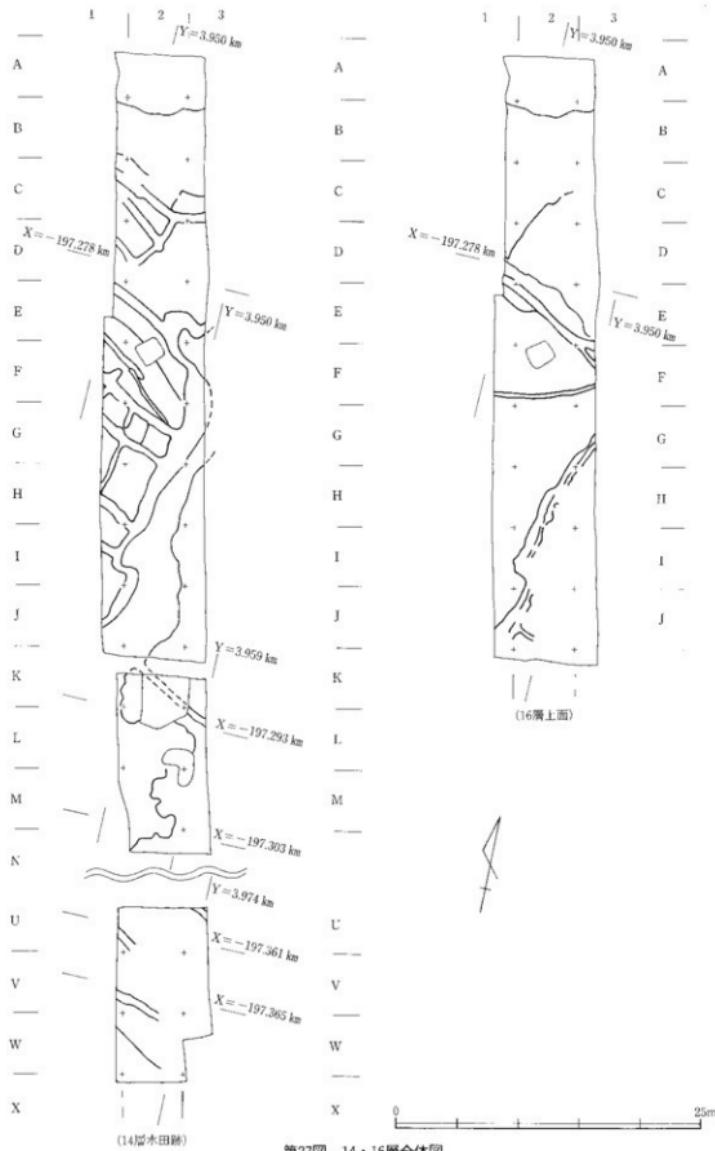
I区中央部からII区にかけて位置し、14層上面で検出した。規模は検出長約42m、幅I区4.7m・II区6.85m以上、深さ西側11cm、東側3cm、方向はおよそN-9.5°-Eで蛇行している。満西壁が高いのは、西側水田跡と関連するものであり、この溝に合わせて畦17が形成されているに起因する。北部では蛇行が著しくなるものと予想され、南部(II区)では溝幅が広がり著しくプランが不定形となっている。溝の東側は非耕作域となっており、ここにあるSD12(II区)はSD10から派生する溝と考えられる。埋土は13層である。遺物は出土していない。

この溝は、元来自然流路と考えられるが、14層水田(新規段階)の耕作に際しては多分に利用されていたものと

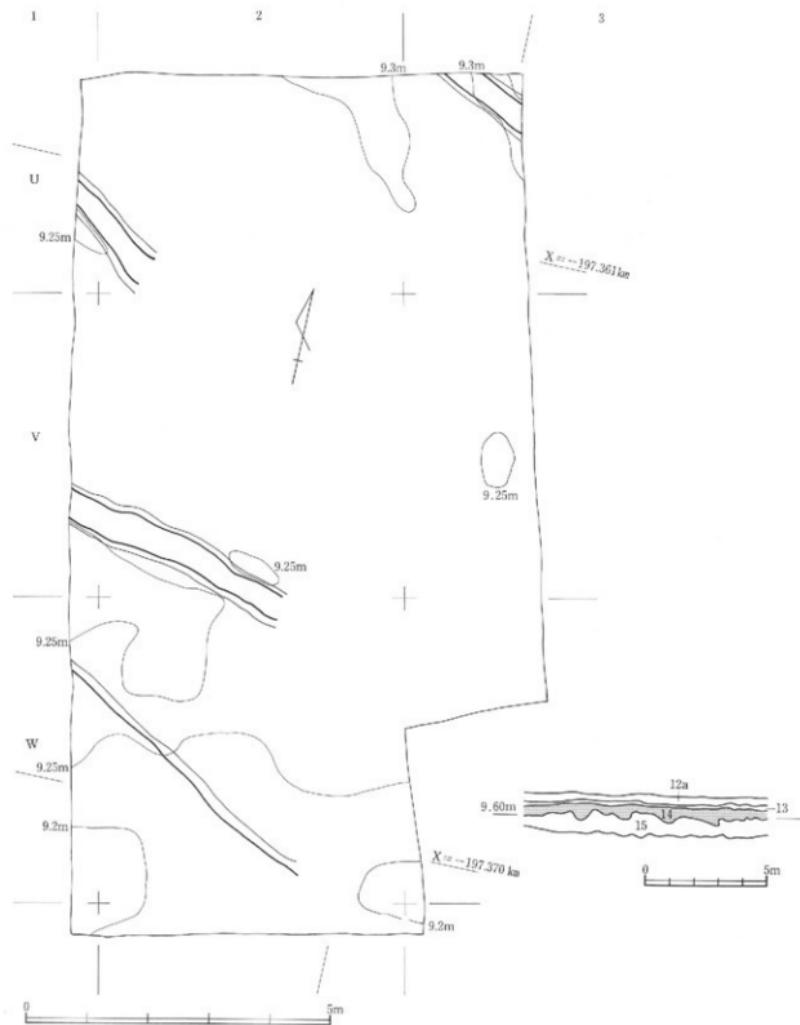


第26図 13層出土遺物実測図

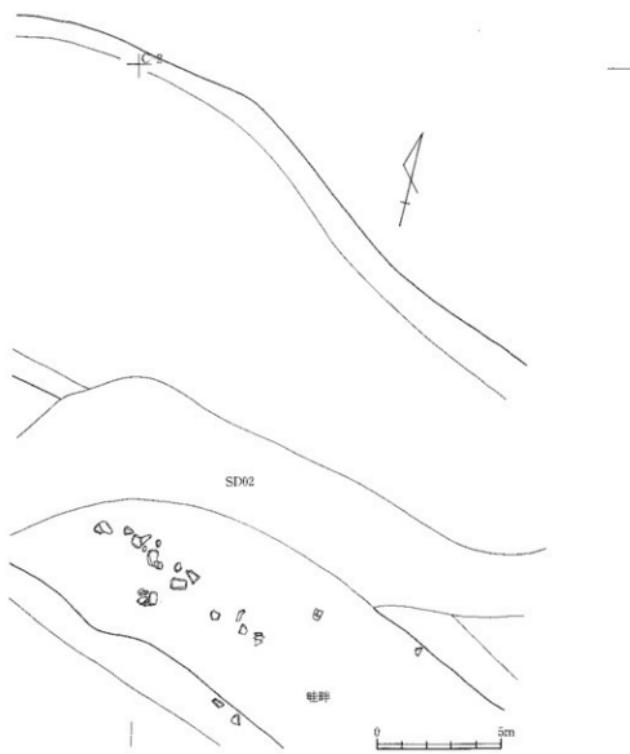
図版番号	種類	胎土・層位	外観	内面	残存	傷害	写真図版	登録番号
26-2	高环	13層、I区B.C	沈線+輪文L.R+(先痕) 刺落	口縁部に一筋の沈線、ミガキ	口縁~体部	白色細砂	7-16	B-17
26-3		13層、I区B.C	沈線+輪文L.R+(先痕)、刺落	ミガキ?	全体		7-12	B-16
26-4		13層、I区B.C	平行沈線(幅2mm、深さ2mm)、刺落	マメツ	体部	白色細砂	7-11	B-14
初期商号	陶器	道側・屋敷	待 見	石 材 重量(g) 長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm)			写真図版	登録番号
26-1	大型板状石器	I区13層中	G-2区	安山岩 500 9.1 15.9 3.0	6-2	K-17		
26-5	石鐵	II区13層下部	鍛造形・茎型に植物を奪く	頁岩 2.6 4.8 1.9 0.3	6-3	K-15		



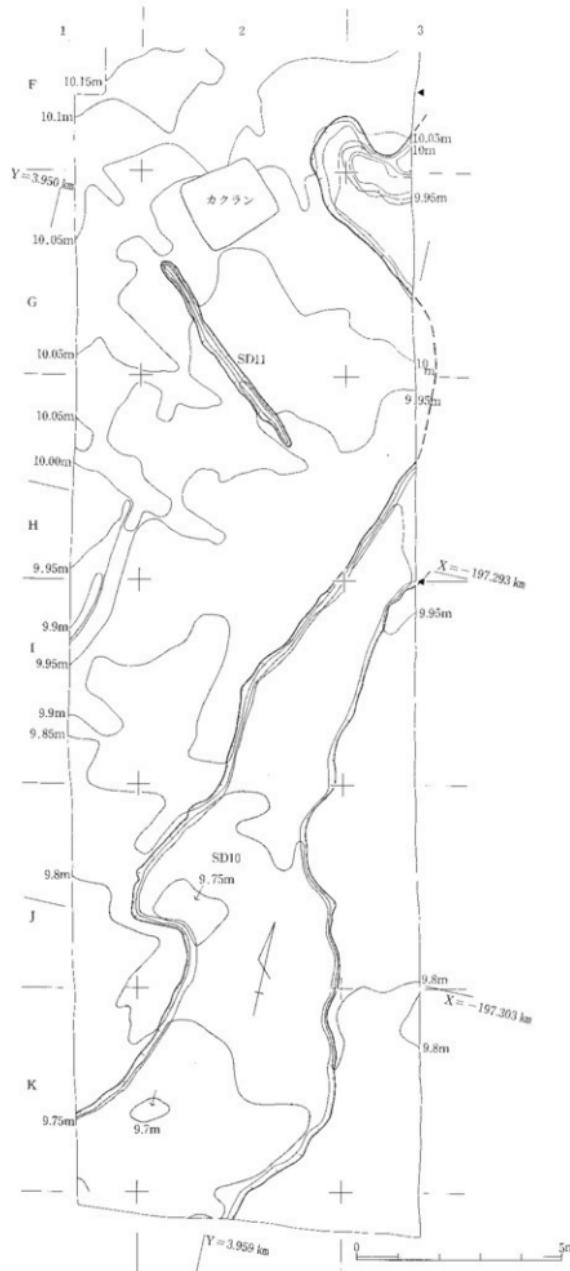
第27図 14・15層全体図



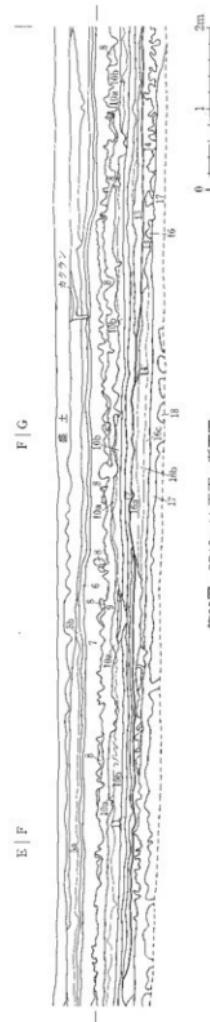
第28図 III区14層水田跡平面・断面図



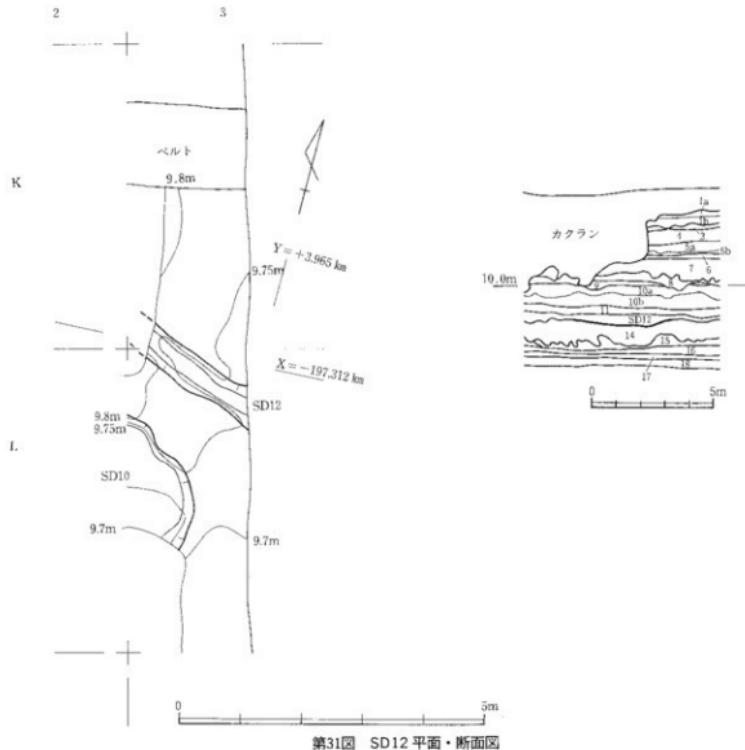
第29図 I区14層水田跡出土遺物平面図



第30図 SD10・11平面・断面図



第30図 SD10・11平面・断面図



第31図 SD12 平面・断面図

SD11（第30図）

I区中央部（F・G区）に位置し、14層上面（水田区画内）で検出した。規模は検出長5.51m、幅0.35m、深さ4cm、方向はN-47.5°-Wで直線的である。隣接する14層水田跡の珪畔方向とは一致しない。遺物は出土していない。

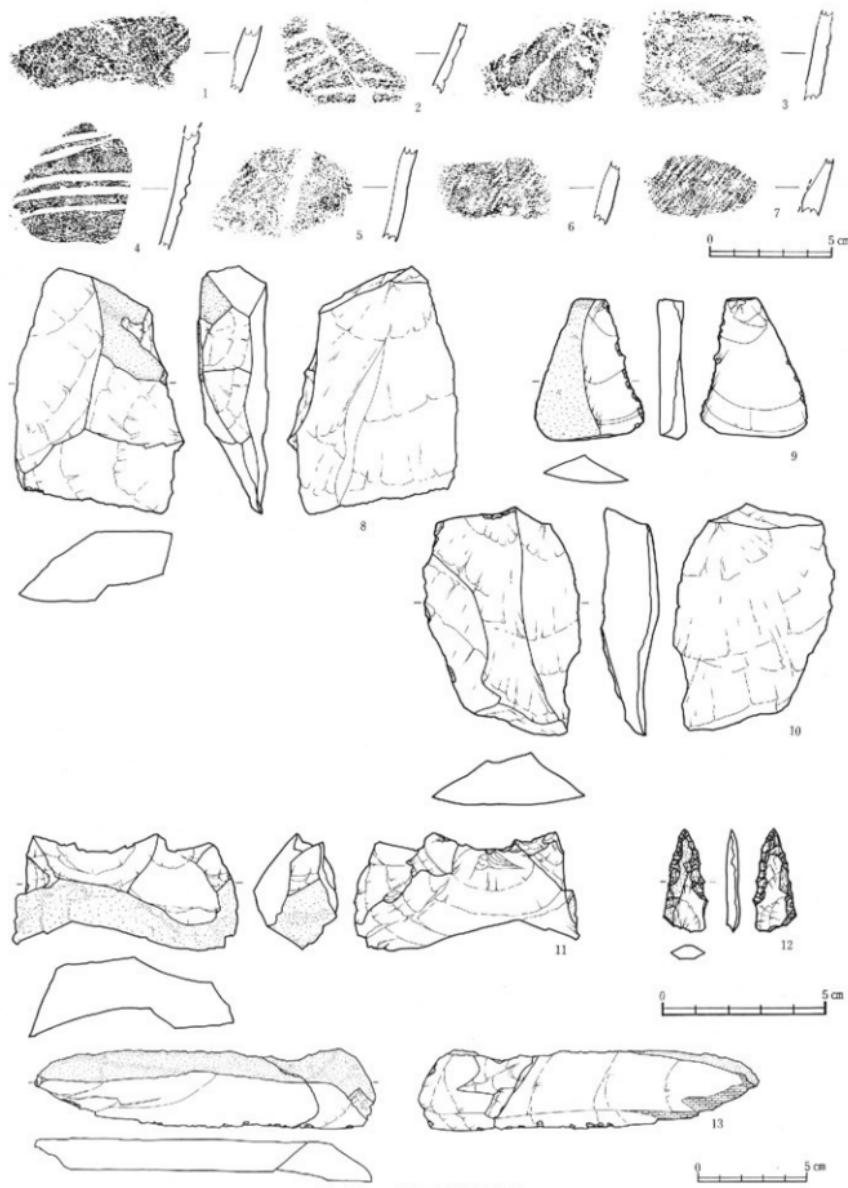
SD12（第31図）

II区北部（L区）に位置し、14層上面で検出した。I区とII区の境で、SD10に接続するものと予想される。規模は検出長1.88m、幅0.54m、深さ7cm、方向はN-65.5°-Wで直線的に続くものと思われる。埋土は13層である。遺物は出土していない。

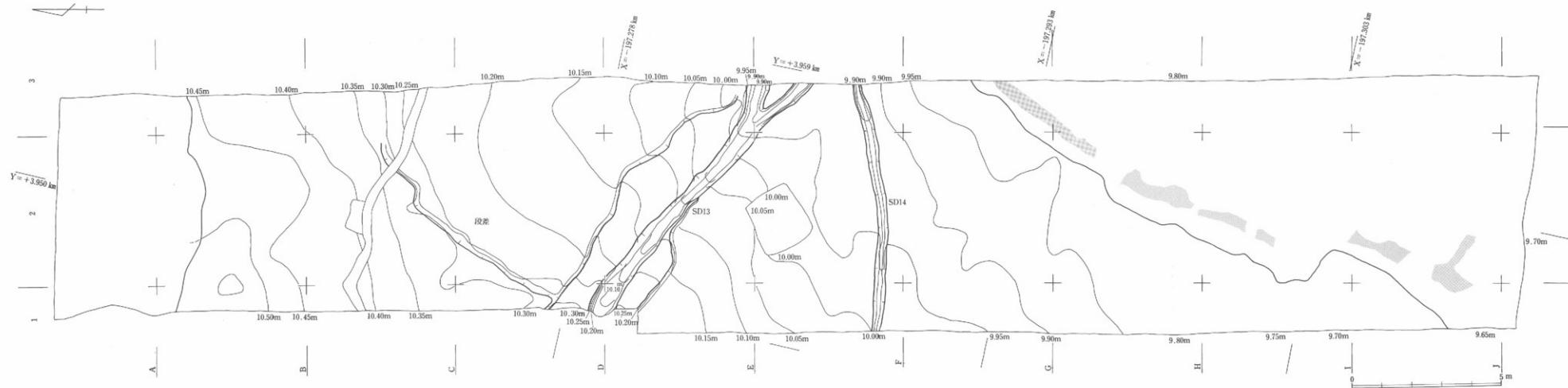
(12) 16層上面の遺構と遺物（第33図）

16層上面では溝跡2条・段差・14層水田の擬似珪畔Bを検出した。擬似珪畔については、14層水田跡で述べたのと同様である。

SD13（第34図）



第32図 14層出土遺物実測図①

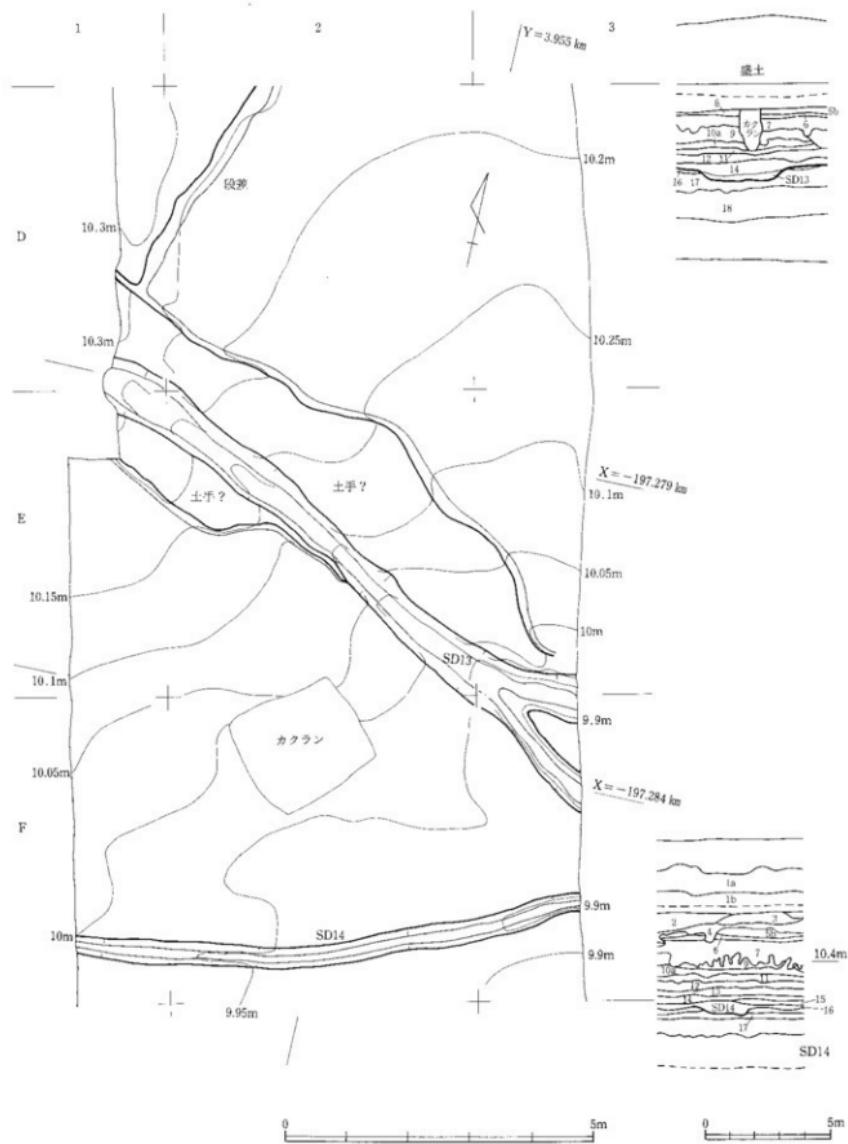


14層出土遺物									
回収番号	種類	遺構・層位	外 図	内 図	現 行	備 考	写真回数	遺物番号	
32-5	骨	14層、I区C1.2	繩文L.R	マメツ	体部		7-36	B-10	
32-6	骨	14層、I区C1.2	繩文L.R	マメツ	体部		7-15	B-11	
32-1	骨	14層、I区C1.2	繩文L.R	ミガキ	体部		7-14	B-12	
32-5	骨	14層、I区C1.2	繩文L.R	マメツ	体部		7-17	B-13	
32-2	鉢	14層、I区C1.2	繩文L.R、削鉢	輪郭彫り、ミガキ	削鉢	白色細粉	7-13	B-14	
32-3	骨	14層、I区C1.2	繩文L.R	マメツ	体部		7-13	B-20	
32-4	鉢	14層、II区N2	平行・波状文鉢(幅3mm、深さ2mm)	ミガキ	体部		7-19	B-19	
回収番号	種類	遺構・層位	特 徴	石 材	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真回数
32-8	二次加工のあらわし鉄片	I区 14層上部 G-3 区	富山産	85	7.6	5.2	2.2	6-5	K-6
32-9	二次加工のあらわし鉄片	I区 14層	富山産	45	6.0	3.5	0.8	6-6	K-11
32-10	二次加工のあらわし鉄片	I区 14層	富山産	50	7.0	4.8	1.8	6-5	K-9
32-11	石斧?	I区 14層	富山産	52	3.6	6.9	2.6	6-8	K-10
32-12	石鉗	I区 14層上部 H-1 区	富山産	1.6	3.15	1.3	0.4	6-4	K-5
32-13	石臼?	II区 14層中 N-2 区 K-17 (14層下部) 上部合		123	15.7	1.8	4.5	6-9	K-8



回収番号	種類	遺構・層位	外 図	内 図	現 行	備 考	写真回数	遺物番号
32	骨	14層上部	ココナツ、ミガキ、体部：繩文L.R	ミガキ	口縁一部削	7-20	50	D-21

第33図 I区16層上面平面図



第34図 I区 SD13・14 平面・断面図

I区中央部（E・F区）に位置し、16層上面で検出した。規模は検出長約10.4m、幅0.86m、深さ14cm、方向はN-60.5°-Wで直線的に走行し、東部で2条に分岐する。この分岐部分が、上層のSD10の西側張り出し部分とプランが重複している。また、溝の両側に土手状の高まりが取り付いている。北側のものは調査区内のほぼ全面にあり、検出長約8.8m、最大幅1.78m、高さ3~4cm、南側のものは検出長4.63m、最大幅0.98m、高さ3~4cmである。この土手状の高まりは、溝の掘り上げに起因するものと予想されるが、その性格・目的は明確ではない。埋土は、1層で、土性は黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

SD14（第34図）

I区中央部（F区）に位置し、16層上面で検出した。規模は検出長約8.28m、幅0.42m、深さ7cm、方向はN-65°~80°-Eで屈曲している。埋土は14層である。遺物は出土していない。

段差

段差はI区で2ヶ所検出されている。北部の段差は、SD13北側の土手状の高まりより北へ伸びている。段差の比高差は、2~6cmである。段差の北端部では、14層水田跡の区画と重複する部分があるが、大部分は14層水田区画とは一致しない。したがって、14層水田の耕作深度の差によるものとは、必ずしもならないようである。何に起因するものかは明確ではない。段差の下段で弥生土器の焼片が出土している。

南部の段差は、SD10の形成や14層水田跡（古段階）の耕作深度の差に起因するものである。段差の比高差は10cm前後である。段差の東側には、14層水田跡の擬似珪岸Bが一定の間隔を持って並走している（第33図）。水田跡との関連は、14層水田跡の報文を参照されたい。

（13）縄文時代・旧石器時代相当層の調査

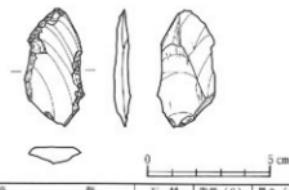
16層以下では、断面観察の結果自然堆積が連續することから縄文時代・旧石器時代相当層の確認調査をすることとした。縄文時代の遺構は・遺物は、第28次調査やなど縄文時代早期末の土器や石器が出土している。また、旧石器時代相当層は、地下鉄工事に伴う調査（5次・17次調査）や、で腐植層が確認されている。これらの層位が、今次調査区まで伸びているかどうかの確認のための深掘り調査はI区2箇所、III区1箇所設定した。深掘り調査では作業上での安全確保のために調査範囲を縮小し、I区では16層の精査が終了した12月9日より6.5m×12m、2×2mの調査区を設定した。III区では、6.2×7.8mの調査区を設定し11月28日より開始した。

その結果、III区31層で火山灰ブロックを確認した。この火山灰は周辺の調査から見て、十和田中擗火山灰と予想された【自然科学分析の結果では、沼沢テフラの可能性が指摘された。（第3章分析・同定参照）】。また、31層中からは縄文土器、石器が出土した。縄文土器は、早期の条痕文土器であるが細片のため実測は困難であった（写真図版7・21・22）。石器は、第36図に示した磨石、凹石である。34層で最初の腐植質粘土層を検出した。この腐植層中には炭化物は含まれるが、種子・枝等の植物遺体は含まれていなかった。35層で、石器を出土した（第35図）。このため、石器の出土した地点を中心に1m程周囲を拡張して石器の確認を行ったが、更なる出土は見られなかった。38層で、樹木片を含む腐植質粘土層を確認した。さらに、41層まで深掘り調査を行ったが、標高が5m以下になりこれ以上の調査は危険であるとして、12月17日III区での調査を終了した。なお、41層下面から約50cm下で礫層が存在することをボーリング棒で確認している。

I区では、28層で火山灰ブロックを確認したがIII区と同様のものであるかどうかは、分析を行わなかったので不明である。30層以下は土壤が非常に固いものとなり、調査期間も少なくなったので1×1m程の確認のための深掘りに変えて調査を行った。その結果、34~37層にかけて腐植質粘土層を検出した。特に35層は、針葉樹の葉を多量に含んでいる。12月27日、調査の一切を終了した。

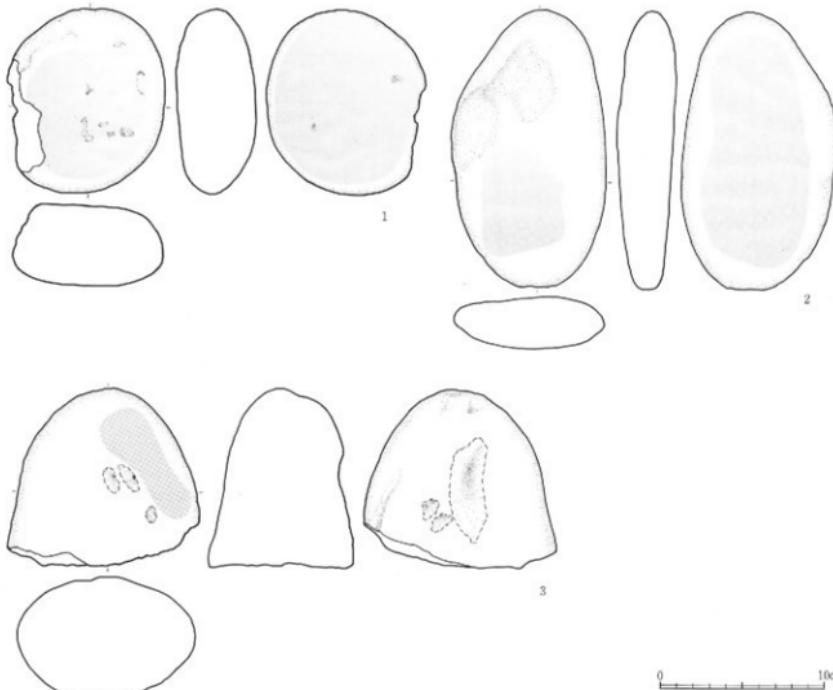
35層出土石器について

出土した地点は、III区35層である。石材は頁岩で、表皮に近い部分と思われる。横長の剝片の腹面の両縁辺に連續した二次加工がなされている。また、先端から衝撃剝離と思われる新しい剝離痕が認められる。このことから、形態的にはナイフ形石器と呼べるが、基部の調整が途中で行われていないことや、横長の剝片を利用していることなど、狭義ではナイフ形石器と呼べるかどうか疑問である。



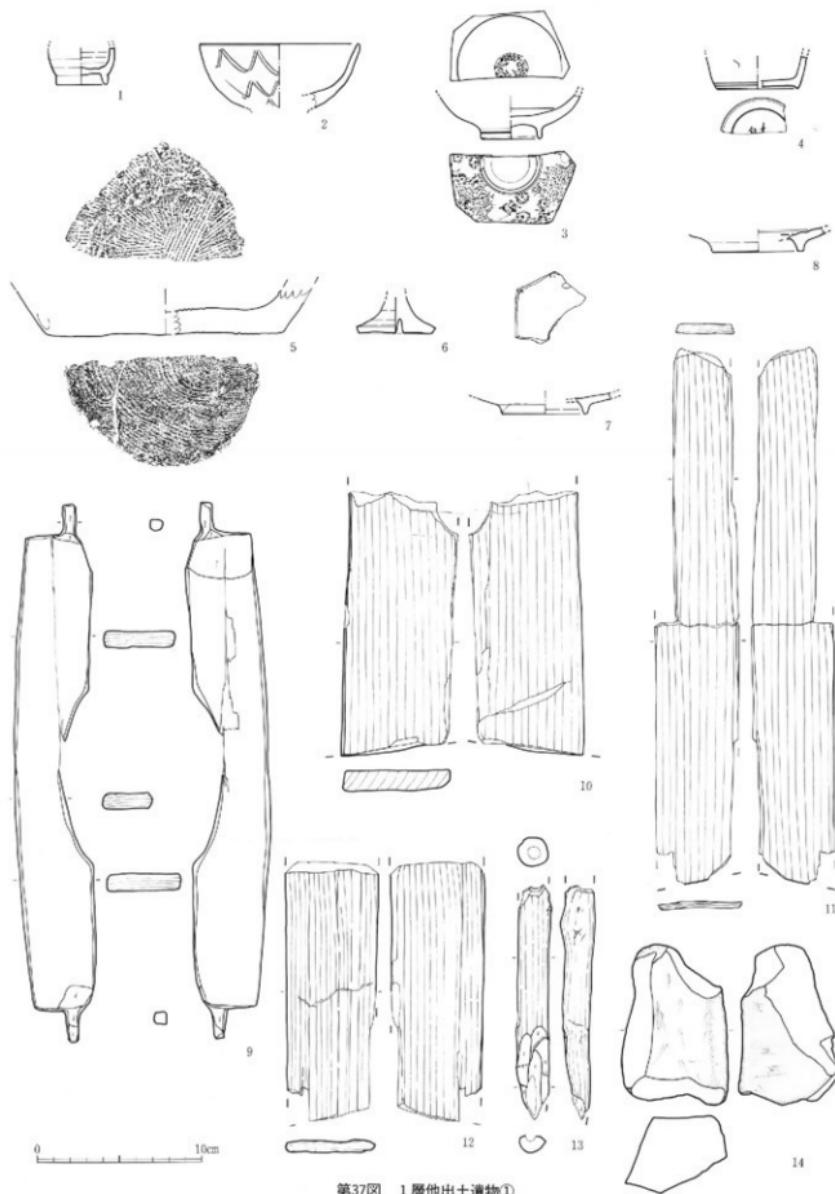
遺物番号	種類	断面・厚さ	特徴	石材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
35	ナイフ	田区35層	両縁辺に溝削した一次加工	頁岩	2.6	3.6	1.8	0.4	6-13	K-16

第35図 35層出土遺物

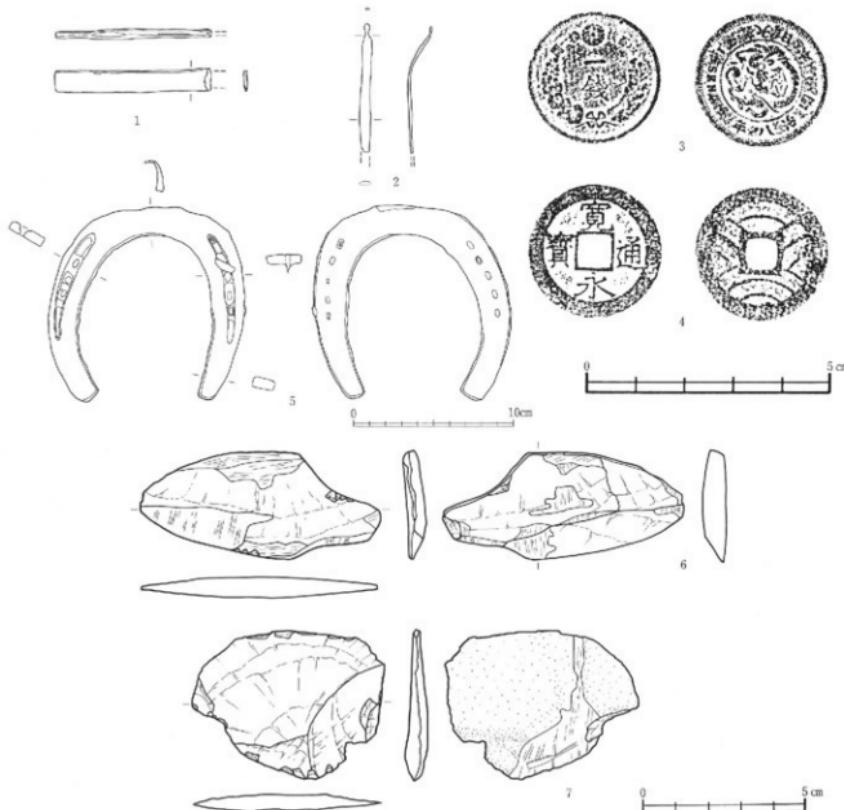


遺物番号	種類	断面・厚さ	特徴	石材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
36-1	磨石	田区31層	一部欠損	ギョウカイ岩	745	11.2	9.65	4.85	6-11	K-13
36-2	磨石	田区31層		ギョウカイ岩	688	17.0	9.2	3.4	6-10	K-14
36-3	磨石+円柱	田区31層	一部磨打痕あり 欠損した石を利用	ギョウカイ岩	1060	19.8	11.65	8.7	6-12	K-12

第36図 31層出土遺物



第37図 1層他出土遺物①



目録番号	種 別	遺物・部位	特 徴	産 地	年 代	現 有	決 定 量 (cm)			写 真 図 版		目録番号
							口 径	底 径	高 度	写 真 図 版	目録番号	
37-1	鐵器 小鉗	I区 建切	白銅? 上部欠損	紀前	18C 追跡	体~底部	-	3.1	(2.3)	8-5	J-1	
37-2	鐵器 鋸	I区 1号	奥付 二重羅文	紀前	18C	口~底部	9.6	-	(4.0)	8-1	J-3	
37-3	鐵器 鋸	田区 1号	奥付、櫛歯、見込縞文	不明	19C 桶半	体~底部	-	3.6	(2.7)	8-6	J-5	
37-4	鐵器 鋸口	田区 1号	奥付、櫛歯、見込縞文	紀前	18C	体~底部	-	4.8	(2.65)	8-11	J-5	
37-5	鐵器 鐵棒	田区 1号	板金状、外側縞文、圓印半字印、屈曲あり近世土蔵か	建	18C 以降	武庫部	-	(14.4)	(2.8)	8-9	I-10	
37-6	鐵器 鐵板?	田区 1号	板金状、外側縞文、圓印半字印、屈曲あり近世土蔵か	建	18C ?	桶部	-	4.5	(2.3)	8-8	I-2	
37-7	鐵器 鐵板?	田区 1号	奥付、櫛歯、見込縞文	未詳	18C 以降	底部付近	-	5.2	(1.35)	8-14	I-3	
37-8	鐵器 鐵	田区 1号下部	白陶物 内底・蓋付縞貼	大河内馬	18C 以降	底部	-	5.4	(1.9)	8-7	I-4	
目録番号	種 別	遺物・部位	特 徴	材 質	生産 (E)	典式 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	写 真 図 版	目録番号		
37-9	小鉗	且区 建切	盤内に墨? (古銅土鉗?)	-	-	33.1	4.5	1.1	8-16	L-1-2		
37-10	鐵 鐵板	且区 建切	鋸口欠損	-	-	16.3	6.5	1.3	8-26	L-5		
37-11	鐵 鐵板	且区 建切	一端欠損	-	-	33.1	5.9	0.5	8-22	L-5		
37-12	鐵 鐵板	且区 建切	鋸口欠損	-	-	16.9	5.6	0.8	8-25	L-6		
37-13	鉗	I区 10号	丸頭4片頭加工 中空材 上部欠損	-	-	14.5	1.9	1.6	8-19	L-4		
37-14	鐵瓦	田区 1号下部	黄褐色 下部存・欠損 (近世は跡か)	-	-	9.9	6.5	4.8	9-2	K-2		
38-1	小鉗	且区 建切	口上部 建切存・鋸口欠	真ちゅう?	22.1	9.8	1.45	0.7	8-17	N-2		
38-2	鉗	田区 1号下部	折れあり 実物 下部大根	第?	7.8	5.1	0.7	0.2	8-18	N-1		
38-3	古鉗	田区 建切	一端折断 明治8年 (1875)	銅	6.9	2.7	-	-	8-20	N-6		
38-4	古鉗	田区 建切	四文式、三字11號 明治6年 (1873)	銅	4.3	2.7	-	-	8-21	N-4		
38-5	鉗	田区 1号	右面式 (明治25年頃か) 町汽5号判	銅	266.3	-	-	-	8-27	N-3		
38-6	打包丁?	I区 建切	-	-	17.5	3.3	7.4	0.6	9-2	K-1		
38-7	鐵器別物のある薄片	田区 1号中	-	安山岩	14.6	4.6	5.8	0.7	9-1	K-4		

第38図 1層他出土遺物②

(14) その他の遺物（第37・38図）

その他の遺物は1層や擾乱による土坑から多く出土しているが、その所属時期を一定にしない遺物が多い。そのなかで図示したものは、19点である。また、II区で擾乱として掘り上げた土坑には、近世の遺物しか含まれないことから近世の土坑であった可能性も否定できない。このなかで第37図9に図示した木製品は、桶の把手とも考えられるが、縫ぎ口部分が細すぎるので、提灯の内型の可能性を指摘しておきたい。また、第37図13に図示した木製品は、10層より出土した打ち込み杭である。上部を欠損しており、中が空洞になっている。先端は片面にだけ加工が認められる。

5. 遺構の所属年代とまとめ

1. 今次調査は、富沢遺跡の中心から北よりの地点にある。隣接した調査として、5次、7次、16次、17次（篠原・吉岡：1989）、28次（佐藤甲：1988）、74次（平間：1992）、86次（佐藤甲：1996）など多くの調査が行われている。また、富沢遺跡北部A地区基本層序に包括されている（佐藤甲：1991）。これらの調査の成果との主な対応関係は次のようになる。

99次	99次	5次	7次	17次	28次	74次	86次	86次	北部	年代
I・II区	III区						C地区	E地区		
2		2	2		2				2	近世以後
3	3									中世
5a	5a	3	3	3	4	4	3			平安時代
7a	7a				5a	5	5?	5?	4c1	平安時代
8	8						6?		5	奈良～平安時代
10a	10a	5	5	5	9a	7	10		9a	弥生時代
12a	12a	7c	7c	7c	11a	12			11	弥生時代(彌形圓式期)
14	14	8	8	8						弥生時代(楕形圓式期以前)
28	31	33		24			31			

2. 検出した遺構は、調査区全域において検出されたものとして7a層水田跡・12層水田跡がある。その他に、I区で検出した遺構としては、10b層上面で溝跡2条（SD01・02）、11層上面で溝跡5条（SD03～07）、14層水田跡、SD10・11（14層上面）、16層上面で溝跡2条（SD13・14）がある。II区で検出された遺構としては、11層で溝跡2条（SD08・09）、14層上面でSD12がある。III区で検出された遺構としては、3層水田跡、5a層水田跡、8層水田跡、14層水田跡がある。また、I・II区の壁面において2層水田跡が確認されている。これは近世から現代にかけての水田であり、特にI区では「字境」と思われる大畦を確認している。

3. III区において3層水田跡（畦畔5条とそれによって区画される水田区画4区画）を検出した。I・II区では上層の水田耕作によって削平され、壁面においてわずかに土層が確認されるだけである。時期は、層位的には平安時代以降近世以前であるが、過去の調査との対応から中世の可能性が高い。

4. III区において5a層水田跡（段差のみ）を検出した。I・II区では前述したようにすでに削平されている。遺物は杭を4本出土したのみで、時期を決定するようなものはない。しかし、層中に灰白色火山灰を含むことから平安時代（灰白色火山灰降下以降）から中世にかけての水田跡と推定される。

5. 調査区全域で7a層水田跡（I区：畦畔14条・水田区画9区画、II区：畦畔等は検出では土壤のみ、III区：畦畔6条・水田区画5区画）を検出した。I区では地形の傾斜に合わせて畦畔が作られているようで規則性が見られない。III区では、ほぼ真北とそれに直行する方向を示す畦畔であるが、富沢地区における条里型水田に含まれるかは

方向的なずれが見られるので今後の調査成果と合わせて判断していきたい（富沢地区での条里型水田の南北方向は真北か東に振れても1°以内である）。明確な時期を示す遺物は出土していないが周辺の調査との対応から、平安時代（灰白色火山灰降下以前）の水田跡と推定される。

6. 8層水田跡は、III区において検出した（I・II区では水田土壤のみの検出である）。明確な時期を示す遺物は出土していないが周辺の調査との対応から、奈良時代から平安時代（灰白色火山灰降下以前）の水田跡と推定される。

7. 10b層上面で溝跡2条を検出した。いずれもI区である。

8. 11層上面で溝跡7条を検出した。I区で5条、II区で2条である。時期を決定するような遺物は出土していない。

9. 調査区の全域で12a層水田跡（I区：畦畔39条・水田区画32区画、II区：畦畔23条・水田区画16区画、III区：畦畔43条・水田区画31区画）を検出した。区画単位がよくわかるIII区で見ると、平均1.7m²ほどの小区画の水田である。遺物は、I区畦脇で甕1個体が一括で出土しており、土器の文様形態や周辺の調査との関連から時期は樹形圓式期に比定される。

10. 13層では遺構は検出できなかったが、石鐵？・石器・土器等の遺物が出土している。特に土器に関しては、幅2mmほどの沈線と充填縄文手法による「変形工字文」と考えられる文様が描かれている。また、胎土に白色細砂を多く含んでいるなどの特徴が見られる。このような特徴の土器は弥生時代中期前葉の船渡前式や寺下圓式の土器に見られるものである。しかし、富沢遺跡から西に約4kmの「船渡前遺跡」出土の土器には同様のモチーフは見られない。よって、大きくは弥生時代中期前葉の時期で収まると考えられるが、中期中葉の樹形圓式期により近いものであると理解しておきたい。

11. 14層で水田跡（I区：畦17条・水田区画18区画、III区：畦3条）と溝跡3条を検出した。検出した溝跡（SD10）直下や、非耕作域下で擬似珪畔Bが確認された。このことは、14層水田が2時期あったことを表しているものと考えられる。遺物は、弥生土器や石器などがある。土器の文様の特徴を見ると細片が多く全体の手法が判然としないが弥生時代前期の山王III層式の特徴が見られ、この時期に該当するものと想定される。

12. 16層上面で溝跡2条と段差を検出した。時期を決定する遺物が出土していないので断定はできないが、弥生時代前期とだけしておきたい。

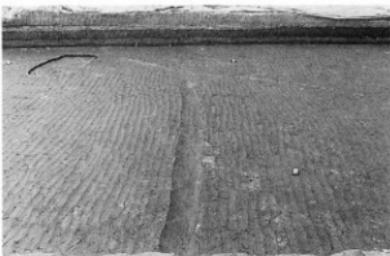
13. III区31層中で検出した火山灰は、周辺の調査で検出している火山灰と肉眼の観察では似ているので、当初十和田中揮火山灰と考えていたが、自然科学分析の結果「沼沢テフラ」との同定をえた。今次調査区から西へ50mの98次調査35層から検出した火山灰も同様のものであるという指摘があった。このことから、この火山灰は今まで富沢遺跡からは検出報告がなされていない火山灰であり、縄文時代の古環境を復元する上でも重要なものと考えられる。今後の資料の増加に期待するとともに、関連科学との連携の重要性についても再認識していきたい。

14. III区35層で出土した石器は、30次調査で出土して以来のものであり、旧石器時代の人類活動の広がりが確認できた。

15. 腐植層はI区で4層、III区で2層確認できた。いずれにも、針葉樹の葉は確認できたが、樹根・球果などの植物遺体は確認できなかった。



1. I区7a層水田検出状況（南より）



5. I区SD06完掘（東より）



2. I区SD02全景（東より）



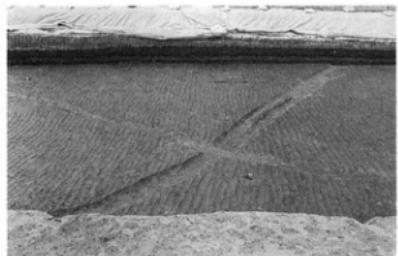
6. I区SD07完掘（東より）



3. I区SD03完掘（東より）



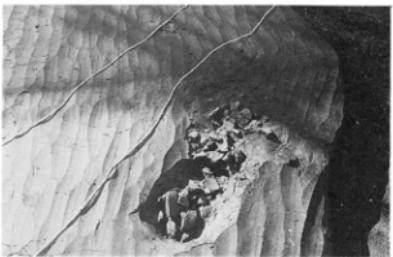
7. I区12層水田確認状況北部アップ（南より）



4. I区SD04・05完掘（東より）



8. I区12層水田検出（南より）



1. I区12層土器出土状況（東より）



5. I区14層水田北部アップ（南より）



2. I区北部土器出土状況（南より）



6. I区14層水田北部土器（東より）



3. I区13層石器出土状況（西より）



7. I区SD13・14擬似畦畔（南より）



4. I区14層水田確認状況（南より）



8. I区14層水田下の擬似畦畔B（南より）



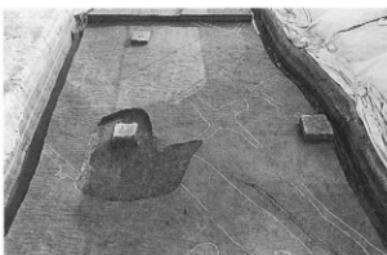
1. I区SD11全景(南東より)



5. II区SD08・09全景(北より)



2. I区16層上面出土弥生土器(東より)



6. II区12層水田確認(北より)



3. I区SD13全景(東より)



7. II区12層水田全景(南より)



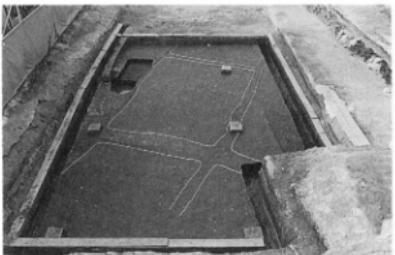
4. I区SD14全景(西より)



8. II区13層出土遺物(東より)



1. II区14層上面全景（南より）



5. III区 7層水田跡検出状況（南より）



2. II区 SD12 全景（南より）



6. III区 8層水田跡検出状況（南より）



3. III区 2層水田跡検出状況（南より）



7. III区 12層水田跡検出状況（南より）



4. III区 2層水田跡出土器物（北より）



8. III区 12層水田跡検出状況（南より）



1. III区14層水田全量 (南より)



5. III区35層下部石器出土 (東より)



2. II区東壁セクション (西より)



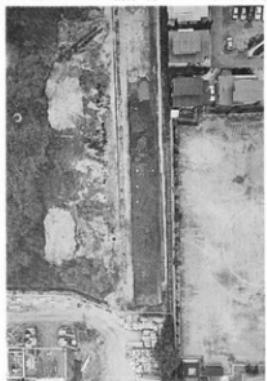
6. III区北壁セクション (南より)



3. I区西壁セクション (東より) C・D-2グリッド付近



7. I区東壁セクション (西より)



4. 7a層水田 (上空より)



8. 7a層水田 (北西上空より)

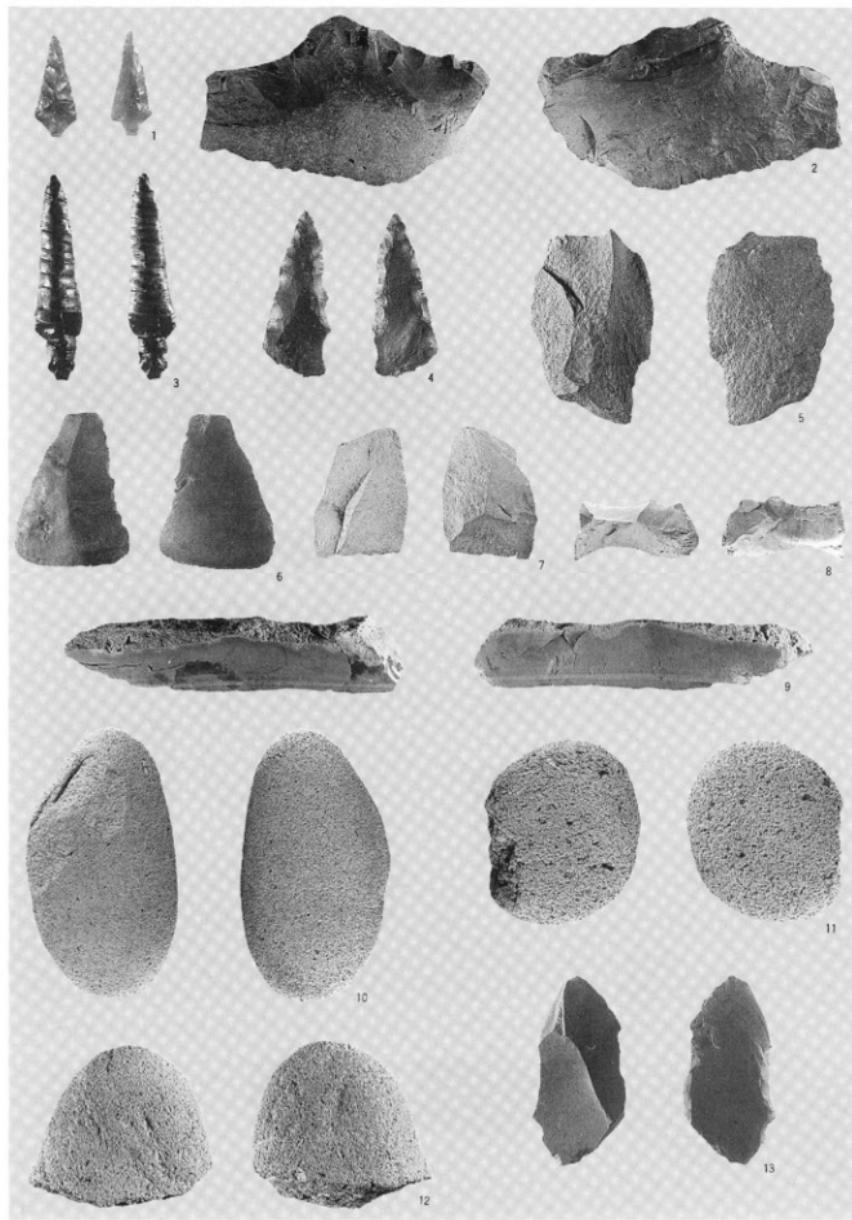


写真6 出土遺物（1）

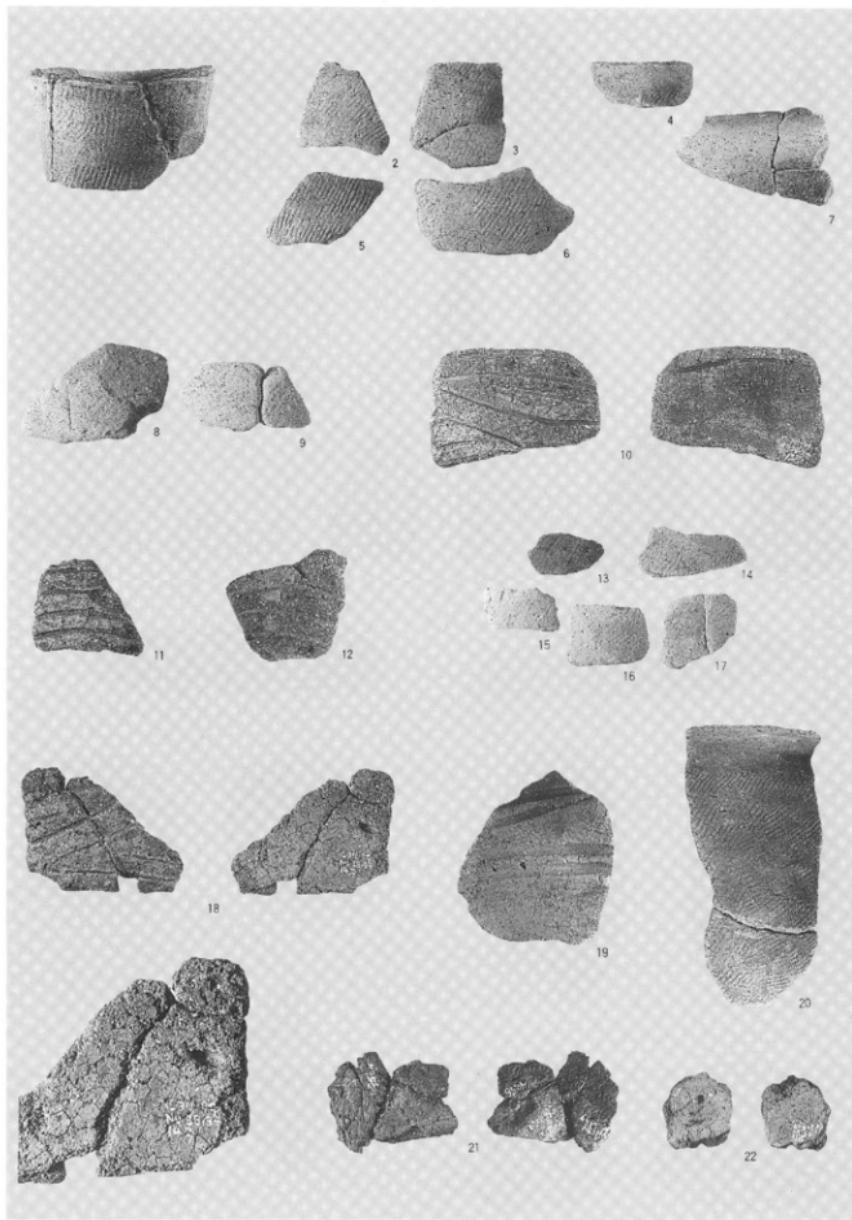


写真7 出土遺物（2）



写真 8 出土遺物（3）

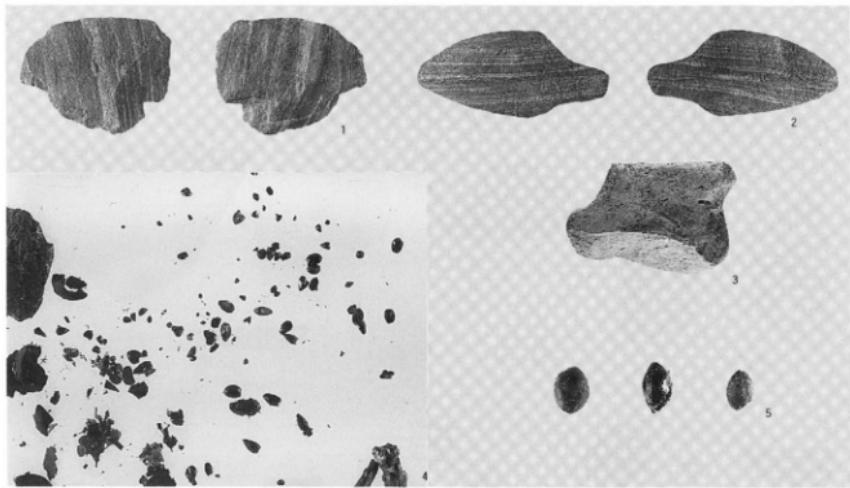


写真9 出土遺物（4）

第6節 富沢遺跡第101次調査

1 調査に至る経緯

平成7年6月14日付で、庄子正一氏よりRC7階建共同住宅の発掘届が提出されたが、当教育委員会では7年度の調査予定は決定していたため、平成8年度の調査を受託することでご了解を得たものである。

平成8年2月27日、発掘調査の実施に先立ち申請者側と第1回目の協議を持った。同申請者からは同遺跡内別地点での発掘届が提出されており(96次)、今次調査の面積が狭いことから同時に調査を行うことが効率的であると判断し、96次調査期間内に調査を実施することを申し合せた。したがって事前の準備、契約等は96次調査と併せて行っている。

2 調査の方法

調査箇所は富沢遺跡の北東端にある。旧地名では「広岡」の北端部で北の「山根街道南」に接した箇所である。現在は都市計画街路長町折立線の北に面した箇所である。

今回の調査対象面積は90m²と狭いため2.5×5mの調査区を設定し、重機により掘り下げを行い断面観察を中心に行った。測量基準点は任意の2点T1(X=-197241.979m, Y=+4578.613m)、T2(X=-197249.575m, Y=+4554.727m)を用いている。

調査は8月1・2日に実施した。重機により盛土を1m除去し、さらに旧表面から約2m掘り下げた。安全性を考慮し現地表面から約3mの深さで調査を終了している。

3 基本層序

確認された層は大別で12層、細別で13層である。層序を大まかにみると1～4層がシルト質粘土層、5～9層が粘土層、10・11層が砂層、12層の泥炭質粘土層となる。12層以下は未確認である。11層以下からグライ化がはじまっているようである。

層の下面に下層を乱す凹凸がみられる。これは水田耕作土の一般的な特徴であることから水田層と考えられるのは、3a・4・6・8層である。



第1図 調査区位置図(1)

第2図 調査区位置図(2)

4 検出された造構と遺物

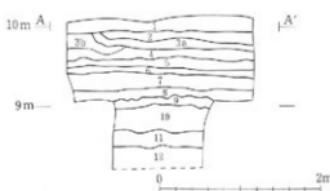
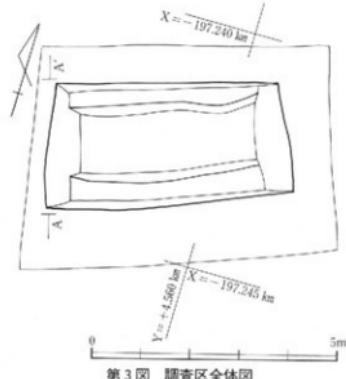
4層上面で溝跡（SD）1条検出した。

SD01（第5図）

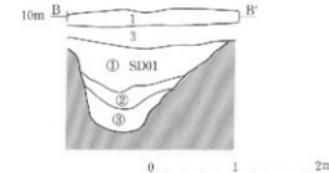
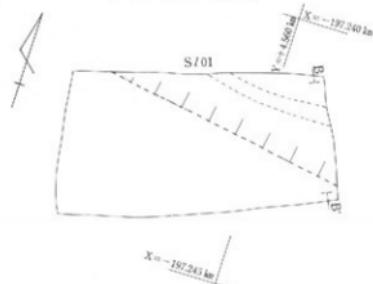
北壁、東壁の断面からの復元である。上端幅1.6m、下端幅0.3m、深さ110cmで、方向はN-81°Wである。断面

第1表 基本層序注記表

層序	土色	土性	粘性	しまり	備考
1層 5Y3/1	オリーブ黒色	シルト質粘土			旧水田耕作土。
2 2.5GY4/1	暗オリーブ灰褐色	砂質シルト	あり	あり	下部に酸化鉄層、炭化物若干。
3a 10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	あり	あり	水田耕作土？マンガン比較的多量。
3b 10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	あり	あり	マンガン比較的多量。堆疊部分？
4 10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	あり	ややあり	水田耕作土？下面やや弱凸。
5 10YR4/2	灰黄褐色	粘土	あり	あり	黑色、黄褐色の薄い層互層になる。
6 10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	あり	あり	水田耕作土？下面やや弱凸
7 10YR4/2	灰黄褐色	粘土			互層。
2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土			
2.5Y2/1	黑色	粘土			
8 10YR5/1	褐灰色	粘土	あり	ややあり	水田耕作土？下面やや弱凸。
9 2.5Y5/3	黄褐色	シルト質粘土			
2.5Y4/1	黄灰色	シルト質粘土			
10 2.5GY4/1	暗オリーブ灰褐色	細砂	ややあり	あり	
11 2.5GY4/1	暗オリーブ灰褐色	細砂			互層。薄い灰色土被状。
12 10YR17/1	黑色	泥炭			互層
5Y5/2	灰オリーブ色	粘土			



第4図 基本層序断面図(西壁)



第5図 SD01 平面・断面図

形はやや開いたU字形で堆積土は3層である。

5 遺構の所属年代とまとめ

(1) 検出した遺構はSD01である。水田耕作土と考えられる層は、3a・4・6・8層である。

(2) 周辺調査区との対比

今次調査区は15次のIII C区の北側10mに位置する。15次III区との層のおおまかな対比は以下のようである。

107次	15次III区	107次	15次III区
3 a	2 b	8	8 a・8 b
4	3 a	9	9 a～9 c
5	4	10	10
6	5・6	11	11 a～11 b
7	7	12	12 a～12 f

(3) SD01の確認面は15次調査での2b・3a層である。15次の2b・3a層は近世以降と考えられることから、SD01もほぼ同時期の可能性が高い。この溝跡は15・40次の中近世の溝跡と方向性を同じくしており、その関連性が考えられる。また、字切図との対応では字境（山根街道南と広岡）に位置することからそれに関連する水路の可能性も考えられる。

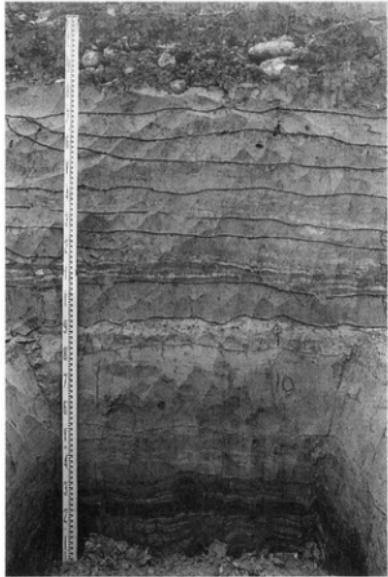


写真1 西壁断面

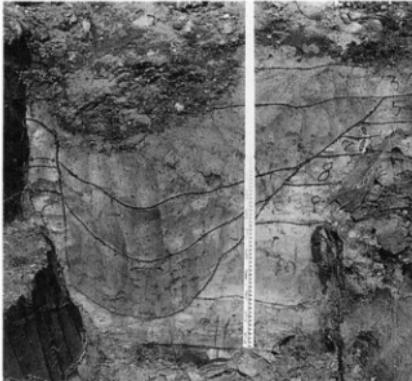


写真2 SD01東壁断面 (西から)

第3章 分析・同定

株式会社 古環境研究所

第1節 富沢遺跡第95次、96次、97次、98次、99次調査の火山灰分析

1. はじめに

仙台市、富沢遺跡第95次、96次、97次、98次および99次発掘調査の際に発掘調査担当者により検出採取された試料について、屈折率の測定により示標テフラとの同定を行って、土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。

2. 屈折率測定

(1) 測定試料

試料は、いずれも発掘調査担当者により発見採取されたものであり、その内訳は、第95次調査の19層、第96次調査の27層、第97次調査の15層、第98次調査の14層および第99次調査の31層である。屈折率の測定は位相差法(新井、1972)による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表1に示す。第95次調査の19層には、無色透明の軽石型火山ガラス(最大径1.5mm)が多く含まれている。この火山ガラスの屈折率(n)は、1.497-1.503である。重鉱物としてはごくわずかに斜方輝石や角閃石さらに黒雲母が含まれている。第96次調査の27層には、無色透明の軽石型火山ガラス(最大径0.2mm)が多く含まれている。この火山ガラスの屈折率(n)は、1.511-1.514である。重鉱物としてはごくわずかに斜方輝石が含まれている。第97次調査の15層には、無色透明の軽石型火山ガラス(最大径0.8mm)が比較的多く含まれている。この火山ガラスの屈折率(n)は、1.497-1.503である。重鉱物としてはごくわずかに角閃石が含まれている。第98次調査14層には、軽石型ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスの最大径は0.6mmで、屈折率(n)は1.500-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や角閃石がごく少量含まれている。斜方輝石(y)と角閃石(n₂)の屈折率は、各々1.708-1.713と1.670-1.677である。この試料の中には、石英も比較的多く含まれている。第99次調査31層には、軽石型ガラスが少量含まれている。火山ガラスの最大径は0.3mmで、第98次調査14層と比較するとより細粒である。その屈折率(n)は1.498-1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石がごく少量含まれている。斜方輝石(y)の屈折率は、1.713±である。この試料の中には、石英が少量含まれている。含まれる軽石型ガラスの形状や屈折率、斜方輝石の屈折率、石英が含まれていることなどにおいて、第98次調査の14層と第99次調査の31層の間に似た傾向が伺えるが、前者の火山ガラスの粒径が大きいことやごくわずかながら角閃石が含まれている点では違いも認められる。

3. 考察—示標テフラとの同定

第95次調査の19層がテフラであるとすると、火山ガラスの色調や形態さらに屈折率など、915年に十和田火山から噴出したと考えられている十和田a火山灰(To-a, 町田ほか, 1981)に同定される可能性が最も大きい。

第96次調査の27層に含まれる火山ガラスの特徴は、約5,500年前に十和田火山から噴出した十和田中擴テフラ(To-Cu, 大池ほか, 1966, 早川, 1983, 町田・新井, 1992)の特徴と一致する。したがって、27層がテフラとすると、To-Cuに同定される可能性が非常に大きい。なお To-Cu は現在のところ福島県吾妻山以北の東北地方一帯で検出されており、縄文時代の良い指標となっている(早田・八木, 1991)。

第97次調査の15層がテフラとすると、火山ガラスの色調や形態さらに屈折率などから、十和田a火山灰（前出）に同定される可能性が最も大きい。

第98次調査14層に含まれるテフラ粒子は、火山ガラスの色調、形態、屈折率、角閃石が含まれること、さらに石英が比較的多く含まれていることなどから、従来仙台市域とその周辺で知られているテフラの中では、約5,000年前に福島県会津地方の沼沢沼火山から噴出した沼沢テフラ（Nm-1、只見川第四紀研究グループ、1966a, b）の特徴とほぼ同一である。ただし斜方輝石の屈折率（ γ ）は、Nm-1のそれ（1.706-1.708；町田・新井、1992）と比較すると若干高い。なお火山ガラスが比較的粗粒なことから、これらのテフラ試料が基盤の凝灰岩に由来している可能性も完全に否定はできない。

第99次調査31層に含まれるテフラ粒子のうち、火山ガラスさらに石英については、Nm-1に由来する可能性も若干考えられる。ただ今回の分析測定では、分析者は現地の土層断面を観察記載する機会を得ることができず、試料の産状に関する資料を多く持ち合わせていない。したがって、試料中のテフラが一次堆積層か否かについての判断は難しく、複数のテフラに由来するテフラ粒子が混在している可能性についても言及できない。

4. まとめ

富沢遺跡第95次、96次、97次、98次および99次調査の際に検出された火山灰層について、屈折率測定を行った。その結果、第95次調査の19層と第97次調査の15層については、どちらも十和田a火山灰（To-a、915年）に同定される可能性が最も高いことが明らかになった。また、第96次調査の27層のテフラについては、十和田中擴テフラ（To-Cu、約5,500年前）によく似ていることが明らかになり、同テフラに同定される可能性の最も高いことが明らかになった。第98次調査の14層と第99次調査の31層については、沼沢沼火山から噴出した沼沢テフラ（Nm-1、約5,000年前）に由来するテフラ粒子の混入している可能性が考えられた。

文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 早川由紀夫（1983）十和田火山中擴テフラ層の分布、粒度組成、年代。火山, 第2集, 28, p.263-273.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.
- 町田 洋・新井房夫（1991）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀研究, 5, p.29-35.
- 早田 勉・八木浩司（1991）東北地方の第四紀テフラ研究。第四紀研究, 30, p.369-378.
- 只見川第四紀研究グループ（1966a）福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の¹⁴C年代—日本の第四紀層の¹⁴C年代XXVI—。地球化学, 82, p.8-9.
- 只見川第四紀研究グループ（1966b）只見川・阿賀野川流域の第四紀編年—とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について。第四紀, 8, p.76-79.

表1 富沢遺跡第95次、96次、97次、98次、99次調査の屈折率測定結果

調査、試料	火山ガラス	重鉱物						
		量	形態	色調	最大径	屈折率(n)	組成	屈折率
95次、19層	pm	cl,tr	1.5	1.497-1.503	(opx,ho,bi)			
96次、27層	pm	cl,tr	0.2	1.511-1.514	(opx)			
97次、15層	pm	cl,tr	0.8	1.497-1.503	(ho)			
98次、14層	++	pm	tr		1.500-1.505	(opx,ho)	opx:1.708-1.713 ho:1.670-1.677	
99次、31層	+	pm	tr		1.498-1.504	(opx > cpx)	opx:1.713±	

++ : 中程度, + : 少ない, pm : 鏡石型, opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石, ho : 角閃石, bi : 黒雲母, cl : 無色, tr : 透明。重鉱物組成の () は量の少ないと示す。屈折率の測定は、位相差法（新井, 1972）による。

第2節 富沢遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

No.	試 料	試料の種類	前処理・調整	測定法
1	95次12層下部	樹木	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン処理	β -線計数法
2	95次17層	樹木	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン処理	β -線計数法
3	95次23層	樹木	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン処理	β -線計数法 長時間測定
4	99次35層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン処理	β -線計数法 長時間測定
5	99次36層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン処理	β -線計数法 長時間測定

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	曆年代	測定No. Beta-
No. 1	4220 ± 60	-28.4	4170 ± 60	交点 BC 2865, 2805, 2750, 2720, 2705 2 σ BC 2900 TO 2575 1 σ BC 2880 TO 2610	100671
No. 2	5010 ± 80	-29.3	4940 ± 80	交点 BC 3705 2 σ BC 3945 TO 3625, BC 3565 TO 3540 1 σ BC 3790 TO 3650	100672
No. 3	7830 ± 70	-28.3	7780 ± 70	交点 BC 6560 2 σ BC 6705 TO 6440 1 σ BC 6615 TO 6475	100673
No. 4	8530 ± 60	-25.5	8530 ± 60	交点 BC 7535 2 σ BC 7595 TO 7470 1 σ BC 7560 TO 7505	103022
No. 5	8740 ± 110	-25.7	8730 ± 110	交点 BC 7855, 7830, 7710 2 σ BC 8000 TO 7525 1 σ BC 7940 TO 7575	103023

(2 σ : 95% probability, 1 σ : 68% probability)

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年 AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、曆年代(西暦)を算出した。補正是年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。ただし、この補正是10,000年 BPより古い試料には適用できない。

*本試料の測定は、米国 Beta Analytic 社において行われた。

第3節 富沢遺跡第95次、96次、97次、98次、99次調査のプラント・オパール分析

1. はじめに

富沢遺跡第95次、96次、97次、98次、99次調査では、発掘調査において水田遺構（畦畔）が検出された（98次、99次）。また、土層断面の観察から耕作跡とみられる土層も複数認められた。そこで、検出された遺構における稲作の検証およびその他の層における稲作跡の探査を目的に、プラント・オパール分析を行うことになった。

2. 試料

分析試料は、第95次調査では、調査区東壁の上位より2層、3層、4a層、4b層、5a層、5b層、6層、8b層、8c層、9a層、9c層、10層、11層、12層の計14点、第96次調査では、調査区南壁の上位より2層、3a層、3b層、4層、6層、8層、9層、10層、11層、12層の計10点、第97次調査では、A地点の上位より2層、4層、5b層、6層、7a層、8層、9層の7点、B地点の上位より6層、7b層、8層の3点、C地点の上位より6層、7a層、8層の3点、D地点の上位より5a層、7a層、7b層、8層の4点、E地点の上位より5a層、7a層、SXIのI層、9層の4点の計21点、第98次調査では、上位より2層、3層、4層、5層、6層、7層、8層、9a層、9b層の9点、第99次調査では、I区西壁の上位より2層、3層、5a層、7a層、8層、10a層、12層、14層、16層の9点、I区東壁の14層の1点、III区北壁の上位より3層、5層、7層、8層、10a層、10b層、12層、13層、14層、15層の10点の計20点である。

3. 分析方法

分析は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

1) 試料土を絶乾（105°C・24時間）後、仮比重を測定する。2) 試料約1gを秤量後、ガラスピーブ（直径約40μm・約0.02g）を添加する。3) 電気炉灰化法により有機物を焼却する。4) 試料に超音波（300W・42KHz）を10分間照射し粒子を分散する。5) 沈底法により微粒子（20μm以下）を除去後、乾燥する。6) 封入剤（オイキット）中に分散し、プレパラートを作成する。

検鏡は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10–5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米（2.94、種実重は1.03）、キビ族はヒエ（8.40）、ヨシ属はヨシ（6.31）、ウシクサ族はススキ（1.24）、タケ亜科については数種の平均値（0.48）を用いた（杉山・藤原、1987）。

4. 分析結果

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科、さらにシバ属、ジユズグマ属のプラント・オパールが検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1～5、図1～10に示した。なお、主な分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。

5. 稲作の可能性について

稻作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、仙台平野ではイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ3,000

個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくとも稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。これらのことを基準として以下、稲作の可能性について検討を行う。

(1) 第95次調査：上位より2層～6層と9c層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、2層、3層、4a層、4b層では、プラント・オパール密度が3,000個/g以上と高い値であることから、耕作層である可能性が高いと考えられる。

(2) 第96次調査：上位より2層～6層、9層、10層、11層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これら各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、2層、4層、10層では、プラント・オパール密度が3,000個/g以上と高い値であり、それぞれピークが認められることから、耕作層である可能性が高いと考えられる。

(3) 第97次調査：A地点の2層～5b層、7a層、8層、B地点の6層と7b層、C地点の7a層、D地点の5a層と7a層、E地点の5a層と7a層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これら各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、A地点の2層と4層および7a層、B地点の6層と7b層、C地点の7a層、D地点の5a層と7a層、E地点の5a層では、プラント・オパール密度が3,000個/g以上と高い値であり、それぞれピークが認められることから、いずれも耕作層である可能性が高いと考えられる。

(4) 第98次調査：2層、3層、4層、6層、7層、8層、9a層、9b層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これら各層において稲作が行われていた可能性が考えられる。とくに2層、3層、4層では、プラント・オパール密度が10,000個/g前後と非常に高い値であることから、いずれも耕作層と判断される。また8層でも密度が3,000個/g以上であり、ピークが認められることから、耕作層である可能性が高いと考えられる。

(5) 第99次調査：I区西壁の2層～12層、同東壁の14層、III区北壁の3層～10a層、12層、13層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これら各層が耕作層であった可能性が考えられる。このうち、I区西壁の2層では、プラント・オパール密度が30,000個/g弱と非常に高い値であることから耕作層と判断される。また、同3層、7a層、III区北壁の3層、7層、8層、12層では密度が3,000個/g以上であり、ピークも認められることから、耕作層である可能性が高いと考えられる。

6. まとめ

富沢遺跡第95次、96次、97次、98次、99次調査についてプラント・オパール分析を行った。その結果、検出された水田遺構(98次調査の2層と3層、99次調査の3層、5a層、7層、7a層、8層、12層、14層)からはそれぞれイネのプラント・オパールが検出されたことから、各遺構において稲作が行われていたことが分析的に確認された。なお、これら以外では、95次調査の2層、3層、4a層、4b層、96次調査の2層、4層、10層、97次調査A地点の2層、4層、7a層、B地点の6層、7b層、C地点の7a層、D地点の5a層、7a層、E地点の5a層、7a層、98次調査の4層と8層、99次調査の2層と3層についても稲作跡である可能性が高いと判断された。

文献

- 杉山真二・藤原宏志(1987)川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山一古環境編ー、川口市遺跡調査会報告、10、p.281-298。
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー、考古学と自然科学、9、p15-29。

- 藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）—福岡・板付遺跡（夜白式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O.sativa L.*) 生産総量の推定—。考古学と自然科学, 12, p29-41。
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p73-85。

表1 富沢運輸第95次調査のプラント・オーバール分析結果

表2 富沢運輸第96次調査のプラント・オーバール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	栄養												検出密度(単位: ×100個/g)
	2	3	4a	4b	5a	5b	6	8b	8c	9a	9c	10	
イネ キビ粉(ヒエ穀など)	60	84	42	74	13	12	14						
ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	20	6	14	13	92	22	26	21	28	20	11		
タケ面粉(おもにホダサ粉)	245	166	163	216	185	242	226	229	146	85	113	219	127

分類群 / 試料	栄養												検出密度(単位: kg/m ²)
	2	3	4a	4b	5a	5b	6	8b	8c	9a	9c	10	
イネ (イネ粉)	1.76	2.48	1.25	2.18	0.40	0.36	0.42						
キビ粉(ヒエ穀など)	0.62	0.87	0.44	0.76	0.14	0.15		0.07					
ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	1.26	0.35	0.89	0.45	5.80	1.39	1.38	1.64	1.33	1.78	1.27	0.70	
タケ面粉(おもにホダサ粉)	0.25	0.28	0.35	0.17	0.44	0.17	0.27	0.16	0.26	0.09	0.25	0.07	

分類群 / 試料	指定生産量(単位: kg/m ² ・cm)												検出密度(単位: kg/m ²)
	イネ (イネ粉)	キビ粉 (ヒエ穀など)	ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	タケ面粉(おもにホダサ粉)	イネ (イネ粉)	キビ粉 (ヒエ穀など)	ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	タケ面粉(おもにホダサ粉)	イネ (イネ粉)	キビ粉 (ヒエ穀など)	ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	タケ面粉(おもにホダサ粉)	
イネ キビ粉(ヒエ穀など)	1.76	2.48	1.25	2.18	0.40	0.36	0.42		0.21				
ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	0.62	0.87	0.44	0.76	0.14	0.15		0.07					
タケ面粉(おもにホダサ粉)	1.18	0.89	0.78	1.04	0.74	1.16	1.09	1.10	0.67	0.41	0.54	1.05	0.61

表3 富沢運輸第97次調査のプラント・オーバール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	栄養												検出密度(単位: kg/m ²)	
	2	4	5b	6	7a	8	9	6	7b	8	5a	7a	7b	
イネ キビ粉(ヒエ穀など)	61	72	26	31	6			29	36		48	40	33	
ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	20	20	13	55	38	114	34	29	71	54	90	68	26	
タケ面粉(おもにホダサ粉)	27	26	13	6	15	55	14	18	6	13	26	33	45	27
タケ面粉(おもにホダサ粉)	88	72	90	42	81	96	55	50	117	52	30	84	12	79

分類群 / 試料	指定生産量(単位: kg/m ² ・cm)												検出密度(単位: kg/m ²)	
	イネ (イネ粉)	キビ粉 (ヒエ穀など)	ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	タケ面粉(おもにホダサ粉)	イネ (イネ粉)	キビ粉 (ヒエ穀など)	ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	タケ面粉(おもにホダサ粉)	イネ (イネ粉)	キビ粉 (ヒエ穀など)	ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	タケ面粉(おもにホダサ粉)		
イネ キビ粉(ヒエ穀など)	1.78	2.13	0.75	0.32	0.18			0.84	1.07		1.41	1.16	0.97	
ヨシ穀 ワシタケ粉(ヒエ穀など)	0.62	0.75	0.26	0.32	0.06			0.29	0.38		0.49	0.41	0.34	
タケ面粉(おもにホダサ粉)	1.27	1.25	0.81	3.49	2.37	7.21	2.16	1.84	4.51	3.38	5.67	1.31	2.08	2.35
タケ面粉(おもにホダサ粉)	0.39	0.33	0.16	0.08	0.68			0.18	0.18		0.22	0.08	0.16	
タケ面粉(おもにホダサ粉)	0.42	0.35	0.43	0.20	0.39	0.46	0.26	0.24	0.56	0.25	0.14	0.40	0.06	0.38

表4 富沢選跡第95次調査のプラント・オハール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	指定生産量(単位: kg/m ² ·cm)									
	2	3	4	5	6	7	8	9a	9b	10a
イネ キビ類(ヒエ属など)	153	99	103	7	14	32	22	13		
ヨシ属 ヨシ類(ススキ属など)										
ウシクサ属 ウシクサ類(ススキ属など)										
ソノリ属 ソノリ類(ホモニスチラ属)	118	73	76	27	35	21	63	29	44	

表5 富沢選跡第99次調査のプラント・オハール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	指定生産量(単位: kg/m ² ·cm)									
	1区西端	1区東端	2区北端	2区南端	3区北端	3区南端	4区北端	4区南端	5区北端	5区南端
イネ キビ類(ヒエ属など)	250	38	20	85	14	36	21	13	45	72
ヨシ属 ヨシ類(ススキ属など)	27	13	7	33	191	26	7	177	122	69
ウシクサ属 ウシクサ類(ススキ属など)	7	7	7	7	14	11	7	6	12	39
ソノリ属 ソノリ類(ホモニスチラ属)	145	82	93	92	68	117	84	59	86	76

指定生産量(単位: kg/m²·cm)

イネ (イネ属)	指定生産量(単位: kg/m ² ·cm)									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ キビ類(ヒエ属など)	8.53	1.11	0.59	2.54	0.40	0.77	0.61	9.37	1.32	2.13
ヨシ属 ヨシ類(ススキ属など)	2.99	0.39	0.21	0.88	0.14	0.27	0.22	0.13	0.66	0.74
ウシクサ属 ウシクサ類(ススキ属など)	1.70	0.20	0.42	2.07	12.63	1.64	0.44	11.15	7.68	4.37
ソノリ属 ソノリ類(ホモニスチラ属)	0.08	0.08	0.08	0.17	0.33	0.56	0.40	0.28	0.41	0.36
タケ類 タケ類(ホモニスチラ属)	0.71	0.29	0.45	0.44	0.28	0.41		0.39	0.19	0.44

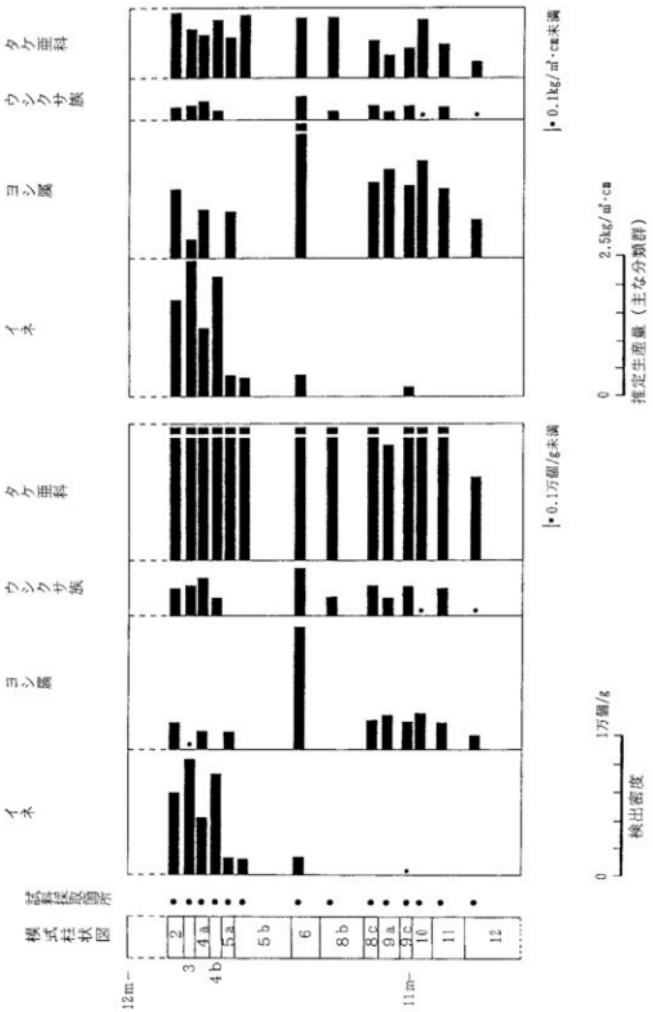


図1 95次 葦畠のプラント・オバール分析結果
※主な分類群について表示。

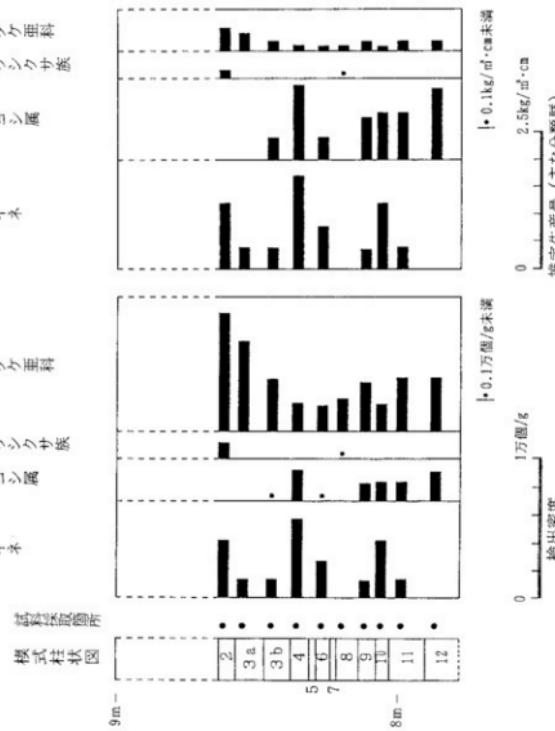


図2 96点、南極のプラント・オハール分析結果
※主な分類群について表示。

試験採取箇所
模式柱状図

イネ
ヨシ属
ウシクサ族
タケ属科
イネ
ヨシ属
ウシクサ族
タケ属科

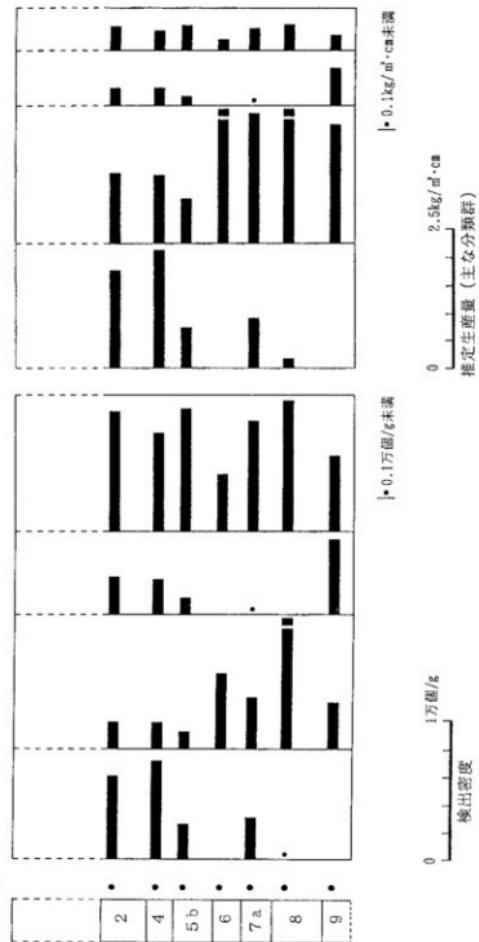


図3 976年A地点のプラント・オバール分析結果
●:むか分類群について表示。

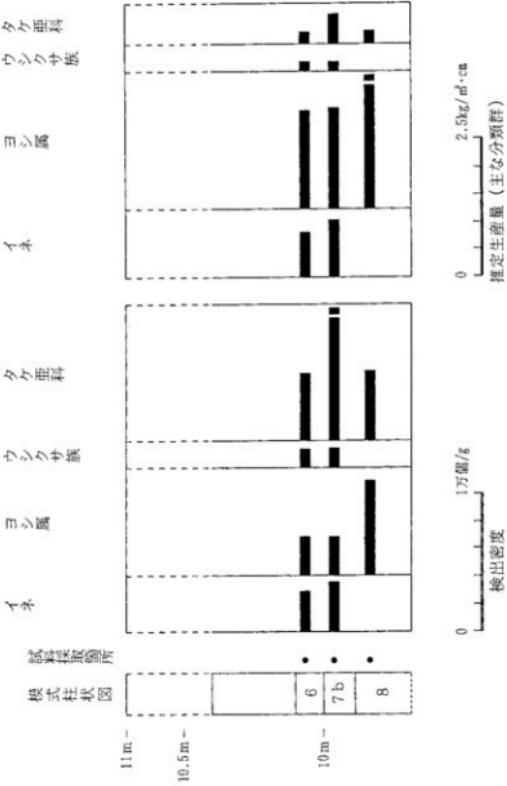


図4 97次、B地点のプラント・オバール分析結果
主な分類群について表示。

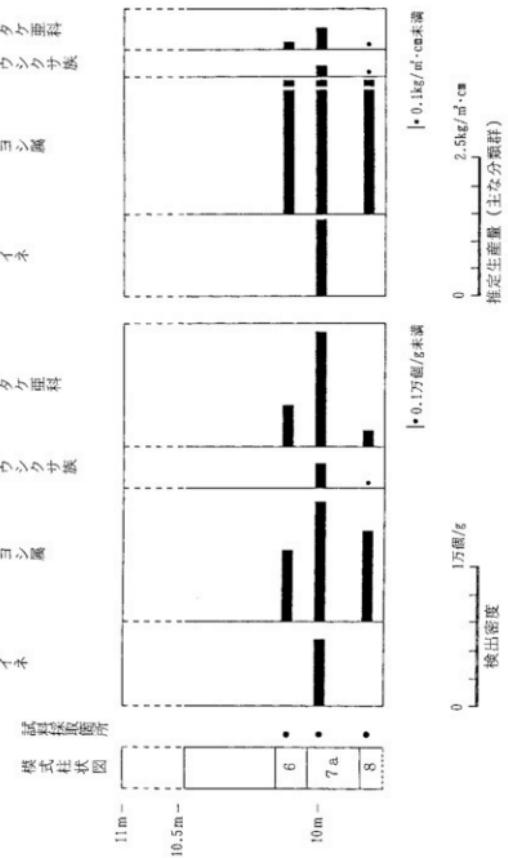


図5 97次、C地点のプラント・オバール分析結果
※主な分類群について表示。

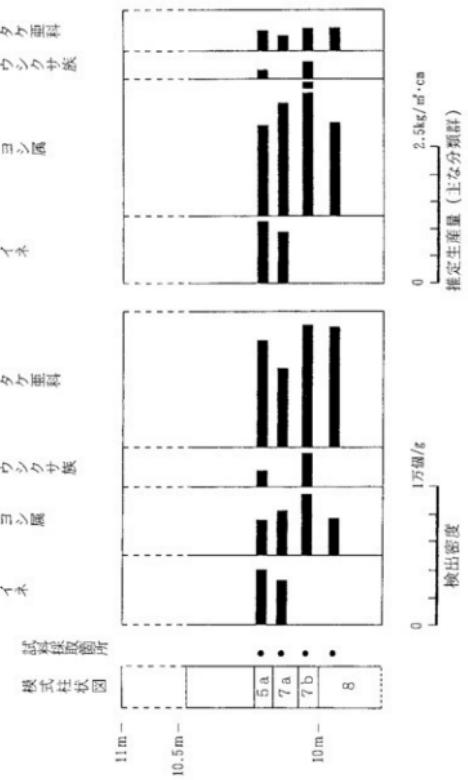


図6 97次、D地点のプラント・オハーリ分析結果
＊主な分類群について表示。

試験採取所
模式柱状図

イネ
ヨシ属
タケ
ウシクサ族
タケ
ヨシ属
イネ

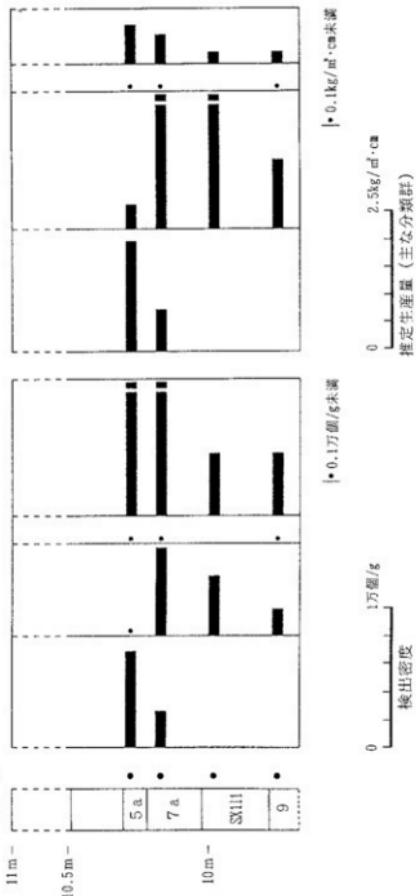


図7 97次、E地点のプラント・オハール分析結果
※主な分類群について表示。

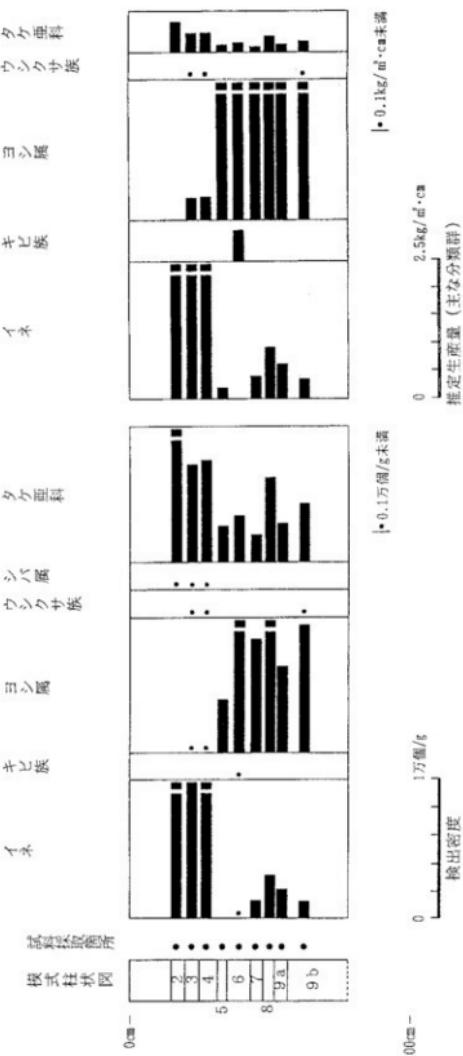


図 8 96次調査のプラント・オハール分析結果
※主な分類群について表示。

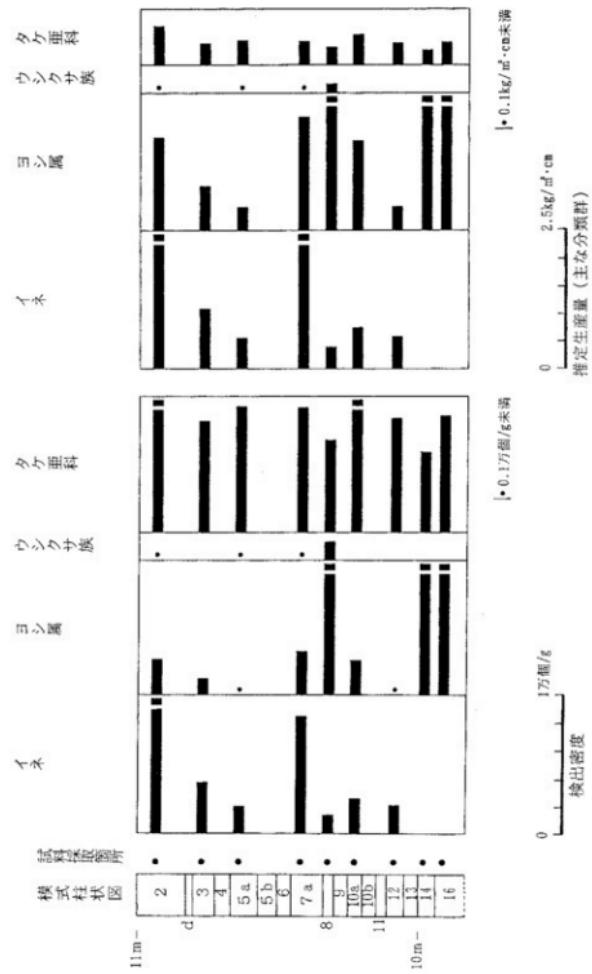


図9 99次、1区西壁のプラント・オバール分析結果
※主な分類群について表示。

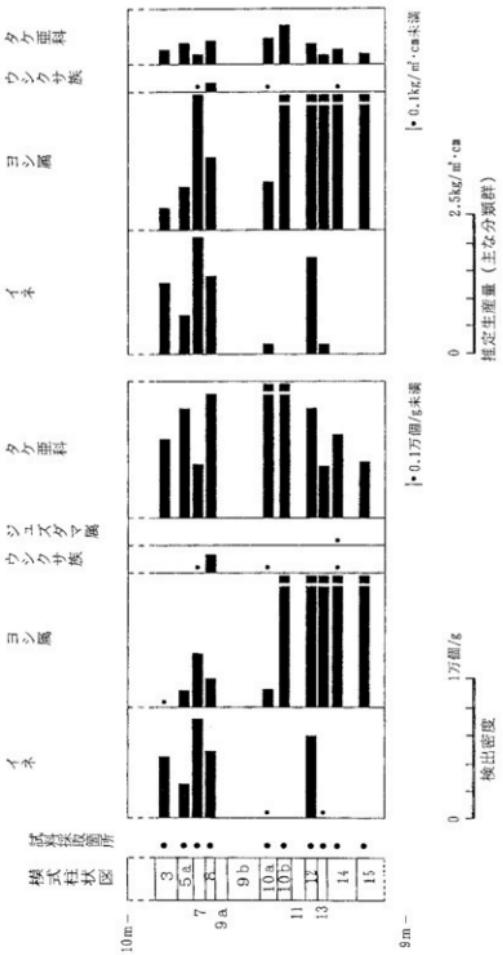
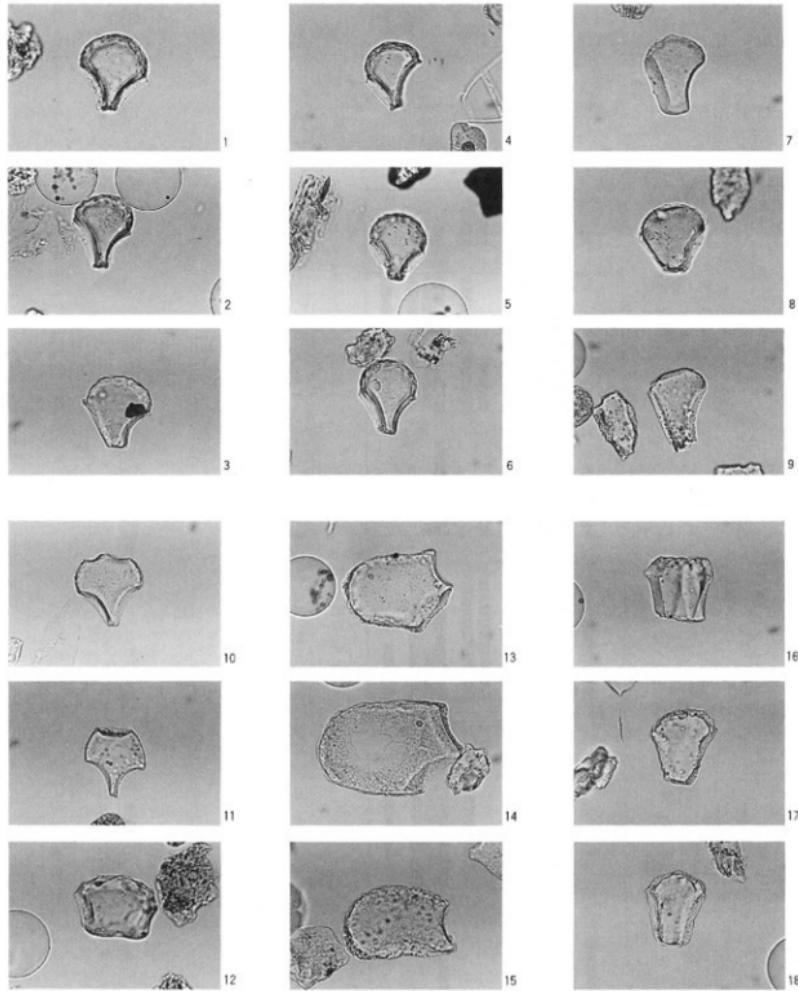


図10 99年、III区北壁のプラント・オバール分析結果
主な分類群について表示。



植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

No	分類群	地點	試料名	No	分類群	地點	試料名
1	イネ科	95次, 東壁	4 b層	10	シバ族	98次	2 層
2	イネ科	96次, 南壁	10 層	11	シバ族	98次	3 層
3	イネ科	97次, A地点	4 层	12	ジュズダマ属	99次, III区北壁	14 层
4	イネ科	97次, C地点	7 a層	13	ヨシシ族	95次, 東壁	6 层
5	イネ科	98次	4 层	14	ヨシシ族	97次, A地点	8 层
6	イネ科	99次, III区北壁	12 层	15	ヨシシ族	99次, III区北壁	10 b層
7	ウシクサ族 (ススキ属)	95次, 東壁	6 层	16	タケ亜科	95次, 東壁	8 b層
8	ウシクサ族 (ススキ属)	97次, A地点	9 层	17	タケ亜科	97次, E地点	7 a層
9	ウシクサ族 (ススキ属)	97次, D地点	7 b層	18	タケ亜科	99次, III区北壁	10 b層

遺物集計表、引用・参考文献

富沢95次出土遺物集計表

博	縄文土器	弥生土器	土師器	赤陶土器	須恵器	不明土器	陶器	磁器	石器	礫	様子
1						2	4	1			
2			2		1			1			
3							1				
4			2								
5		1	1			1					
6			15			12					
7	1										
12	2							1		8	
15	2										
16										1	
18								1			
SD01			1	1							1
SD08						1					
河川跡	5	16	6	1	1	16	5	2	2	4	1
計	5	16	6	1	1	16	5	2	4	1	10

富沢96・97次出土置場集計表

層	土師器	須恵器	不明	陶器	磁器	古鉄
2	2	2	2	2	2	1
3				2	2	
計	2	2	2	4	4	1

層	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	不明	陶器	磁器	石器	石製品	櫛石器	金屬	杭
1			2									
2			7	1	2	2			1	1	1	1
3			1									
4		1	6	1								
5			18	1								
6			1					1				
7a	1								1	3		1
10								1				
16	53							2		2		
SX01	53	2	35	3	2	2	2	5	1	6	3	2
計	53	2	35	3	2	2	2	5	1	6	3	2

98次

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	陶器	磁器	焼瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	木製品	織子・貝虫	その他
1							9	6	1				2			
1b								2	1							
2		1					8	6								
3					1											
21																
22																
SD01																
SD02																
計		1	1	1		19	13	3					4			

99次1区

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	陶器	磁器	焼瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	木製品	織子	その他
1							1	3								
2									1							
6			10													
7	1	6														
8	1	1(寄ロクロ)														
10a	1															
11	6	1(施入?)				1(施入)			1							
12	85															
13	9															
14	26															
16	1															
SD01	6															
34																
35																
36			4													
側溝								1	3							
発切								1	5							
カクラン								3	10							
計	136	20								8			1			

針葉樹林

針葉樹林

針葉樹林

99次II区

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤陶土器	漆器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	焼瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	木製品	織物	その他
70a															1		
13															1		
14		1													1		
倒溝																	
カタラン							1	1	10(中世2)	3	2				2	4	
計		1				1	1	10	4	2	3				2	4	

99次III区

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤陶土器	漆器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	焼瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	木製品	織物	その他
1		5	1					3									
3		1	1	1											2 (2kg)	3	2
4		5															
6		3	5														
7		4															
14															1		
21	1														3		
24															1		針葉樹葉
25																	針葉樹葉
27																	3
28																	
倒溝																	
カタラン							1	10	21						1		
計	1	1	20	2	1	4	1	10	53	4	2	4	2	3	2	4	

引用・参考文献

- 相原淳一 1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年—仙台湾周辺の分層発掘資料を中心として」『考古学雑誌』76-1 PP 1~65 日本考古学会
- 五十嵐康洋 1992「第2章第1節 富沢遺跡第70次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（4）』仙台市文化財報告書第163集
- 太田昭夫他 1991『富沢遺跡－第30次調査報告書第1分冊 縄文～近世編』仙台市文化財報告書第149集
- 工藤哲司 1984『富沢水田遺跡 第1冊—病院建設に伴う泉崎前地区的調査報告書』仙台市文化財報告書第67集
- 佐藤 淳 1991「第2章第8節 富沢遺跡第64次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財報告書第152集
- 佐藤甲二 1989「第2章第6節 富沢遺跡第41次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財報告書第128集
- 佐藤甲二 1990a「第2章第6節 富沢遺跡第55次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（2）』仙台市文化財報告書第135集
- 佐藤甲二 1990b「富沢遺跡第49次」『富沢遺跡第49次・東寺幸遺跡第3次・青葉山A遺跡』仙台市文化財報告書第142集
- 佐藤甲二 1991「第4章 富沢地区基本順序表・層位対応関係表」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財報告書第152集
- 佐藤甲二 1993「下ノ内酒遺跡－第4次調査報告書」仙台市文化財報告書第119集
- 篠原信彦・吉岡恭兵 1989『富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書I－』仙台市文化財報告書第126集
- 主浜光朗 1988『泉崎浦遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第119集
- 田中則和他 1984『山口遺跡II』仙台市文化財報告書第61集
- 中富 洋 1989「第2章第4節 富沢遺跡第39次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財報告書第128集
- 平間亮輔 1991『富沢遺跡－第35次調査報告書』仙台市文化財報告書第150集
- 渡邊 誠 1986『富沢水田遺跡・泉崎浦地区』『年報7』仙台市文化財報告書第94集
- 須藤 隆 1990「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論功』PP243~322 伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 佐藤甲二 1997『富沢・泉崎浦・山口遺跡（10）－富沢遺跡第86次調査報告書－』仙台市文化財報告書第220集
- 東北特殊鋼式会社 1957『東北特殊鋼二十年史』
- 庄子真夫・山田一郎 1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰似ついで」『多賀城－昭和54年度発掘調査報告書概報－』宮城県多賀城跡調査研究所
- 町田他 1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51
- 町田他 1996『湖底堆積物から見た10世紀白頭山大噴火の発生時代』『日本第4紀学会講演要旨集』日本第4紀学会

調査参加者

相沢あい子、相沢かほる、齊木 吉次、赤川 広広、阿部あき子、阿部みのる、阿部美代子、壱枝 貴子、板橋 実、伊藤 清子、入間川きみ、岩井レイ子、遠藤いな子、大泉泰子、大沼みさ、小野つや子、小畠 和子、加崎みえ子、加藤けい子、金沢沙知子、熊沢 とも、小林 斎美、斎藤由美子、佐々木端晶、佐々木洋介、佐藤 幸司、佐藤 静子、佐藤とき子、佐藤よしゑ、佐野たみえ、島津レチ子、庄子かつえ、庄子 弘子、音井 聰子、音井 民子、菅田みき子、菅田わくり、音谷 裕子、菅原 弘、鈴木 いし、鈴木 鈴子、鈴木 由美、鈴木善しき、高橋たづよ、千田タイ子、千葉 茂子、對馬 悅子、宮田 是、富田美輪子、島中真知子、平坂みつえ、本郷 正、三浦たか子、三浦つよの、三浦 陽子、宮崎 都、森 ミヨノ、鏡水 劳子、横尾由記子、吉田 公治、米倉 節子、渡辺イチ子、渡辺 節子、渡辺 洋子

報告書抄録

ふりがな	とみざわ いづみさきうら やまぐちいせき						
書名	富沢・泉崎浦・山口遺跡						
副書名	富沢遺跡第95次～99次・101次調査						
巻次	11						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第221集						
編著者名	五十嵐康洋・吉岡恭平・佐藤洋・我妻仁・伊藤孝行						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-91 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214 8893~4						
発行年月日	1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号						
富沢遺跡 第95次調査	宮城県仙台市太白区 長町一丁目21-8	041009	01369	38°13'04"'	140°52'22"	1996.04.10 ～1996.06.14	252 共同住宅建設に 伴う事前調査
富沢遺跡 第96次調査	宮城県仙台市太白区 長町三丁目15-3・4・5・6	041009	01369	38°13'08"'	140°52'53"'	1996.06.26 ～1996.08.07	133 共同住宅建設に 伴う事前調査
富沢遺跡 第97次調査	宮城県仙台市太白区 長町一丁目20-2	041009	01369	38°13'02"'	140°52'28"'	1996.09.05 ～1996.11.26	240 共同住宅建設に 伴う事前調査
富沢遺跡 第98次調査	宮城県仙台市太白区 長町七丁目211	041009	01369	38°13'17"'	140°52'38"'	1996.06.19 ～1996.07.24	102 ビル建設に伴う 事前調査
富沢遺跡 第99次調査	宮城県仙台市太白区 長町七丁目401	041009	01369	38°13'18"'	140°52'43"'	1996.08.19 ～1996.12.18	1,026 道路建設に伴う 事前調査
富沢遺跡 第101次調査	宮城県仙台市太白区 長町五丁目10-46	041009	01369	38°13'23"'	140°53'08"'	1996.08.01 ～1996.08.02	125 共同住宅建設に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
富沢遺跡 第95次調査	水田跡	現代～縄文	畠跡(中世・平安)、溝跡(弥生) 掘立柱建物跡(近世以降)	陶器・磁器・土師器 弥生土器・縄文土器・石器			
富沢遺跡 第96次調査	水田跡	現代～弥生	水田跡(現在～弥生)	陶器・磁器・古鏡			
富沢遺跡 第97次調査	水田跡 散布地	現代～弥生・ 縄文	水田跡(現在～弥生)	陶器・磁器・木製品・石器 石製品・礫石器・弥生土器・縄文土器			
富沢遺跡 第98次調査	水田跡	現代～弥生	水田跡(現在～弥生)	陶器・磁器・金屬製品			
富沢遺跡 第99次調査	水田跡	現代～後期旧 石器	水田跡(現在～弥生)	陶器・磁器・土師器・弥生土器・縄文土器 石器・礫石器・木製品・金屬製品			
富沢遺跡 第101次調査	水田跡	現代～弥生	水田土壤(現在～弥生) 溝跡(近世以降)				

仙台市文化財調査報告書第221集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(II)

——富沢遺跡第95~99・101発掘調査報告書——

平成10年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
